柏北部東地区
埋蔵文化財発掘調査報告書3

―柏市原畑遺跡―
縄文時代以降編1

平成23年3月

独立行政法人　都市再生機構
財団法人　千葉県教育振興財団

柏北部東地区
埋蔵文化財発掘調査報告書3

―柏市原畑遺跡―

縄文時代以降編1

SI011出土の黒浜式土器

各遺構出土の黒浜式土器（附加条縄文）

序　文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第660集として、独立行政法人都市再生機構の柏北部東地区土地区画整理事業に伴って実施した柏市原畑遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文海進から海退に向かう縄文時代前期中頃の貝塚を伴う集落跡が発見されており、既に公表されている柏市駒形遺跡の成果に加え、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な資料を提供することができました。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成23年３月

財団法人　千葉県教育振興財団

理事長　赤　羽　　良　明

凡　例

1　本書は、独立行政法人都市再生機構による柏北部東地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県柏市小青田字小船新田40ほかに所在する原畑遺跡（遺跡コード217－021）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆・編集は調査研究部長　及川淳一、調査研究部副部長兼整理課長　西川博孝の指導のもと、執筆の一部を落合章雄、大岩桂子が行ったほかは、上守秀明が担当した。なお、整理作業の実施にあたり、田中和之・小宮雪晴（蓮田市教育委員会）、奥野麦生（白岡町教育委員会）、新井和之、高野博光、折原繁（千葉県立房総のむら）、石田守一・岡村眞文（我孫子市教育委員会）、関根孝夫・大塚広往・大森隆志（松戸市立博物館）、峰村　篤（松戸市教育委員会）の各氏に御指導、御協力を得た。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構及び柏市教育委員会の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は以下のとおりである。

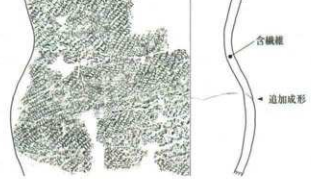
第４図　国土地理院発行　1/50,000地形図「野田」（N1－54－25－1）、龍ヶ崎（N1－54－19－13）

8　遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和48年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、測量値は日本測地系による。

10　遺物分布図では土器（●）、石器（□）とした。

11　土器実測図で説明が必要なものは以下に示した。



本文目次

序文
凡例
第1章　はじめに……1
　第1節　調査の概要……1
　　1　調査の経緯と経過……1
　　（1）発掘調査……1
　　（2）整理作業……4
　　2　調査の方法……4
　第2節　遺跡の位置と環境……5
　　1　遺跡の位置と地理的環境……5
　　2　周辺遺跡……5
第2章　検出された遺構・遺物……9
　第1節　縄文時代……9
　　1　概要……9
　　2　出土土器の分類……9
　　3　竪穴住居跡……15
　　4　土坑……59
　　5　陥穴……61
　　6　遺構外出土土器……64
　　7　土器以外の出土遺物……70
　　（1）石器……70
　　（2）貝刃……79
　　（3）土製品……79
　　8　貝層出土の動植物遺存体……80
　　（1）分析方法……80
　　（2）貝類……81
　第2節　古墳時代……82
　　1　概要……82
　　2　竪穴住居跡……82
　　3　遺構外出土の埴輪……85
第3章　まとめ……99
　第1節　黒浜式の縄文原体について……99
　第2節　黒浜式の様相について……100

挿図目次

第1図　柏北部東地区遺跡位置図……2
第2図　調査区域と周辺地形……3
第3図　グリッドの設定……4
第4図　周辺遺跡分布図……7
第5図　遺構全体図……10
第6図　遺構分布図（1）……11
第7図　遺構分布図（2）……12
第8図　遺構分布図（3）……13
第9図　遺構分布図（4）……14
第10図　SI001（1）……16
第11図　SI001（2）……17
第12図　SI002……18
第13図　SI003（1）……20
第14図　SI003（2）……21
第15図　SI003（3）……22
第16図　SI004……23
第17図　SI005（1）……25
第18図　SI005（2）……26
第19図　SI006……28
第20図　SI007……29
第21図　拡大写真……30
第22図　SI008（1）……31
第23図　SI008（2）……32
第24図　SI008（3）……33
第25図　SI009……35
第26図　SI010……36
第27図　SI011（1）……38
第28図　SI011（2）……39
第29図　SI011（3）……40
第30図　SI011（4）……41
第31図　SI012……43
第32図　SI013……44
第33図　SI014（1）……45
第34図　SI014（2）……46
第35図　SI014（3）……47
第36図　SI015（1）……48
第37図　SI015（2）……49
第38図　SI016（1）……51
第39図　SI016（2）……52
第40図　SI017（1）……54
第41図　SI017（2）……55
第42図　SI018……56
第43図　SI019（1）……57
第44図　SI019（2）……58
第45図　SI019（3）……59
第46図　SK001・SK002・SK003……60
第47図　SK004・SK005……62
第48図　SK006・SK007・SK008……63
第49図　遺構外出土土器（1）……64
第50図　遺構外出土土器（2）……66
第51図　遺構外出土土器（3）……67
第52図　遺構外出土土器（4）……69
第53図　石器（1）……71
第54図　石器（2）……72
第55図　石器（3）……73
第56図　石器（4）……75
第57図　石器（5）……76
第58図　石器（6）……77
第59図　石器（7）……78
第60図　貝刃……79
第61図　土器片錘・土製品……79
第62図　耳飾り……79
第63図　貝種組成……94
第64図　SI020……95
第65図　SI021……97
第66図　埴輪……98
第67図　縄文原体の重量比……99
第68図　黒浜式土器（1）……101
第69図　黒浜式土器（2）……102
第70図　黒浜式土器（3）……103

表目次

第1表　発掘調査一覧……1
第2表　周辺遺跡一覧……8
第3表　遺構一覧……80
第4表　縄文土器観察表……81
第5表　縄文石器観察表……92
第6表　貝サンプル一覧……93
第7表　動物遺存体種名一覧……93
第8表　貝種組成……94
第9表　貝類計測値分布……94

図版目次

巻首図版　SI011出土の黒浜式土器、
　　各遺構出土の黒浜式土器（附加条縄文）
図版1　遺跡周辺航空写真
図版2　竪穴住居跡1
図版3　竪穴住居跡2
図版4　竪穴住居跡3
図版5　竪穴住居跡4・土坑・陥穴
図版6　縄文土器1
図版7　縄文土器2
図版8　縄文土器3
図版9　縄文土器4
図版10　縄文土器5
図版11　縄文土器6
図版12　縄文土器7
図版13　縄文土器8
図版14　縄文土器9
図版15　縄文土器10
図版16　縄文土器11
図版17　縄文土器12
図版18　縄文土器13
図版19　縄文土器14
図版20　縄文土器15
図版21　縄文土器16
図版22　縄文土器17
図版23　縄文土器18
図版24　縄文土器19
図版25　縄文土器20
図版26　縄文土器21
図版27　縄文土器22
図版28　縄文土器23
図版29　縄文土器24
図版30　縄文土器25
図版31　縄文土器26
図版32　縄文土器27
図版33　縄文土器28
図版34　文様拡大写真（1）
図版35　文様拡大写真（2）
図版36　石器1
図版37　石器2
図版38　石器3
図版39　土製品・貝刃・貝類
図版40　古墳時代出土遺物

第1章　はじめに

第1節　調査の概要

1　調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構は、常磐新線（つくばエクスプレス）建設に関連して「柏北部東地区土地区画整理事業」を計画した。実施にあたり、千葉県教育委員会へ事業予定地内の埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて照会した結果、予定地内には花前Ⅰ遺跡、花前Ⅱ遺跡、花前Ⅲ遺跡、矢船Ⅰ遺跡、矢船Ⅱ遺跡、館林Ⅱ遺跡、駒形遺跡、富士見遺跡、大松遺跡、原畑遺跡、小山台遺跡、寺下前遺跡、宮前遺跡、八反目台遺跡の計14遺跡（第1図）が所在する旨、回答があった。千葉県教育委員会は独立行政法人都市再生機構とその取扱いについて協議した結果、現状換地及びその他の事由により現状保存が可能な部分を除き記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査を財団法人千葉県教育振興財団に委託することになった。

今回報告する内容は、平成11年9月から平成21年11月まで断続的に行われた第1次から第23次までの発掘調査（第2図）のうち、縄文時代以降を対象として平成20・22年度に実施した整理作業の成果である。調査対象面積は74,989㎡で、上層が9,545㎡の確認調査と2,694㎡の本調査、下層が3,714㎡の確認調査と4,296㎡の本調査を実施した。

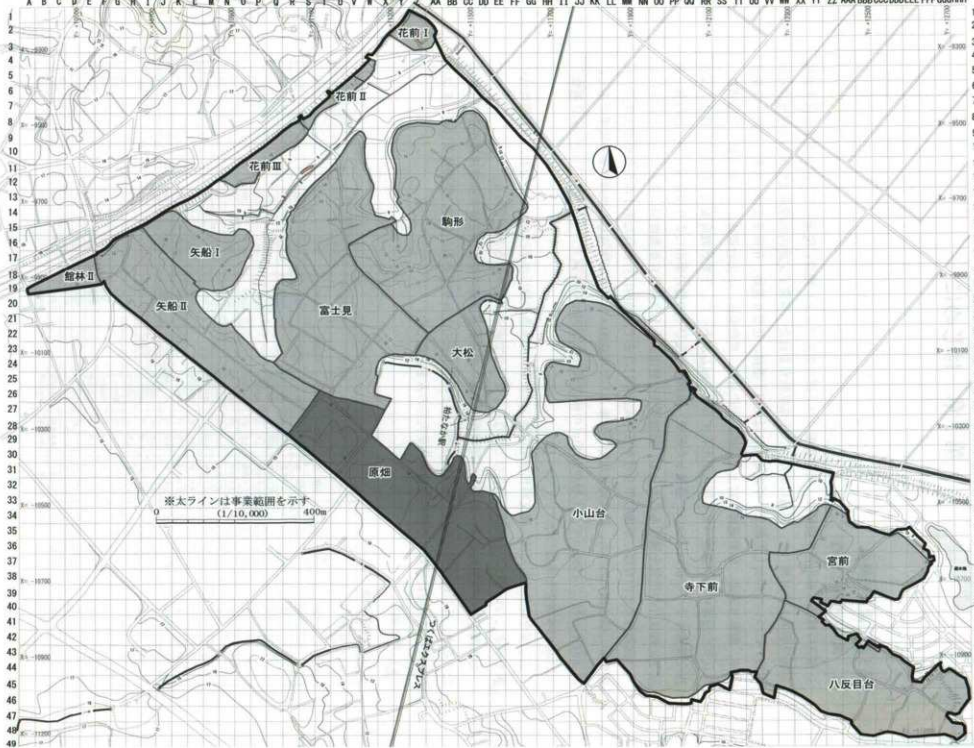
主な調査成果としては、縄文時代前期中葉に形成された集落の検出が挙げられる。なお、旧石器時代の調査成果については、上層調査報告分と異なる年度区分で別途報告される予定である。

発掘調査及び整理作業は、調査部（現調査研究部）西部調査事務所及び調査研究部整理課がその任にあたったが、各年度の担当職員、作業内容等は以下の第1表のとおりである。なお、整理作業に関しては、縄文時代以降編に携わった担当職員と作業内容のみを記載した。

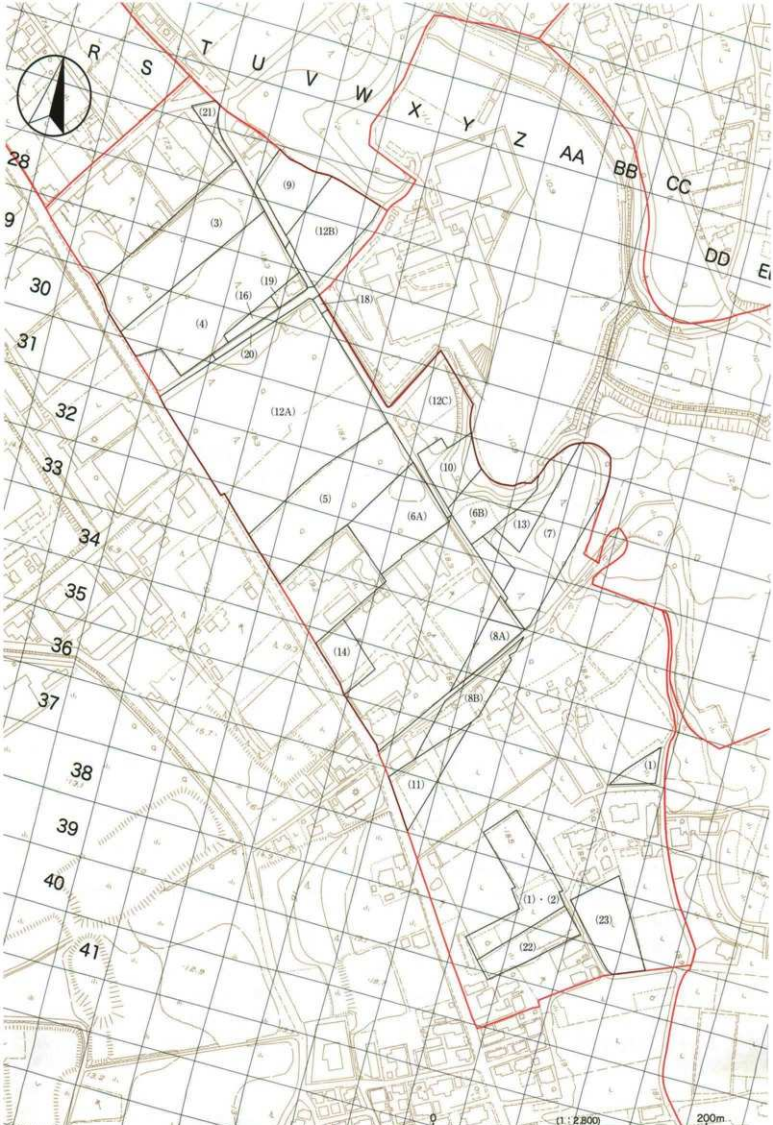
（1）発掘調査

第1表　発掘調査一覧

調査区	年度	期間	部長	所長	担当者	対象面積(㎡)	確認調査（㎡）		本調査（㎡）	
							上層	下層	上層	下層
（1）	平成11	11.9.13～11.11.30	沼澤　豊	及川淳一	都　淳一・竹田良男	3819.0	500.0	234.0	0.0	198.0
（2）		12.1.5～12.3.27								
（3）	平成12	12.9.18～12.12.22	沼澤　豊	及川淳一	横山　仁・中道衡一	5240.0	590.0	365.0	270.0	192.0
（4）	平成13	13.5.1～13.7.13	佐久間豊	田坂　浩	横山　仁	5628.0	563.0	328.0	808.0	0.0
（5）	平成13	13.5.28～13.7.31	佐久間豊	田坂　浩	織田良昭	5130.0	526.0	308.0	149.0	210.0
（6）	平成13	13.8.1～13.9.28	佐久間豊	田坂　浩	織田良昭	4609.0	490.0	228.0	0.0	256.0
（7）	平成13	13.10.1～13.11.29	佐久間豊	田坂　浩	織田良昭	4100.0	440.0	248.0	0.0	283.0
（8）	平成13	13.10.1～13.11.29	佐久間豊	田坂　浩	横山　仁	2650.0	363.0	132.0	0.0	0.0
（9）	平成13	13.12.3～14.1.31	佐久間豊	田坂　浩	織田良昭	1844.0	198.0	116.0	0.0	0.0
（10）	平成13	14.3.1～14.3.29	佐久間豊	田坂　浩	織田良昭	1500.0	154.0	104.0	0.0	0.0
（11）	平成14	14.7.29～14.9.6	倉木　勝	田坂　浩	織田良昭	1699.0	373.0	68.0	0.0	0.0
（12）	平成14	14.9.9～15.3.27	倉木　勝	田坂　浩	織田良昭	19909.0	2052.0	860.0	569.0	1944.0
（13）	平成14	15.3.3～15.3.27	倉木　勝	田坂　浩	福生一夫	1700.0	176.0	108.0	0.0	0.0
（14）	平成15	15.9.1～15.9.12	倉木　勝	田坂　浩	鳴田清司	800.0	94.0	32.0	0.0	0.0
（15）	平成15	16.2.1～16.3.26	倉木　勝	田坂　浩	鳴田清司・木下圭司	10911.0	1194.0	462.0	750.0	900.0
（16）	平成16	16.4.6～16.4.12	矢戸三男	田坂　浩	川島利通	373.0	50.0	12.0	0.0	0.0
（17）	平成16	16.6.9～16.6.16	矢戸三男	田坂　浩	鳴田清司	183.0	32.0	8.0	0.0	0.0
（18）	平成16	16.8.26～16.8.31	矢戸三男	田坂　浩	岡田光広	55.0	20.0	3.0	0.0	0.0
（19）	平成16	17.1.6～17.1.21	矢戸三男	田坂　浩	久高将勝	279.0	279.0	12.0	0.0	0.0
（20）	平成18	18.5.22～18.6.2	矢戸三男	田坂　浩	渡邉高弘	667.0	667.0	26.0	0.0	0.0
（21）	平成19	19.9.14～19.10.2	矢戸三男	及川淳一	福生一夫	421.0	421.0	16.0	0.0	0.0
（22）	平成21	21.7.6～21.7.27	及川淳一	橋本勝雄	沖松信隆	1404.0	140.0	52.0	0.0	0.0
（23）	平成21	21.10.14～21.11.20	及川淳一	橋本勝雄	沖松信隆	2068.0	223.0	92.0	148.0	313.0



第Ⅰ図　柏北部東地区遺跡位置図



第２図　調査区域と周辺地形

（2）整理作業

平成20年度

期　間　平成20年９月１日～平成21年３月31日

部長　大原正義

課長　高田　博

担当職員　主席研究員　伊藤智樹、上席研究員　上守秀明

対　象　原畑遺跡（１）～（19）

内　容　記録整理、分類・選別、接合・復元、実測・拓本の一部

平成22年度

期　間　平成22年４月１日～平成23年３月31日

部長　及川淳一

副部長兼整理課長　西川博孝

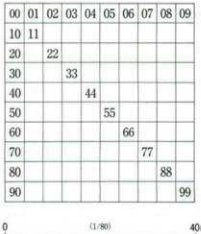
担当職員　上席研究員　上守秀明(全体)・落合章雄(石器)、整理技術員　大岩桂子(古墳遺物)

対象・内容　原畑遺跡（１）～（19）　実測・拓本の一部～報告書の刊行

原畑遺跡（20）～（23）　記録整理～報告書の刊行

2　調査の方法

発掘調査の開始に当たり、調査対象区域に国土方眼座標（第Ⅸ座標系）に基づいて40m×40mの大グリッドを設定し、さらにその大グリッド内を４m×４mに分割し、100個の小グリッドに細分した。大グリッドは西から東へA、B、C、・・・、北から南へ1、2、3、・・・と記号を付け、A1、B2、・・・と呼称した。小グリッドは北西隅を起点として西から東へ00、01、02、・・・、北から南へ00、10、20、・・・と番号を付けた。これらを組み合わせて表すと、例えばW33－09のような呼称となる（第３図）。



第３図　グリッドの設定

発掘調査は上層の確認調査・本調査に続いて、下層の確認調査・本調査へと順に実施した。上層の調査は、対象面積の10％を原則にトレンチを設定し遺構及び遺物の分布状況を調べ、必要な場合は本調査範囲の決定を受け本調査を実施した。遺構の調査は表土除去後、覆土層観察用のベルトを設定し掘り下げ、覆土層断面図、遺物分布図、遺構平面図など必要な記録を作成した。

本調査にあたっては，調査年次毎に遺構種別毎の通し番号が付されていた。各遺構の種別は竪穴住居跡にはSI、土坑等にはSKが付されていたが、一部、種別の混同も認められた。各遺構とも年次毎に001から番号が付く煩雑さがあるため、整理段階で23次に亘る調査範囲にある遺構を種別毎に概ね北西部から南西部の順でまとめ直した遺構番号に変更した。なお、新旧対応表は遺構属性表（第３表）のとおりである。上層の本調査終了後、調査対象面積の４％を原則にグリッドを設定し、下層の確認調査を実施した。その

結果、一定の石器の分布状況が認められたものについては本調査範囲を確定し、本調査を実施した後、発掘調査を全て終了した。

第2節　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境（第2図）

千葉県北部に展開する下総台地は、広範な関東平野の一部を形成する。原畑遺跡が所在する台地は、下総台地北西部に属する柏市域の北東部に位置する。この下総台地北西部は現在の利根川・江戸川水域を介して埼玉・茨城両県に接し、巨視的には関東平野の中央部近くまで貫入するかのような位置にある。台地には大小河川やその支流によって開析された幾多の谷地形が入り込み複雑な地形を呈し、広大な平坦面を幾つかの台地に区分する。下総台地南東部は標高130m以上と最も高く、その付近では境界を接する上総丘陵の標高を一時凌駕するが、北西部に向かい漸次低平となり遺跡近隣の県北西端では標高10m前後となる。

原畑遺跡が所在する台地は標高約17m～19mを測り、沖積層からなる低地との比高差は最大でも10mを超えることはない。原畑遺跡が所在する台地は、古鬼怒湾に属する古常陸川最奥部の柏・我孫子低地の北西端に面していると言え、原畑遺跡と駒形遺跡・大松遺跡・富士見遺跡・小山台遺跡の間に北側から貫入してくる支谷の最奥部に位置している。この台地をさらに大きく見れば、古常陸川最奥部柏・我孫子低地の小支谷群と、手賀・印旛沼湾奥部手賀沼低地の大きな支谷の一つである「地金堀」に挟まれた北西から南東方向に続くベルト状の台地の一部に位置する。いわゆる縄文海進の盛期には、付近の谷には谷奥干潟が形成されていたと考えられている。

2　周辺遺跡の概要（第4図・第2表）

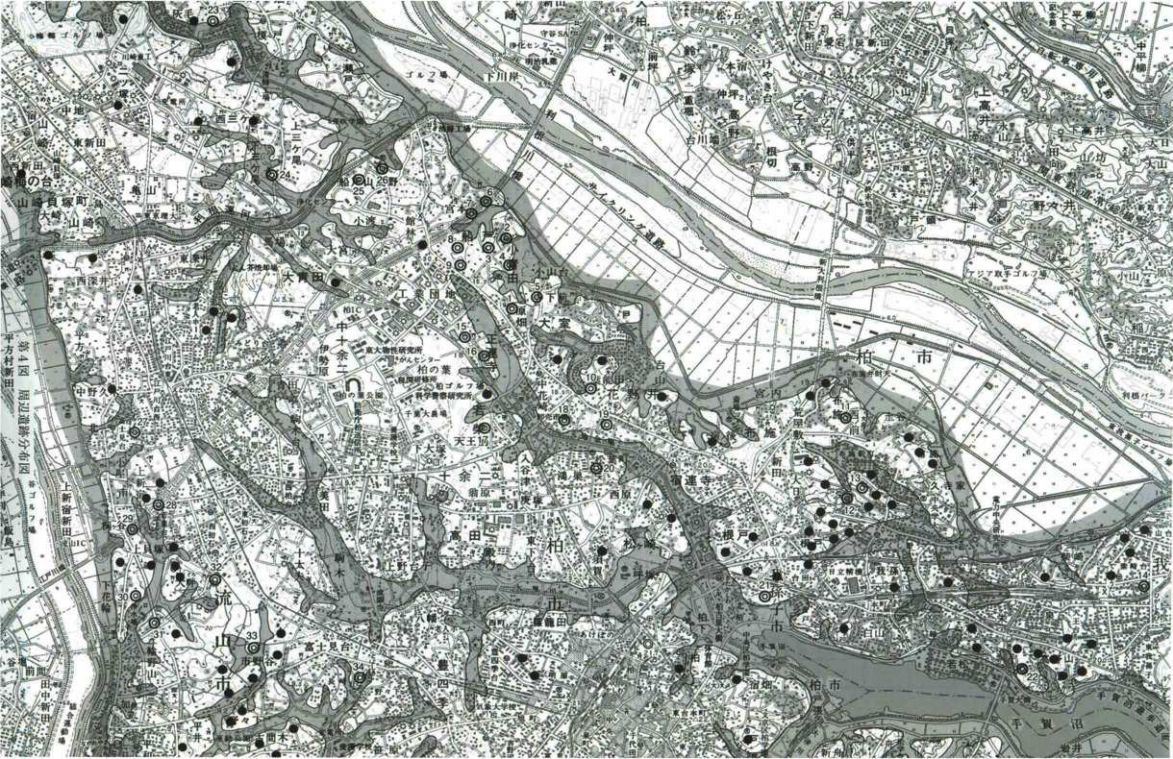
周辺遺跡については、本事業の既報告2冊において時代別の概要及び縄文時代遺跡に絞った概要を述べている。原畑遺跡が黒浜式期の集落遺跡であることを考慮して、今回は取り扱う範囲を多少拡大して原畑遺跡周辺の黒浜式期の遺跡を概括する。関東地方において、黒浜式は前期羽状縄文系土器群の中で最も濃密で広範な遺跡分布を示す土器型式であるが、本遺跡が所在する千葉県北西部地区のそれは377遺跡を数え、とりわけ顕著である。5万分の1の地図の範囲にある原畑遺跡周辺の黒浜式期の遺跡について、全ての位置（第4図：主要遺跡◎、その他●）と主要遺跡の一覧表（第2表）を示しておいたが、以下に水系ごとの傾向などについて概括する。

原畑遺跡（1）、駒形遺跡（2）、富士見遺跡（3）、大松遺跡（4）、小山台遺跡（5）、花前Ⅰ遺跡（6）、花前Ⅱ遺跡（7）、矢船Ⅰ遺跡（8）、矢船Ⅱ遺跡（9）は古常陸川湾奥部：柏我孫子低地の水系では北西端に位置する。これらは、当該地区事業及び常磐自動車道建設事業に伴う大規模な発掘調査によって、遺跡内容が明らかにされている。早前期に限って遺跡群を瞥見してみると、駒形遺跡は黒浜式期を含み早期後半～後期後半までの住居跡群が長期断続的に検出されているが、他は富士見遺跡、大松遺跡を代表例として黒浜式期を主体とする遺跡、花前Ⅰ・矢船Ⅱ遺跡などのように黒浜式～浮島・諸磯式期の住居跡が検出された遺跡が所在するという特徴がある。一部発掘調査が継続中であるが、この遺跡群の黒浜式期の住居跡数を加えていくと、将来的には200軒前後になると予想されることから、当該地域の拠点集落であることは確実である。また、多くの遺跡で住居跡を中心に少なからず遺構内貝層が形成されているこ

とも特筆される。黒浜式期の住居跡が検出され、遺構内貝層が形成される事例を含む遺跡は、寺前遺跡（10）山ノ田台遺跡（11）、久寺家遺跡（12）、中谷遺跡（13）、柴崎遺跡（14）など、本遺跡群の南西に続く柏我孫子低地沿岸の遺跡にも認められる。特に柴崎遺跡では区画整理事業に伴う第３・４次調査で、詳細は不明ながら中規模集落跡を検出している。

手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地の水系には、地金堀の谷奥周辺に位置する正蓮寺貝塚（15）、屋敷内遺跡（16）、原山遺跡（17）、中央部に位置する上前留遺跡（18）、香取神社遺跡（19）、鴻ノ巣遺跡（20）などが所在するが、これらには黒浜式期の住居跡が検出され、遺構内貝層が形成される事例を含む。このうち鴻ノ巣遺跡は区画整理事業に伴う発掘調査によって中規模集落跡を検出しているが、他は数軒以内の検出である。特に屋敷内遺跡と原山遺跡は、柏北部中央地区の区画整理事業に伴い面的に発掘調査されているにも関わらず零細な内容であることから、谷奥遺跡の傾向を示す可能性がある。手賀沼低地の水系では、既述の柏我孫子低地沿岸の遺跡と対峙する手賀沼低地沿岸に位置する根戸城跡（21）、西野場遺跡(22)からも、小規模調査範囲から黒浜式期の住居跡がそれぞれ１軒、３軒と検出されており、西野場遺跡では遺構内貝層も検出されている。一方、柏北部東遺跡群の北西に当たる古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地の水系では、稲荷前遺跡（23）は関山Ⅱ式期の集落跡であるが、黒浜式は下三ヶ尾初咲遺跡（24）、高砂遺跡(25)、山神宮裏遺跡（26）などを含め、土器は検出されても遺構が検出されていない。調査事例は少ないため、どのような傾向を示すかは未明である。

奥東京湾中央部今上低地の水系には、富士見台第Ⅱ遺跡（27）、若葉台遺跡（28）、上貝塚遺跡（29）、下花輪荒井前遺跡（30）、三輪野山北浦遺跡（31）、西初石五丁目遺跡（32）などが所在するが、これらには区画整理事業や道路建設などに伴う発掘調査によって黒浜式期の住居跡が検出され、遺構内貝層が形成される事例を含む。小中規模ではあるが、集落遺跡群として一定のまとまりが認められる。一方、奥東京湾湾口部矢切低地の谷奥に位置する遺跡は、異なる傾向を示している。市野谷二反田遺跡（33）は流山新市街地地区画整理事業に伴い広範囲の発掘調査を行っているが、遺物のみの検出である。長崎遺跡（34）は小規模範囲の発掘調査により浮島・諸磯式期の住居跡が１軒検出されているが、黒浜式は現在までのところ遺物のみの検出である。



柏市
流山市
大宝
大青田
中十余二
伊勢原
柏の葉
天王屋
十余二
高田
柏
松崎
根戸
千賀沼

第2表　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	水系名	遺跡種別	備考
1	原畑遺跡	柏市大室字原畑	古常陸川湾奥部：柏・我孫子低地	集落跡・貝塚	黒浜式期住居跡19・土坑5、遺構内貝層
2	駒形遺跡	柏市小青田	〃	集落跡・貝塚	撚糸文～沈線文系期集石、条痕文系期～前期後葉集落跡（黒浜式期住居跡13以上）、遺構内貝層（川蟹貝塚）、炉穴
3	富士見遺跡	柏市小青田字立山	〃	集落跡・貝塚	花積下層式集落跡、黒浜式期拠点集落跡（住居跡100以上）、遺構内貝層（駒形・小青田貝塚）、炉穴
4	大松遺跡	柏市小青田字大松	〃	集落跡・貝塚	関山Ⅱ式期、黒浜式期集落跡（住居跡10以上）、中期前葉～後葉拠点集落跡、遺構内貝層（大松貝塚）
5	小山台遺跡	柏市大室字前畑	〃	集落跡・貝塚	黒浜式期集落跡（住居跡10以上）、中期中葉～後葉集落跡、遺構内貝層（前畑貝塚）、炉穴
6	花前Ⅰ遺跡	柏市船戸字花前	〃	集落跡・貝塚	前期中葉～後葉集落跡・遺構内貝層（黒浜式期住居跡8）・後期前葉集落跡
7	花前Ⅱ遺跡	柏市船戸字新町	〃	集落跡	前期後葉集落跡、後期前葉集落跡
8	矢船Ⅰ遺跡	柏市船戸矢船	〃	集落跡	矢船遺跡、土製けつ状耳飾、前期集落跡
9	矢船Ⅱ遺跡	柏市船戸矢船	〃	集落跡	前期集落跡、土坑・陥穴
10	寺前遺跡	柏市花野井寺前	〃	集落跡、貝塚	黒浜式期住居跡1
11	山ノ田台遺跡	柏市布施山ノ田台全区	〃	集落跡・貝塚	黒浜式期集落跡、遺構内貝層（住居跡4）
12	久寺家遺跡	我孫子市久寺家字日寺	〃	集落跡・貝塚	鵜ヶ島台～茅山下層式期集落跡、黒浜式期集落跡
13	中谷遺跡	我孫子市久寺家字中谷	〃	集落跡・貝塚	黒浜式期集落跡、遺構内貝層（住居跡2）
14	栄崎遺跡（3・4次）	我孫子市栄崎台4丁目	〃	集落跡・貝塚	鵜ヶ島台～茅山下層式期集落跡・炉穴、黒浜式期集落跡、遺構内貝層（住居跡36）
15	正蓮寺貝塚	柏市正蓮寺内山	手賀・印旛沼湾奥部：手賀沼低地	集落跡・貝塚	前期中葉遺構内貝層？
16	屋敷内遺跡	柏市正蓮寺	〃	集落跡	黒浜式期住居跡
17	原山遺跡	柏市若柴字原山	〃	集落跡	黒浜式期住居跡2、陥穴
18	上前畑遺跡	柏市花野井上前畑	〃	集落跡	黒浜式期住居跡3
19	香取神社遺跡	柏市花野井西高野	〃	集落跡	黒浜式期住居跡1
20	鴻ノ巣遺跡	柏市十余二字鴻ノ巣	〃	集落跡・貝塚	黒浜式期住居跡20、遺構内貝層
21	根戸城跡	我孫子市根戸字荒迫	〃	集落跡	関山Ⅰ式期・黒浜式期住居跡各1
22	西野場遺跡	我孫子市高野山字西野場	〃	集落跡	黒浜式期住居跡3
23	稲荷前遺跡	野田市下三ヶ堰稲荷前	古常陸川湾奥部：三ヶ尾低地	集落跡	関山Ⅱ式期住居跡8
24	下三ヶ尾初呪遺跡	野田市下三ヶ尾初呪他	〃	集落跡、包蔵地	鵜ヶ島台式期住居跡1・土坑・炉穴
25	高砂遺跡	柏市船戸山高野高砂	〃	包蔵地	陥穴、五領ヶ台期集石土坑
26	山神宮裏遺跡	柏市山高野字宮本	〃	集落跡、包蔵地	条痕文系住居跡？・炉穴
27	富士見台第Ⅱ遺跡	流山市富士見台	奥東京湾中央部今上低地	集落跡	黒浜式期住居跡2
28	若葉台遺跡	流山市上新宿字芝山	〃	集落跡・貝塚	黒浜式期住居跡10、遺構内貝層
29	上貝塚遺跡	流山市上貝塚	〃	集落跡	黒浜式期住居跡2
30	下花輪荒井前遺跡	流山市下花輪字荒井前	〃	集落跡	黒浜式期住居跡3
31	三輪野山北浦遺跡	流山市三輪野山字北浦	〃	集落跡・貝塚	黒浜式期住居跡4、遺構内貝層（三輪野山第2遺跡）
32	西初石五丁目遺跡	流山市西初石5丁目	〃	集落跡	黒浜式期住居跡6
33	市野谷二反田遺跡	流山市市野谷字二反田	奥東京湾湾口部矢切低地	包蔵地	
34	長崎遺跡	流山市野々下3丁目	〃	集落跡、包蔵地	浮島・諸磯式期住居跡1

第２章　検出された遺構・遺物

第１節　縄文時代

１　概要

原畑遺跡の全体面積は約131,900㎡である（第５図）。第１次から第23次まで実施した上層調査は、発掘対象面積で示すと74,989㎡で、全体の約57％が記録保存されたことになる。今回報告する内容は既述した23次に及ぶ発掘調査のうち、主に合計10,099㎡の本調査によって明らかにされた成果である。

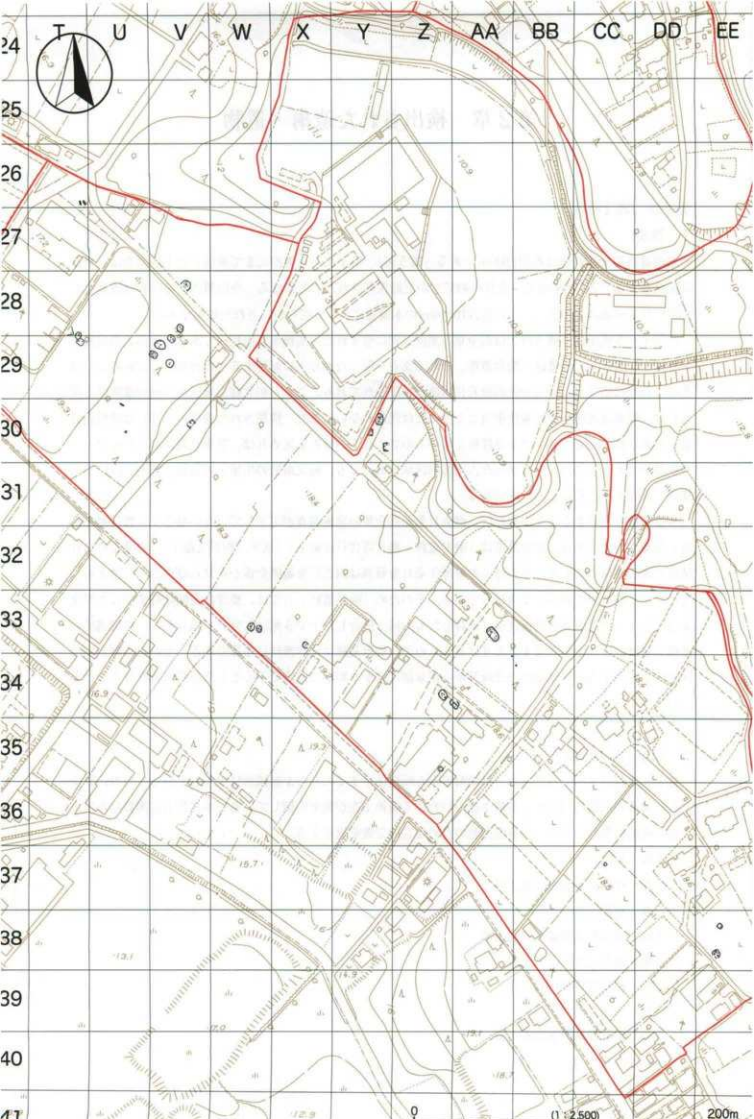
注目すべき成果は、縄文時代前期中葉の黒浜式期に営まれた中規模集落の検出である。黒浜式期は隣接する富士見遺跡・大松遺跡・駒形遺跡、そして支谷を隔てた台地上に対峙する小山台遺跡を含めると、調査途上の現段階でも150～200軒の竪穴住居跡が検出されており、これら柏北部東地区を一連の遺跡群と捉えれば、関東地方屈指の大規模集落となることは間違いない。また、構築された遺構の一部には遺構内貝層が形成されている。サンプルを採取しているのでこれらの分析を進めれば、奥東京湾区域に比べデータの蓄積がほとんどされていなかった古鬼怒湾区域においても、縄文前期の生産・居住様式解明に向けて具体的な成果を加えることも可能である。

本事業は一定のまとまりがあれば、調査対象範囲全体の発掘調査が完了していない場合でも報告書を刊行する基本方針である。駒形遺跡は「駒形遺跡－縄文時代以降編１」（以下「駒形遺跡１」）の報告書刊行時点で調査継続中であり、その時点の整理作業対象範囲は調査対象範囲全体から見れば虫食い状態を呈していたが、既述の方針の下で刊行している。そのため「駒形遺跡１」では、整理作業開始時までに本調査を行った１～19次調査の発掘区を、近接したもの同士統合した上で５地区に分けて報告した。原畑遺跡の遺構分布はいくつか小さなまとまりはあるものの、駒形遺跡に比べ密度は希薄である。そのため敢えて地区分けせず、基本的には遺跡の北西部から南東部に向かう順序で遺構を中心とした事実記載を行うこととした。

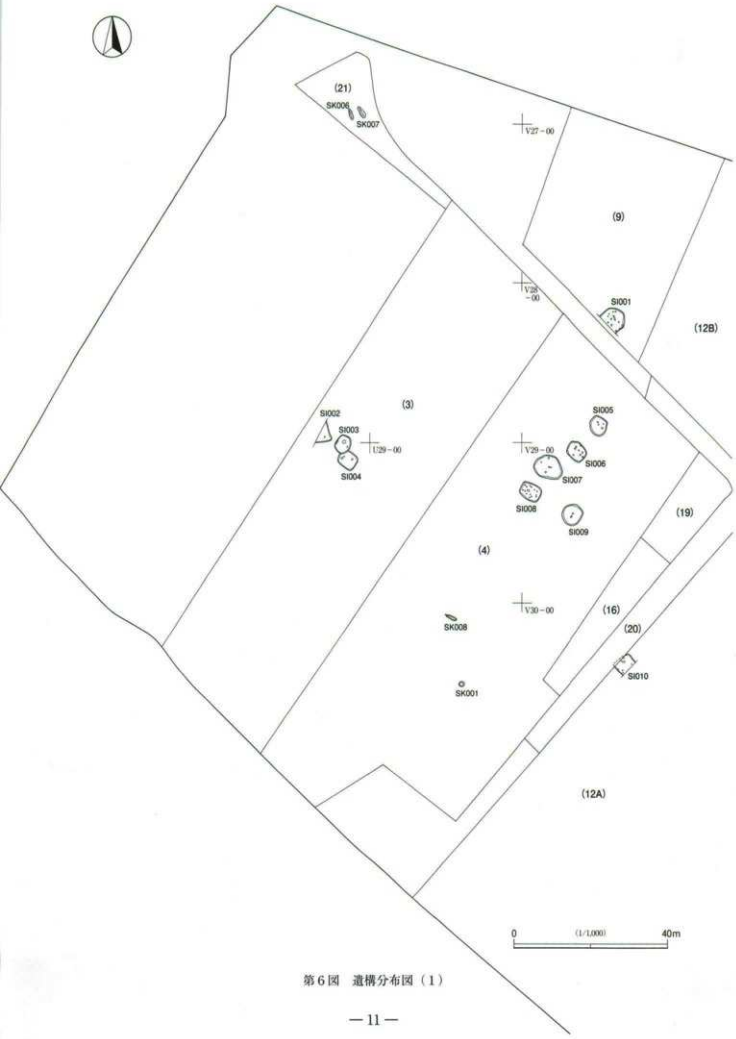
２　出土土器の分類

縄文式土器は多寡の差はあれ、早期前半から晩期後半までのものが断続的に出土しているものの、質量ともに遺構の帰属時期である前期中葉のいわゆる繊維土器が他を圧倒している。本報告書に掲載した出土土器の説明に際し、これらの事実記載のため便宜的分類を提示する。

第１群　早期
　１類　早期前半撚糸文系土器
第２群　前期
　１類　前期初頭花積下層式土器
　２類　前期中葉黒浜式土器
　３類　前期後葉浮島式土器
第３群　中期
　１類　中期前葉阿玉台式土器


T
U
V
W
X
Y
Z
AA
BB
CC
DD
EE
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
(1：2,500)
200m

第5図　道構全体図


(21)
SK006
SK007
V27－00
(9)
V28
－00
SI001
(12B)
(3)
SI002
SI003
V29－00
SI004
SI005
V29－00
SI006
SI007
SI008
SI009
(19)
(4)
V30－00
(16)
(20)
SK008
SI010
SK001
(12A)
0
(1/1,000)
40m

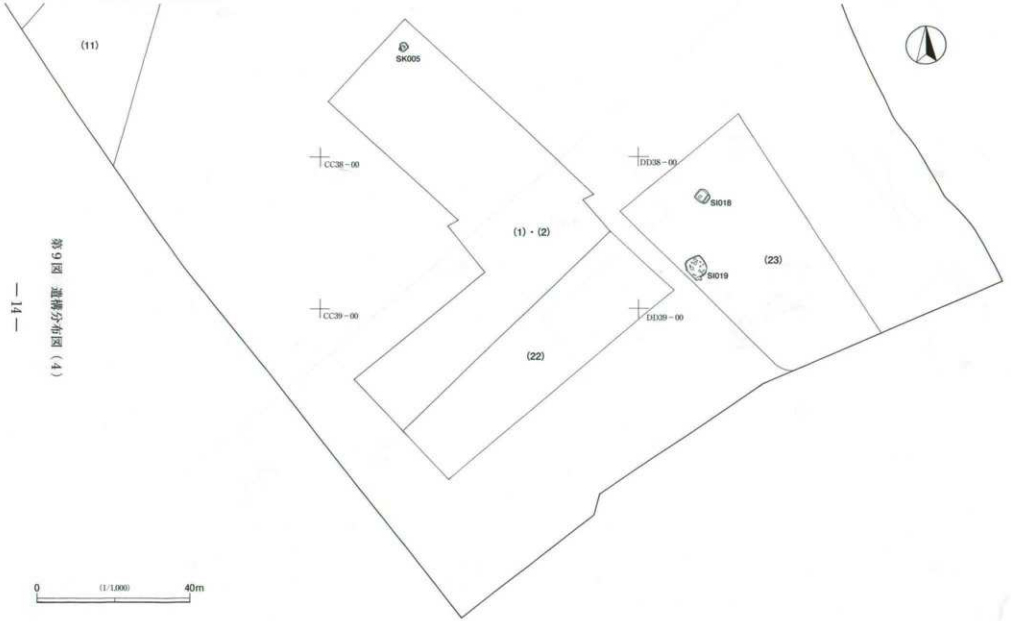
第６図　遺構分布図（１）

(12B)
(18)
X30－00
Z30－00
SI011
SI020
SI021
(12C)
(12B)
(10)
X32－00
(5)
Z32－00
(6)
(6)
(13)
(7)
(15)
0
(1/1,000)
40m

第7図　遺構分布図（2）

(12)
(5)
(6)
(13)
(15)
(8A)
(14)
(8B)
(11)
SI012
SI013
SI014
SI015
SI016
SI017
SK004
Y33－00
Y35－00
AA33－00
AA35－00
0
(1/1000)
40m

第8図 遺構分布図（3）


(11)
SK005
CC38－00
CC39－00
(1)・(2)
(22)
DD38－00
DD39－00
SI018
SI019
(23)
0
(1/1,000)
40m

第9図　遺構分布図（4）

2　中期後葉加曽利E式土器

第4群　後期

1類　後期前半堀之内式土器

2類　後期中葉加曽利B式土器

3類　後期後葉安行式土器

第5群　晩期

1類　晩期前半安行式土器

2類　晩期後半の土器

3　竪穴住居跡

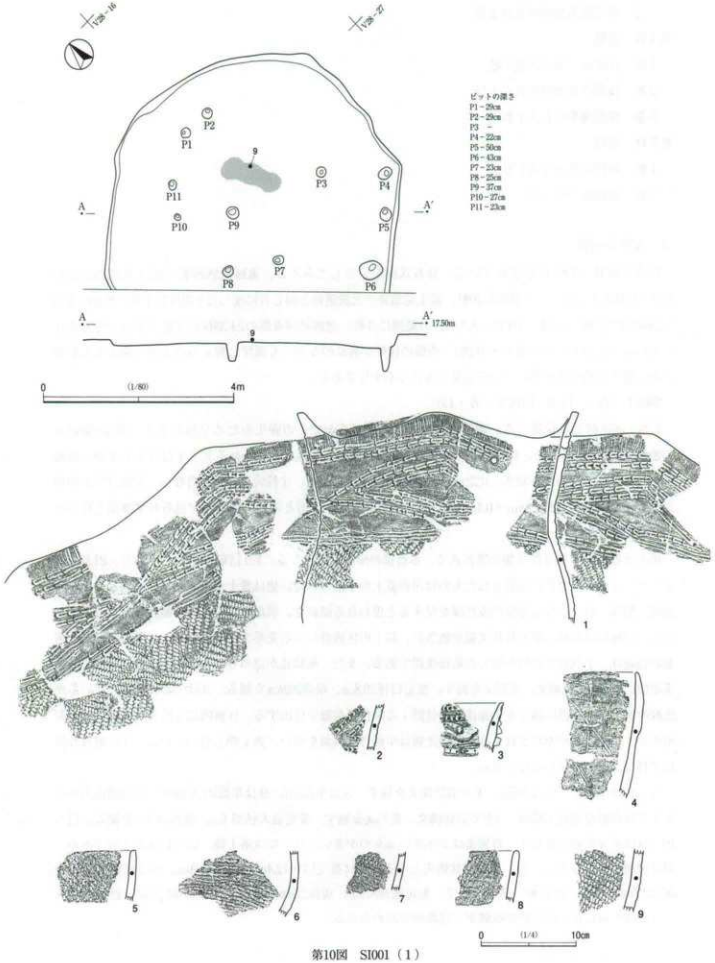
竪穴住居跡は19軒検出されている。分布状況を俯瞰してみると、遺跡範囲西側の富士見遺跡に近いT28・V29区を中心とした範囲に10軒、富士見遺跡・大松遺跡と同じ谷に面したY30区に1軒、W33・X33区の範囲に3軒、Z34・AA33・AA34区の範囲に3軒、遺跡範囲東側のEE38区に2軒と散漫な分布を示していることがわかる（第6～9図）。西側の10軒が断続的ながらも弧状と捉えることが可能かもしれないが、他を含め集落形態について言及するには不十分である。

SI001（第10・11図、図版2・6・15）

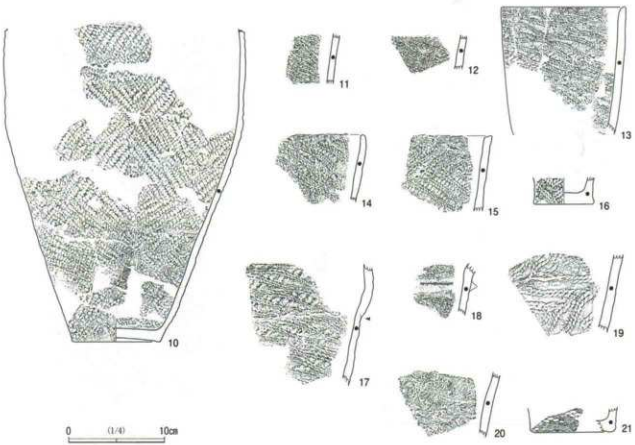
V28－26区付近に位置する。現道との境界に所在するのでその養生のため全掘できず、概ね6.08m×4.78mの範囲を調査した。確認面からの深さは0.23mを測る。柱穴と思われるピットは11本あるが、床面からの深さは不明のP3を除き、0.22m～0.5mの範囲に収束する。主柱穴は確定し得ない。推定プランの中央やや南西寄りに規模1.28m×0.48mの炉が設けられるが、床面との差はほとんど見られず焼面と呼ぶべきかもしれない。

出土土器は全て第2群2類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約11.7kgが出土しており、21点を図示した。うち出土位置が記録されたものは床面直上の1点のみで、他は覆土一括取り上げである。1・2は同一個体。緩やかな4単位の波状縁を呈すると思われる深鉢で、胴部中位ぐらいが最大径になると思われる。口縁部は端部に刷毛目状沈線が施され、以下の区画帯に大形菱形文が展開する。上下の区画及び図形の描線は、半截竹管内側を用いた結節沈線である。また、補修孔が認められる。胴部以下には0段多条単節LR／RLで羽状縄文、菱形文を施す。推定口径29.8cm、現高20.9cmを測る。3は上部は剥落しているが、比較的狭小な口縁部区画帯を結節沈線が付随する貼付隆起線で作出する。区画内にも貼付隆起線による鋸歯状モチーフなどが充填されよう。結節沈線は半截竹管内側を用い、強く押し引いている。4は縦長な斜格子目文が口縁端部から施される。

5・6は無節R、7は無節L／Rで羽状縄文を施す。8は単節LR、9は単節RLを施す。10は関山式のそれよりは粗雑な還付末端RL／LRで羽状縄文、菱形文を施す。推定最大径25.4cm、現高31.4cmを測る。11～19・21は附加条縄文を施す。附加条は2本用いるものが多い。11・12は第1種、13～19は第2種である。14は附加条がL3本で、15・16は羽状構成となる。13は推定口径12.4cm、現高12.9cm、16は推定底径6.0cm、現高2.7cmを測る。21は軸の縄は不明で、推定底径8.0cm、現高2.5cmを測る。20は無節Lだが、撚りの緩みを留めるために付した結節の痕跡が一定間隔で認められる。


ピットの深さ
P1－29cm
P2－29cm
P3 －
P4－32cm
P5－50cm
P6－43cm
P7－23cm
P8－25cm
P9－37cm
P10－27cm
P11－23cm
A
A'
17.50m
0
(1/80)
4m
0
(1/4)
10cm

第10図　SI001（1）



第11図　SI001（2）

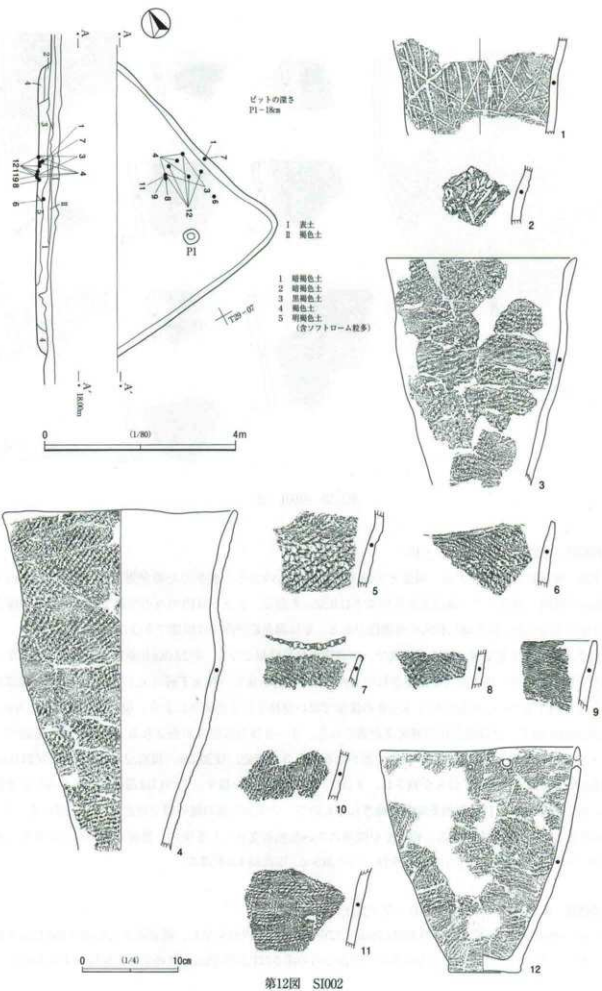
SI002（第12図、図版2・6・15）

T28－96区付近に位置する。現道との境界に所在するのでその養生のため全掘できず、概ね4.32m×4.88mの範囲を調査した。確認面からの深さは0.32mを測る。ピットはP1のみの検出で、床面からの深さは0.18mと浅いが、位置的に柱穴の可能性がある。炉は調査範囲内では確認できなかった。

出土土器は全て第2群2類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約22.0kgと多量に出土しているが、12点を図示し得た。出土位置が記録されたものは、いずれも床面～覆土下層の出土である。1は口縁部と底部を欠損するが、胴部全面に1本引きの沈線で粗い斜格子目文が施されよう。現存部の最大径25.4cm、現高9.6cmを測る。2は列点状の刺突文が施される。3～8は無節縄文が施される。3～5はLを施す。3・4は口径に比して器高が高い細身の器形となる。3は推定口径20.2cm、現高22.8cm、4は口径24.0cm、現高33.8cmを測る。6・7はRが施され、8はL／Rで羽状縄文を施す。7の口縁端部上には刻み目が連続的に付される。9～11は附加条縄文が施されるもので、いずれも軸の縄不明で附加条にRを用いる。9・10はR2本、11はR4本である。12はやや間隔の開いた撚糸文RとLを用い、器面を埋め尽くすように多方向に回転施文する。補修孔が認められ、口径20.5cm、器高23.4cmを測る。

SI003（第13～15図、図版2・6・7・16・17）

T29－08区付近に位置する。外形は4.76m×3.76mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは0.12mを測る。柱穴と思われるピットは4本あるが、床面からの深さはP2が0.58mと深めである他はいずれも0.2m前


ピットの深さ
P1－18cm
1 表土
2 褐色土
P1
1 暗褐色土
2 暗褐色土
3 黒褐色土
4 褐色土
5 明褐色土
（含ソフトローム粒多）
A
A'
1800m
0
(1/80)
4m
0
(1/4)
10cm

第12図 SI002

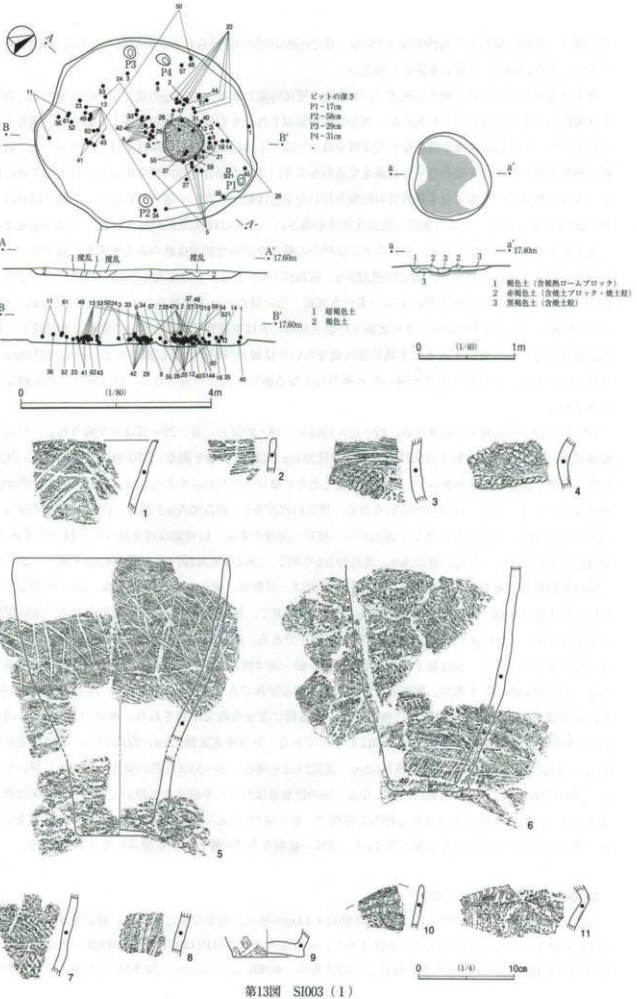
後と浅い。東側に偏在して規模0.9m×0.86m、深さ0.08mの炉が設けられる。南東側の一部はSI004と重複するが、調査記録からは新旧を決定し得ない。

出土土器は全て第2群2類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約2.7kgの出土で、62点を図示し得た。確認面からの深さが浅いこともあるが、出土位置が記録されたものは、床面から覆土上層まで万遍なく出土している。1～11は沈線や刺突などで文様を描出する。1は口縁端部に刻み目を付し、以下には半截竹管の外側を用いた沈線を集合させて鋸歯文を巡らせよう。2は半截竹管の内側を用いた平行沈線を密に施す。3は口頸部にやや幅広な半截竹管の内側を用いた平行沈線が重畳して巡らされよう。下部には0段多条単節LRが施される。4は口頸部に結節沈線文が施され、上部には無節Rが施される。5は口縁端部から胴上部までが粗い斜格子目文、それ以下には撚りの緩みを留めた結節痕跡のある無節Rが施され、二帯構成となる。底部は上げ底で、推定口径22.0cm、現高27.7cmを測る。6は胴部中位以下に無節R、その下部から底部下端までヘラ状工具による一本引き沈線で粗い斜格子目文が施される。推定底径8.5cm、現高27.6cmを測る。7は地文無節Rに平行沈線文が施される。8は半截竹管外側を用いた沈線文が密接して縦位に施される。9は底部下端まで半截竹管外側を用いた沈線が斜格子目状に施される。推定底径7.6cm、現高2.9cmを測る。10は押し引きが強いため列点状となる結節沈線文が施される。11は縦位の短沈線が密に施される。

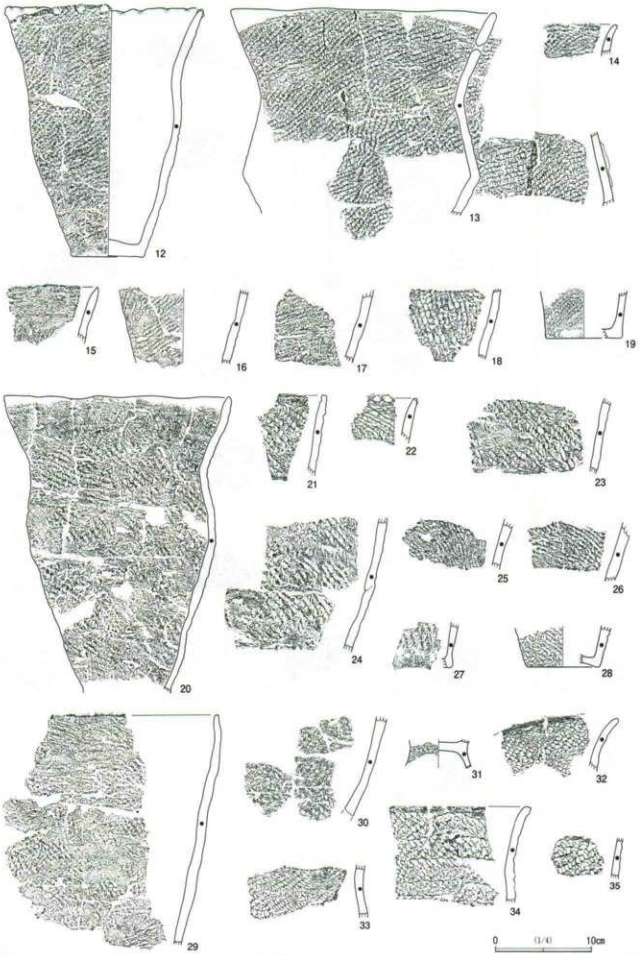
12～27・29は無節縄文が施される。12～17・19はL、18・29はL／R、20～27はRが施される。12は口縁端部上に連続押捺文を刻み目状に巡らす。口径20.4cm、器高25.0cmを測る。13は頸部と胴部に強い屈曲のある深鉢である。器面が軟らかい段階で施文したため単位の切れ目に生じたミミズ腫れ状の粘土帯が隆起線文的である。また、補修孔が認められる。推定口径27.5cm、現高20.8cmを測る。19は推定底径7.8cm、現高4.7cmを測る。20は口径に比して器高が高い細身の深鉢である。口縁部は波を緩やかに打つが平縁で、頸部にくびれを持つ。推定口径22.5cm、現高29.7cmを測る。28は推定底径7.6cm、現高4.2cmを測る。28・30～36は単節縄文が施される。28は原体が縒んだ部分は一見無節に見えるが、RLである。30・31はRLで、31は台付土器の底部と脚部の接合部である。32～35はLRで、34・35は還付末端が認められる。36は胴部の屈曲部でRL／LRを施す。37は前々段合撚（異節）である。38～56は附加条縄文を施文する。附加条は2本用いるものが多い。38は第1種、39は第2種、40～56は軸の縄が不明である。40は附加条がℓ1本である。41は附加条がR1本で、胴部中位で強く屈曲する深鉢である。推定口径12.2cm、現高16.5cmを測る。42は追加成形部位を境に口縁部側に無節R が、胴部側に附加条縄文が施される。推定口径21.6cm、現高27.0cmを測る。47の附加条はR3本、50はL4本である。48は推定底径9.3cm、現高3.3cm、49は推定底径9.4cm、現高3.1cmを測る。52は推定底径6.2cm、現高2.1cmを測る。53～55は反撚の原体を附加条に用いている。53の口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。56の附加条はRとLを組にして用いている。57～60は撚糸文を施す。60は外底面に施文される稀有な事例で、推定底径7.8cm、現高2.1cmを測る。61・62は無文である。他に出土位置を記録した磨製石斧片1点、遺構一括取り上げの軽石1点を図示した（第59図47）。

SI004（第16図、図版2・17）

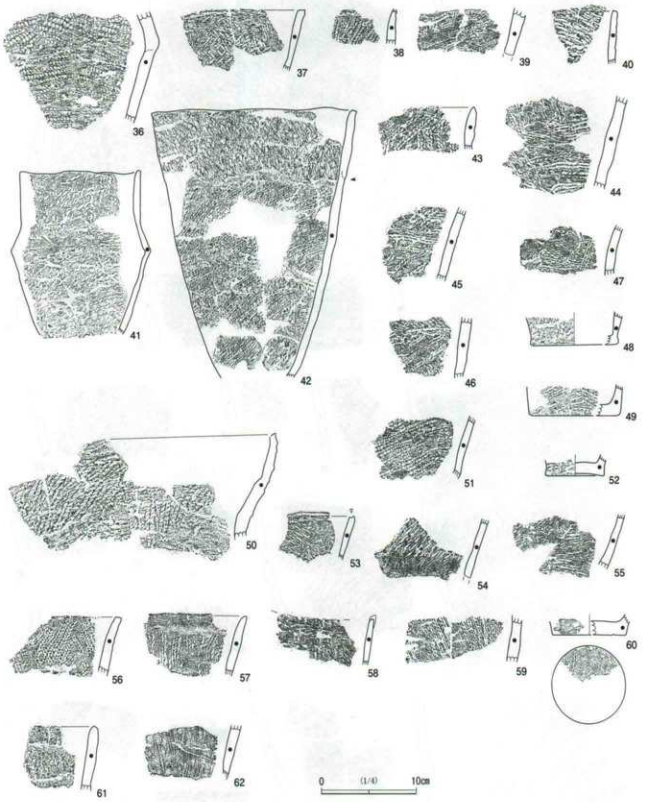
T29－08・18区付近に位置する。外形は4.95m×4.1mの隅丸方形を呈すと思われ、確認面からの深さは0.14mを測る。柱穴と思われるピットは2本で、床面からの深さはP1は0.18m、P2は0.58mと差がある。炉はP1に近接した西側の壁近くに偏在して設けらる。規模0.52m×0.39m、深さ0.07mを測る。北西側の


ピットの深さ
P1－17cm
P2－58cm
P3－28cm
P4－31cm
撹乱
1 暗褐色土
2 褐色土
1 褐色土（含被熱ロームブロック）
2 赤褐色土（含焼土ブロック・焼土粒）
3 黒褐色土（含焼土粒）
17.60m
17.40m
0 (1/80) 4m
0 (1/40) 1m
0 (1/4) 10cm

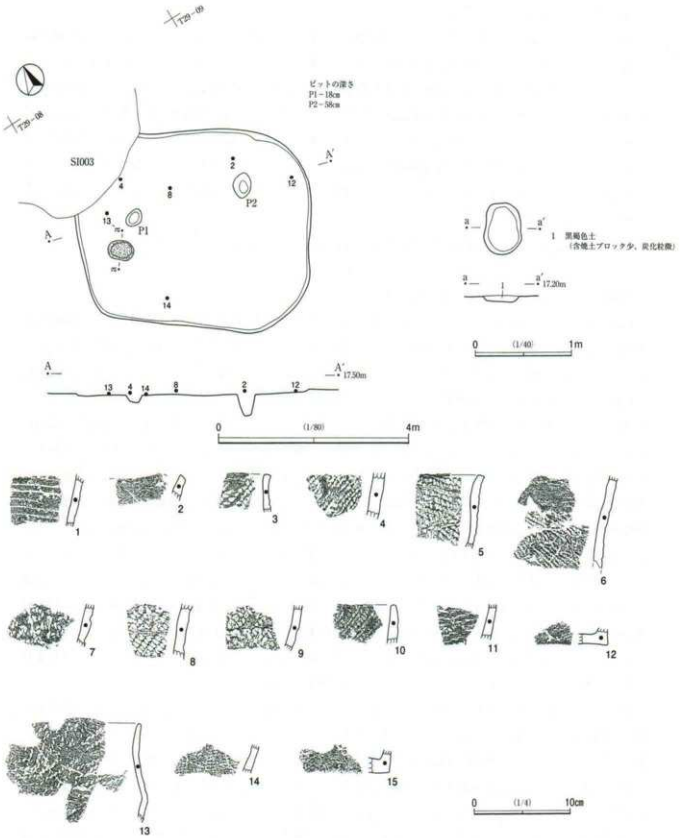
第13図　SI003（1）


12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
(1/4)
10cm

第14図　SI003（2）


36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
47
46
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
0 (1/4) 10cm

第15図　SI003（3）


T29-09
T29-08
ピットの深さ
P1－18cm
P2－58cm
SI003
P1
P2
A
A'
1 黒褐色土
（含焼土ブロック少、炭化粒微）
17.20m
17.50m
0 (1/40) 1m
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm

第16図 SI004

一部はSI003と重複するが、新旧を決定し得ない。

出土土器は全て第２群２類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約5.7kgの出土で、やや内容的には零細だが15点を図示し得た。確認面からは浅いが、出土位置が記録されたものは、床面～床面直上の出土である。１は横位沈線文が、２は斜格子目文が施される。３～６は無節縄文が施される。３・４は無節Ｌ、５は無節Ｒ地に平行沈線文による描線が認められる。いずれも撚りに用いた繊維が固く粗いためか、凹凸が単節のように表出される。６はＲである。７～９は単節縄文LRが施される。７・９は還付末端で、８は他の細い条を以て縛り留めた原体末端線が認められる。10～13・15は附加条縄文を施文するもので、10が第２種である他は軸の縄は不明である。11の附加条はＬ１本、13の附加条はＲ１本である。14は貝殻背圧痕文が施される。

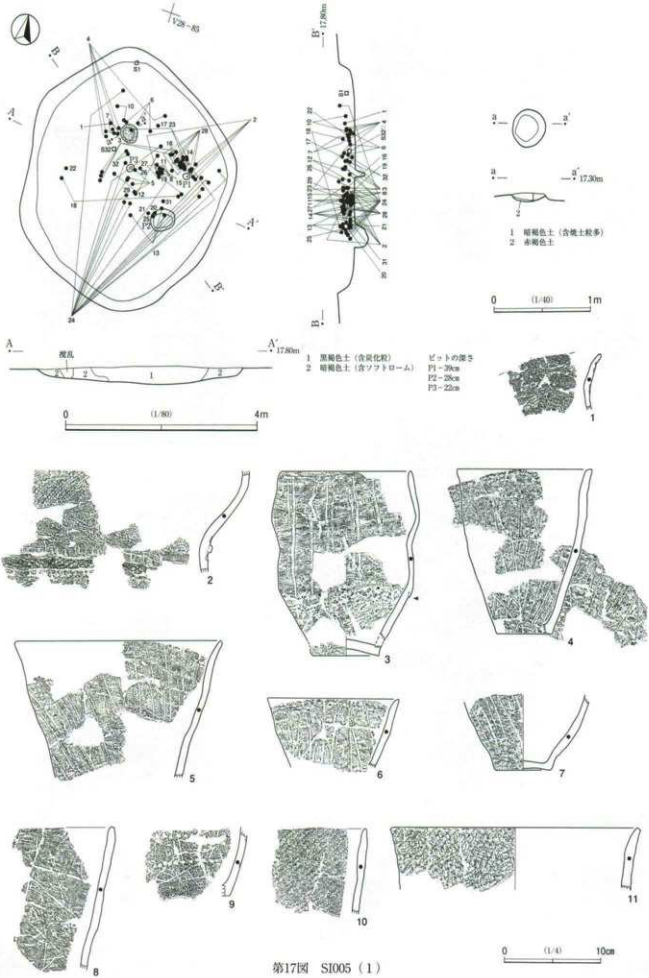
他に遺構一括取り上げの磨製石斧と凹石各１点を図示した（第55図26、第56図30）。

SI005（第17・18図、図版２・７・８・18）

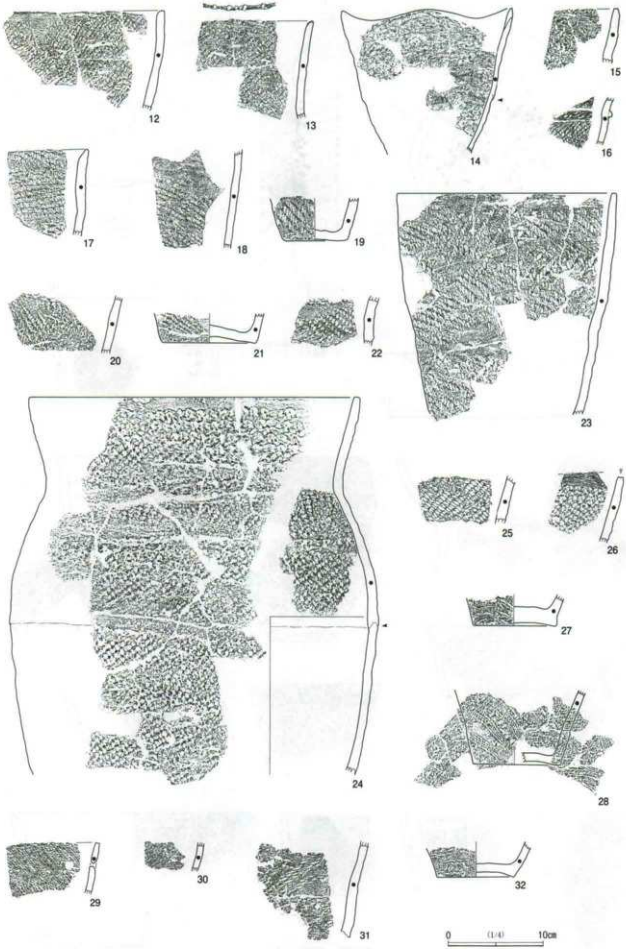
V28－85区付近に位置する。外形は5.32×4.4mの略楕円形を呈すと思われ、確認面からの深さは0.4mと本遺跡では遺存良好な竪穴住居跡である。柱穴と思われるピットは３本あり、床面からの深さは0.22m～0.39mであるが、P1・P3はかなり小ぶりのピットである。炉は中心よりやや北側によった位置に設けられ、規模0.39m×0.36m、深さ0.1mを測る。

出土土器は遺構一括で早期条痕文が10ｇ出土している他は全て第２群２類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約6.2kgの出土であるが、32点を図示し得た。確認面からは深いが、出土位置が記録されたものは床面～覆土中層の出土で、平面的には炉とピットがある範囲に集中している。１は地文無節Ｒ上に結節沈線文が曲線的モチーフを描出する。２は口縁部と胴部を区画する隆起線の両側に、幅広な結節沈線文が巡らされる。地文は附加条縄文である。軸の縄は不明で附加条Ｒ３本、Ｌ３本の羽状構成となる。３～７は縦位あるいは斜位の沈線文が施されるもので、７を除き半裁竹管内側を用いた平行沈線文である。３は２段に屈曲する甕形の深鉢で、追加成形部位を境に口縁部～胴部中位は縦位の沈線文、胴部下半～底部には無節Ｒが施され二帯構成となる。底部は上げ底で推定口径13.6cm、推定高18.5cmを測る。４は斜沈線文が部分的に交差して斜格子目文的になる。推定口径14.0cm、推定高16.6cmを測る。５は推定口径21.4cm、現高13.8cm、６は推定口径13.8cm、現高6.9cm、７は推定底径6.0cm、現高7.5cmを測る。８・９はヘラ状工具による一本引きで、斜格子目文を施す。９は列点文が横位に重ねられる。

10～23は無節縄文が施されるもので、10～16はＬ、17～19はＲである。13は口縁端部上に刻み目が付される。14は追加成形部位を境に口縁部側は粗い横ナデにより無文に仕上げられているが、凹凸が著しい。胴部側はＬと思われる。推定口径18.0cm、現高14.5cmを測る。19は推定底径6.9cm、現高4.4cmを測る。20～23は羽状構成となる。22が無節と単節の組み合わせＬ／RLとなる他は、全てＬ／Ｒである。21は推定底径9.7cm、現高3.0cmを測る。23は撚りに用いた繊維が固く粗いためか、凹凸が単節のように表出される。推定口径23.1cm、現高22.2cmを測る。24～26は単節縄文が施される。24は口縁端部に狭小な無文帯が作出され、以下には還付末端０段多条LRが施される甕形土器で、推定口径33.4cm、現高38.0cmと大形である。追加成形の痕跡が認められる。25は０段多条LR、26は還付末端RLで、口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。27～32は附加条縄文が施される。27・28は第２種で、27は推定底径9.9cm、現高2.8cmを測る。28は附加条がＬ・Ｒとも４本の羽状構成となり、推定底径9.2cm、現高7.6cmを測る。29～32は軸の縄不明のもの


A
A'
B
B'
17.80m
17.30m
1 暗褐色土（含焼土粒多）
2 赤褐色土
0 (1/40) 1m
攪乱
1 黒褐色土（含炭化粒）
2 暗褐色土（含ソフトローム）
ピットの深さ
P1－39cm
P2－28cm
P3－23cm
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm

第17図　SI005（1）



第18図　SI005（2）

で、30の附加条はＬ１本である。32は推定底径8.2㎝、現高3.8㎝を測る。他に出土位置を記録した石鏃と凹石、遺構一括取り上げの敲石、軽石、土器片錘を各１点図示した（第53図１、第56図32、第58図37、第59図48、第61図１）。

SI006（第19図、図版２・８・19）

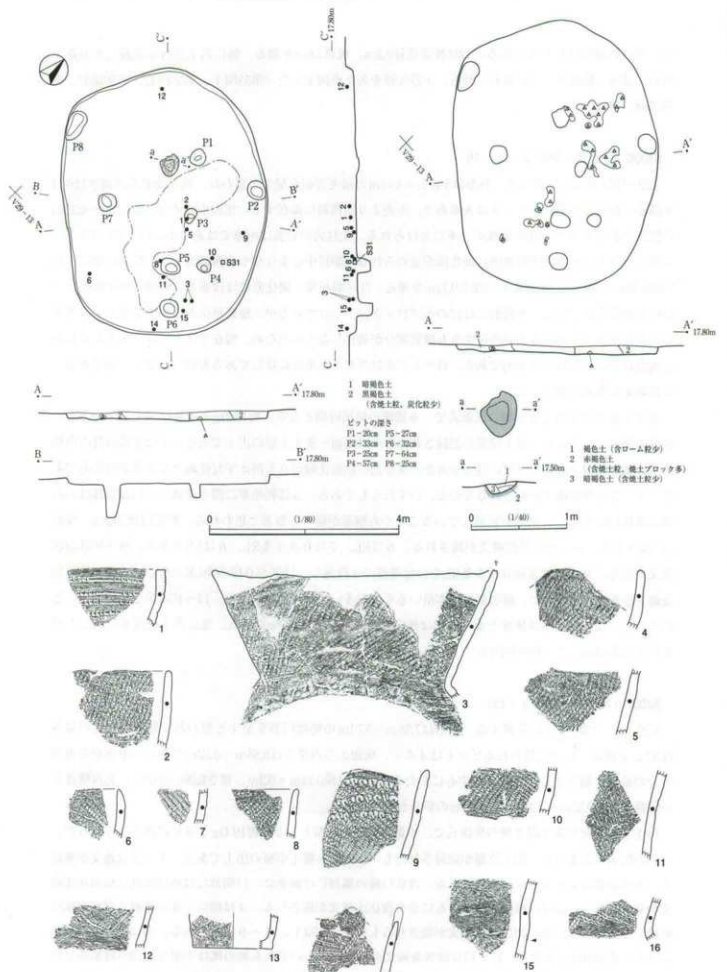
V29－03区付近に位置する。外形は5.42m×4.41mの隅丸方形を呈すと思われ、確認面からの深さは0.11を測る。柱穴と思われるピットは８本あり、中央より南西側に偏在する。床面からの深さは0.2m～0.33mの範囲にある６本と、0.6m前後の２本に分けられる。主柱穴の判別は困難ではあるが、P1～P3とP5～P7を結んだライン内側の床面範囲に硬化面が認められる。炉は中心よりやや北西側によった位置に設けられ、規模0.46m×0.37m、床面からの深さ0.12mを測る。住居廃絶後、硬化面にほぼ重なる範囲中の床面直上に貝層が形成されていた。平面的には12の小ブロックに分かれているが、廃棄単位がこのままなのか、本来は大きなブロックであるが貝の催少な有機質部分が遺存しなかったため、現在では小ブロックとしてしか認識されないものかは未明である。貝サンプルはブロック単位にはしてあるものの、全て一括である。分析結果を別項で報告した。

出土土器は全て第２群２類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約15.9kgと多量に出土しているが、16点の図示に止まった。出土位置が記録されたものは床面～覆土上層の出土である。１は半裁竹管の内側を用い結節沈線文を横位連続に巡らせるが、部分的に結節沈線が立ち消え平行沈線となる点が特徴的である。２～５は無節縄文が施されるもので、いずれもＬである。３は朝顔形に開く深鉢で、口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。頸部が屈曲していることから胴部が膨らむ器形と思われる。推定口径30.2㎝、現高12.7㎝を測る。６～10は単節縄文が施される。６はRL、７は０段多条RL、８はLRである。９・10は羽状縄文である。９は遡付末端０段多条RLを口縁端部に３段施し、以下が０段多条LRとなる。11～16は附加条縄文が施されるもので、附加条は２本用いるものが多い。11～13は第１種、14～16は第２種である。このうち11・12・16は羽状構成となる。13は推定底径8.2㎝、現高3.7㎝を測る。他に出土位置を記録した凹石片１点を図示した（第56図31）。

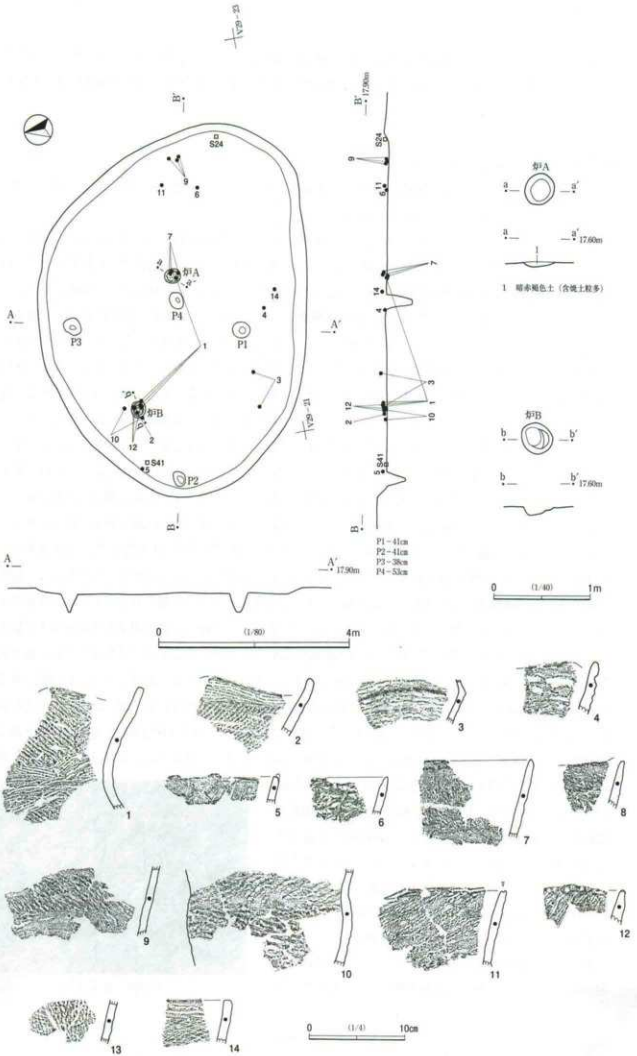
SI007（第20図、図版３・19）

V29－11・12区付近に位置する。外形は7.58m×5.74mの略楕円形を呈すと思われ、確認面からの深さは0.1mを測る。柱穴と思われるピットは４本で、床面からの深さは0.38m～0.53mである。中央から西側半分の範囲に偏在する。炉はほぼ中心にあたる位置に規模0.34m×0.3m、深さ0.06mの炉Ａ、北西壁寄りの位置に規模0.35m×0.3m、深さ0.1mの炉Ｂが設けられる。

出土土器は全て第２群２類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約19.4kgと多量に出土しているが、14点の図示に止まった。出土位置が記録されたものは床面～覆土中層の出土である。１・２は地文が無節Ｌ／Ｒの羽状縄文となる同一個体である。波状口縁の端部には幅狭に、口頸部には横位波状に櫛歯状沈線文が重ねられる。３は口縁部と胴部ともに集合波状沈線文が施される。４は幅広く深い沈線文が刺突状に断続して施される。５～10は無節縄文が施されるもので、５はＬ、６～９はＲである。10はＬ／Ｒの羽状縄文で、現高10.1㎝を測る。11～13は附加条縄文が施される。いずれも軸の縄は不明で、13の附加条はＲ１本である。11の口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。14は口縁端部に集合波状沈線文が施されるが、最


C
C'
17.80m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
S31
1 暗褐色土
2 黒褐色土
(含焼土粒、炭化粒少)
ピットの深さ
P1－20cm P5－27cm
P2－33cm P6－32cm
P3－25cm P7－64cm
P4－57cm P8－25cm
1 褐色土 (含ローム粒少)
2 赤褐色土
(含焼土粒、焼土ブロック多)
3 暗褐色土 (含焼土粒少)
0 (1/80) 4m
0 (1/40) 1m
0 (1/4) 10cm

第19図 SI006


炉A
炉B
S24
S41
P1
P2
P3
P4
1 暗赤褐色土（含焼土粒多）
P1－41cm
P2－41cm
P3－38cm
P4－35cm
0 (1/80) 4m
0 (1/40) 1m
0 (1/4) 10cm

第20図　SI007

上部は結節する。以下には短軸絡条体第５類の回転文が施される。胎土中には繊維の他に粗砂粒を含み、焼成は良好である。大木2a式系の土器である。他に出土位置を記録した磨製石斧片・石皿片各１点を図示した（第54図24・第58図41）。

SI008（第21～24図、図版３・８・９・20）

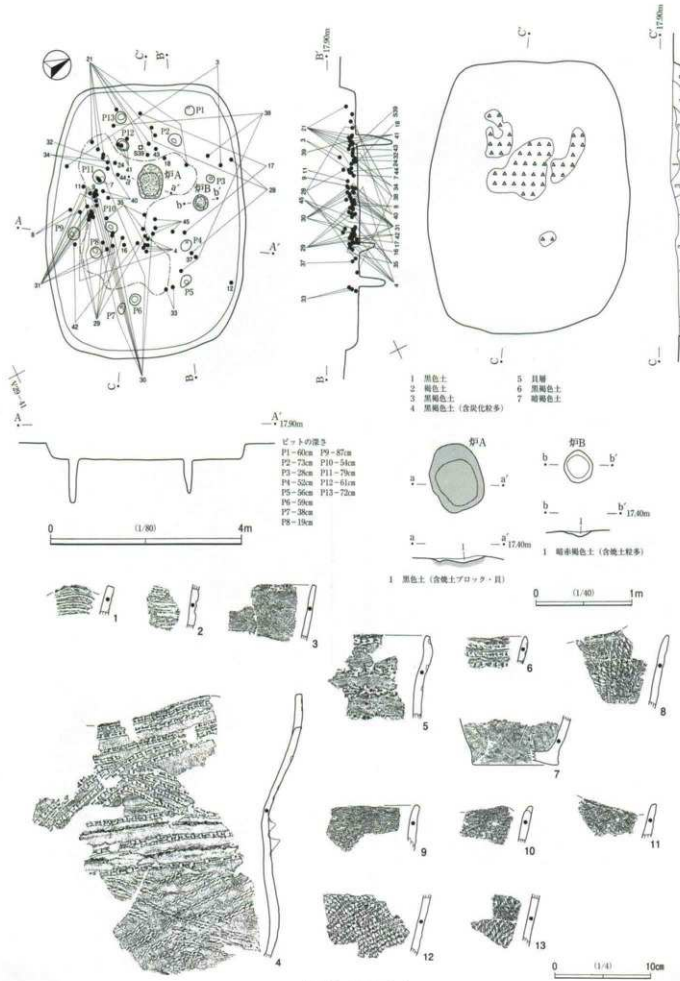
V29－30区付近に位置する。外形は5.94m×4.58mの隅丸方形を呈すと思われ、確認面からの深さは0.42mと本遺跡では遺存良好な竪穴住居跡である。

柱穴と思われるピットは炉周辺に13本ある。床面からの深さは0.4m以下の３本を除き、他は0.52m～0.87mと一定の深さがある。炉は２ヶ所認められる。炉Ａは中央よりやや西側に寄った位置に設けられ、規模0.7m×0.58m、深さ0.09mを測る。炉全体に被熱痕跡が認められる。炉Ｂは炉Ａの東側で壁に寄った位置に設けられ、規模0.33m×0.3m、深さ0.05mを測る。炉Ａを含む床面中央の範囲に硬化面が認められる。住居廃絶後、炉Ａを中心とした床硬化面を中心とした範囲に貝層が形成されていた。平面的には４ブロックに分かれているが、廃棄単位がこのままなのか、本来は大きなブロックであるが貝の僅少な有機質部分が遺存しなかったため、現在では小ブロックとしてしか認識されないものなのかは未明である。貝サンプルはＡブロックをコラムサンプルで採取した他は一括採取である。分析結果を別項で報告した。

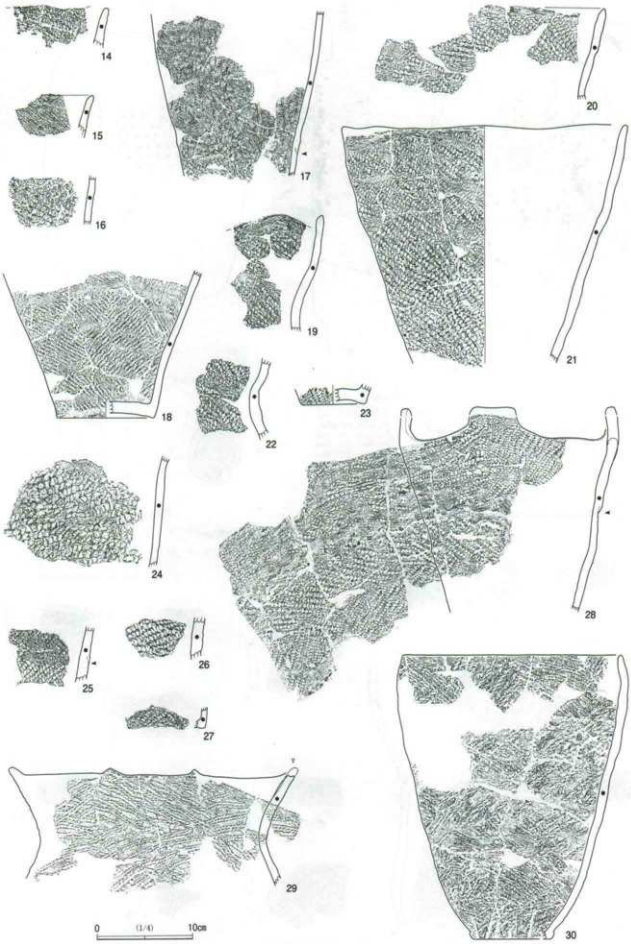
出土土器は遺構一括で中期後半のものが15ｇ出土している他は全て第２群２類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約5.0kgの出土であるが、45点を図示し得た。出土位置が記録されたものは床面～覆土中層の出土で、平面的には貝層や硬化面と重なる中央部に集中している。１～３は半截竹管内側使用の平行沈線文が施される。１は波状口縁の形状に沿って集合的に施され、３は平行沈線文が短く散漫である。４～６は結節沈線文が施される。４は大形波状口縁で、２本の鍔状隆起線文が口縁部と以下を区画する。結節沈線文は口縁端部と鍔状隆起線文にも付随し、口縁部内では大形菱形文が連繋すると思われる。胴部には軸の縄不明の附加条縄文が大形菱形文同様のモチーフで横位展開すると思われる。７～18は無節縄文が施される。７・14～17はＲで、８～13はＬである。７は地文Ｒ上に疎らな斜沈線文が底部下端まで施される。推定底径8.9cm、現高5.0cmを測る。17は追加成形部位を境に胴上部は無文、胴下部にはＲが施され二帯構成となる。18はＬ／Ｒで羽状縄文、部分的に菱形文を描出する胴下部～底部である。上げ底で推定底径10.2cm、現高14.8cmを測るところから、比較的大形な土器になると思われる。19～28は単節縄文が施される。19～23はRLである。21はやや波を打つが基本的には平縁で、推定口径29.6cm、現高23.7cmを測る。23は推定底径6.8cm、現高1.9cmを測る。24～27はLRである。27はやや粗雑であるが還付末端である。28は口縁部に有尾系に認められるような４単位の板状突起が付されると思われる。RL／LRが施されるが、追加成形部位を境に胴部側の羽状縄文は整っているが、口縁部側には羽状構成の意識が認められない。器厚は所々異なり表裏とも凹凸が認められる。突起中軸線上の胴上部に、ヘラ状工具を用いて縦横３本を井桁状に組んだ沈線書きが看取される（第21図）。現高19.6cmを測る。

第21図　拡大写真

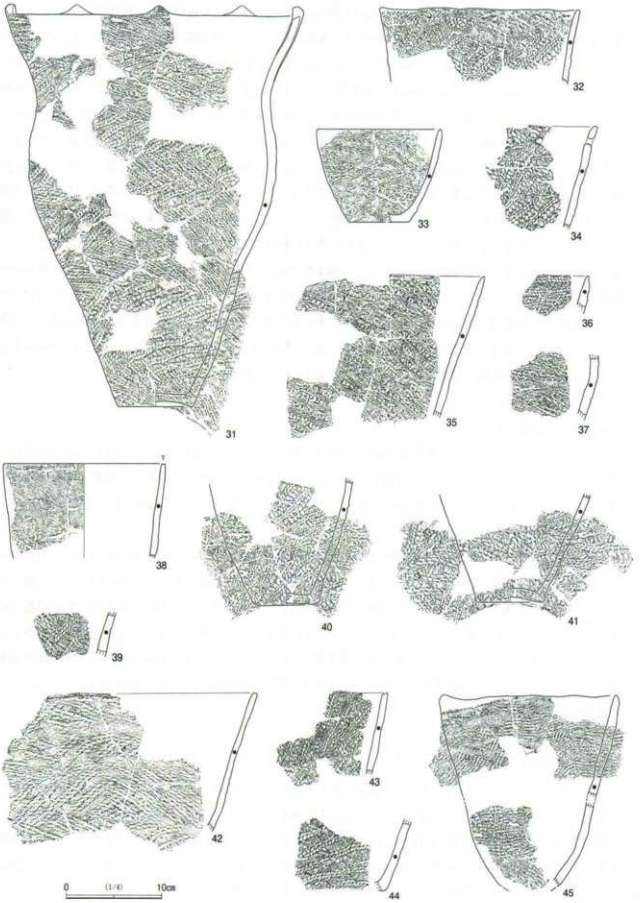
29～44は附加条縄文が施されるもので、附加条は２本用いるものが多い。29～31は第１種で、いずれも異原体


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
炉A
炉B
A
A'
B
B'
C
C'
17.90m
1 黒色土
2 褐色土
3 黒褐色土
4 黒褐色土（含炭化粒多）
5 貝層
6 黒褐色土
7 暗褐色土
ピットの深さ
P1－60cm P9－87cm
P2－73cm P10－54cm
P3－28cm P11－79cm
P4－52cm P12－61cm
P5－56cm P13－72cm
P6－59cm
P7－38cm
P8－19cm
0 (1/80) 4m
1 黒色土（含焼土ブロック・貝）
1 暗赤褐色土（含焼土粒多）
0 (1/40) 1m
0 (1/4) 10cm

第22図　SI008（1）



第23図 SI008（2）



第24図　SI008（3）

を用いた羽状あるいは菱形構成となる。29は口縁端部に一対の小突起が付けられ、附加条縄文による菱形文が連繋すると思われる。平縁の端部はいわゆる溝状口唇となる。口頸部で括れ胴部が膨らむ器形で、推定口径29.8cm、現高12.2cmを測る。30はやや内傾した口縁端部が下端の稜がやや突出した底部に緩やかに繋がる器形で、推定口径22.8cm、器高29.1cmを測る。31は口縁部に小突起が付けられるが、残存部の位置取りから5単位となる可能性が強い。口頸部で強く括れた後、胴下部でも傾きが変わるキャリパー形の器形となる。底部は上げ底で、推定口径30.2cm、器高40.2cmを測る。32～41は第2種である。32は菱形構成を取ると思われ、推定口径20.4cm、現高7.4cmを測る。33は口縁端部に狭小な無文帯を取り、以下が羽状構成となる鉢形である。附加条はいずれも異方向の原体を1組にしている。推定口径12.7cm、現高9.4cmを測る。34には補修孔が認められる。35は附加条が軸の縄よりかなり細く、描出効果が比較的美麗である。38は口縁部に幅広な無文帯を作出し、以下に附加条縄文が施される。口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。40・41は底部下端まで附加条縄文が施される。40は推定底径7.0cm、現高12.6cmを測る。41は軸の縄不明の異種原体と羽状構成を取る。推定底径7.0cm、現高10.9cmを測る。42～44は軸の縄が不明のもので、42は附加条に異種の原体を用いて菱形構成を取る。45は緩やかに波を打つ平縁で、貝殻条痕文が施される。底部はかなり径の小さな平底あるいは尖底となろう。推定口径18.1cm、現高19.4cmを測る。他に出土位置を記録した敲石1点と、遺構一括取り上げの貝刃1点を図示（第58図39、第60図1）。

SI009（第25図、図版3・21）

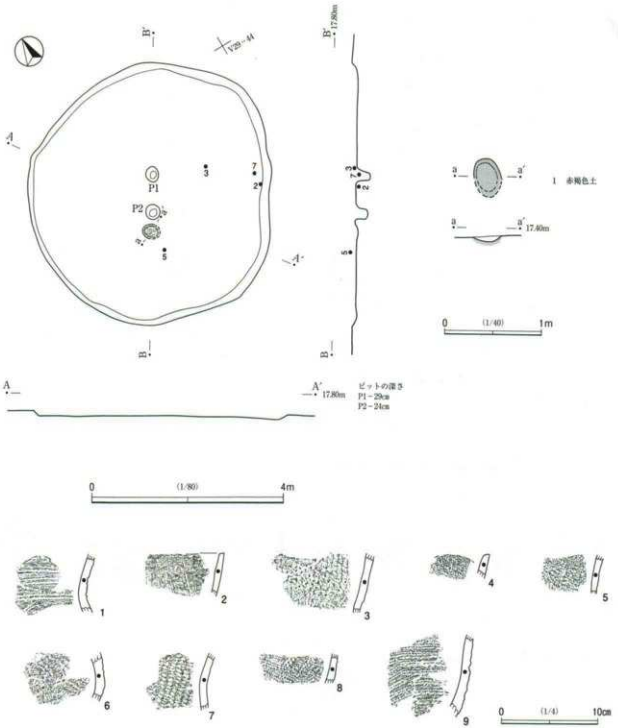
V29－43区付近に位置する。外形は5.46m×5.24mの略円形を呈すると思われ、確認面からの深さは0.14mを測る。柱穴と思われるピットはほぼ同形のものが2本で、床面ほぼ中央の対向した位置に穿たれる。床面からの深さはP1が0.29m、P2が0.24mと揃う。炉はP2の南西側に近接して設けられ、推定規模0.4m×0.28m、床面からの深さは0.06mを測る。

出土土器は遺構一括で後期後半のものが135g出土している他は全て第2群2類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約0.9kgの出土で9点を図示し得た。出土位置が記録されたものは床面～覆土上層の出土である。1は口頸部を境に上部は半截竹管内側を用いた平行沈線文が、下部には軸の縄不明の附加条縄文が施される。2は口縁端部からヘラ状工具による縦位沈線文が施される。2～6は無節縄文が施されるもので、3はL、4・5はR、6はL／Rの羽状縄文である。7は単節LRが施される。8・9は附加条縄文が施されるものでRは第2種である。9は軸の縄不明で羽状構成となるが、附加条はいずれも異方向の原体を1組にしている。

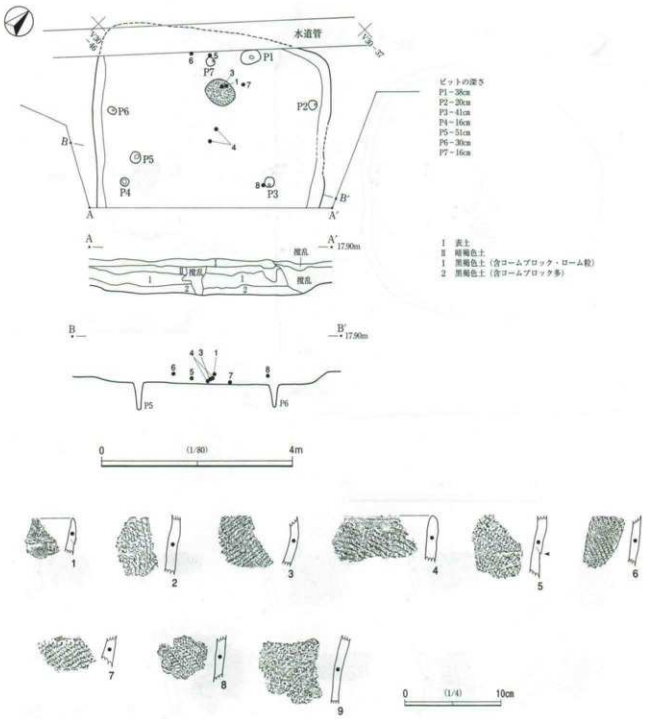
SI010（第26図、図版3・21）

V30－46区付近に位置する。現道との境界に所在するのでその養生のため全掘できず、また水道管の埋設範囲は削平されていたため、概ね3.72m×5.4mの範囲を調査した。外形は方形と推定され、確認面からの深さは0.46mと本遺跡では遺存良好な竪穴住居跡である。柱穴と思われるピットは7本あるが、P1を除き小ぶりである。床面からの深さは0.16m～0.51mである。炉は北西壁側に偏在して設けられる。規模は0.63m×0.52mであるが、床面とのレベル差はほとんど見られず焼面と呼ぶべきかもしれない。

出土土器は全て第2群2類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約0.5kgの出土で9点を図示し得た。出土位置が記録されたものは床面直上～覆土中層の出土である。1は口縁部に短い斜沈線が施される。2


B
B'
17.80m
A
A'
P1
P2
1
2
3
4
5
6
7
a
a'
17.40m
1 赤褐色土
0
(1/40)
1m
ピットの深さ
P1－29cm
P2－24cm
0
(1/80)
4m
0
(1/4)
10cm

第25図　SI009


水道管
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
A
A'
B
B'
17.90m
ピットの深さ
P1－36cm
P2－20cm
P3－41cm
P4－16cm
P5－51cm
P6－30cm
P7－16cm
I 表土
II 暗褐色土
1 黒褐色土（含ローム ブロック・ローム粒）
2 黒褐色土（含ローム ブロック多）
攪乱
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm

第26図 SI010

～4は無節縄文が施されるもので2・3はL、4はRである。5～7は単節縄文が施されるもので5・6はRL、7は還付末端LRである。8・9は第2種の附加条縄文が施されるものである。

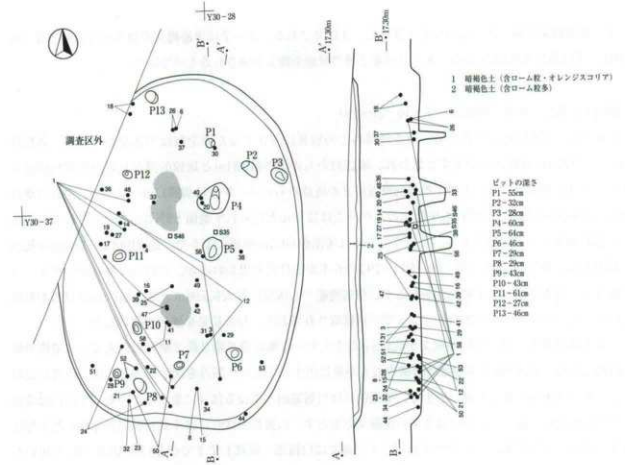
SI011（第27～30図、図版3・9・10・21～23）

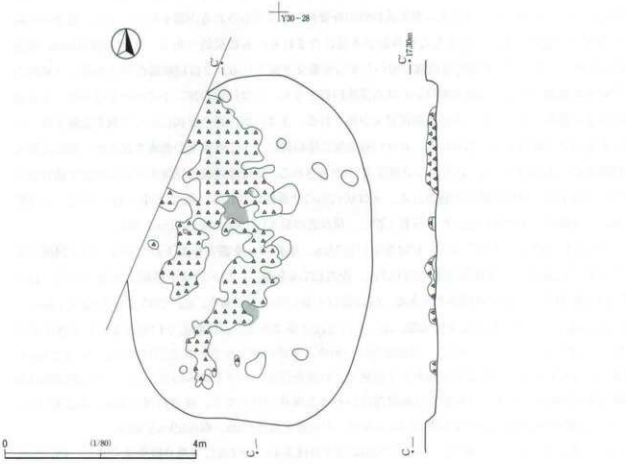
Y30－27・37区付近に位置する。調査区域外との境界に所在するため全掘はできなかったが、外形は7.16m×5.08mの略楕円形を呈すと思われ、確認面からの深さは0.34mと比較的遺存良好な竪穴住居跡である。炉は床面ほぼ中央、主軸上の対向位置に2か所認められる。炉Aは規模1.2m×0.54m、炉Bは規模0.68m×0.62mあるが、いずれも床面とのレベル差はほとんど見られず焼面と呼ぶべきかもしれない。柱穴と思われるピットは13本ある。このうち5本は床面から0.3m前後の深さで、他は0.43m～0.64mの範囲に収束する。炉を囲むP4～P6・P9・P11・P12の6本が主柱穴と思われるが、これらは概ね深いグルーブに属する。調査範囲外に未掘部分があるが、住居廃絶後の床面に最大長5.96m×最大幅2.6mの貝層が形成されていた。貝サンプルは20cmメッシュで一括採取されており、分析結果を別項で報告した。

出土土器は遺構一括で早期条痕文が約115g出土している他は全て第2群2類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約21.9kgと本遺跡の遺構中最も多量に出土しており、59点を図示し得た。出土位置が記録されたものは床面～覆土上層の出土で、平面的には貝層範囲と重なる部分に集中している。1は口縁端部に刷毛目状沈線を施し、直下には5条の沈線文を巡らす。口頸部の括れには半裁竹管内側を用いた平行沈線文により、複合鋸歯状のモチーフを巡らす。地文は口縁部～胴部上半までが還付末端LR／RLを用いた異間隔横帯区画、下半は幅広な等間隔横帯区画となる。以上説明した文様構成を取る土器は東北南部～茨城県北部に類例がある。特に塩喰岩陰第Ⅲ群には波状縁と平縁の違いこそあれ酷似した個体がある（報告書第122図1）。本例は関山式終末～黒浜式初頭の好資料として追加される内容を持つ。また、胎土中に繊維を少量含む他に長石を主体とした粗砂粒が多量に含まれるのも特徴的である。推定口径31.6cm、現高30.4cmを測る。2・3は半裁竹管内側を用いた平行沈線文が施される。2は口縁端部の区画線と区画内の斜沈線文が描出される。口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。3は口縁端部に小突起が付けられ、集合波状沈線文が描出される。4～8は結節沈線文が施される。4は波状口縁の形状に沿って数条連続する。5は大形菱形文を描出すると思われる。6は口縁端部に隆起線によって枠状文が形成されるが、結節沈線文が付随あるいは充填される。以下には0段多条LRが施される。7は隆起線に付随あるいは単独で施される。地文には第1種の附加条縄文が施される。8は括れ部に2条巡らされる。地文はLR／RLである。9は縦位あるいは斜位に沈線文が施される小形土器で、現存部の最大径9.5cm、現高6.1cmを測る。

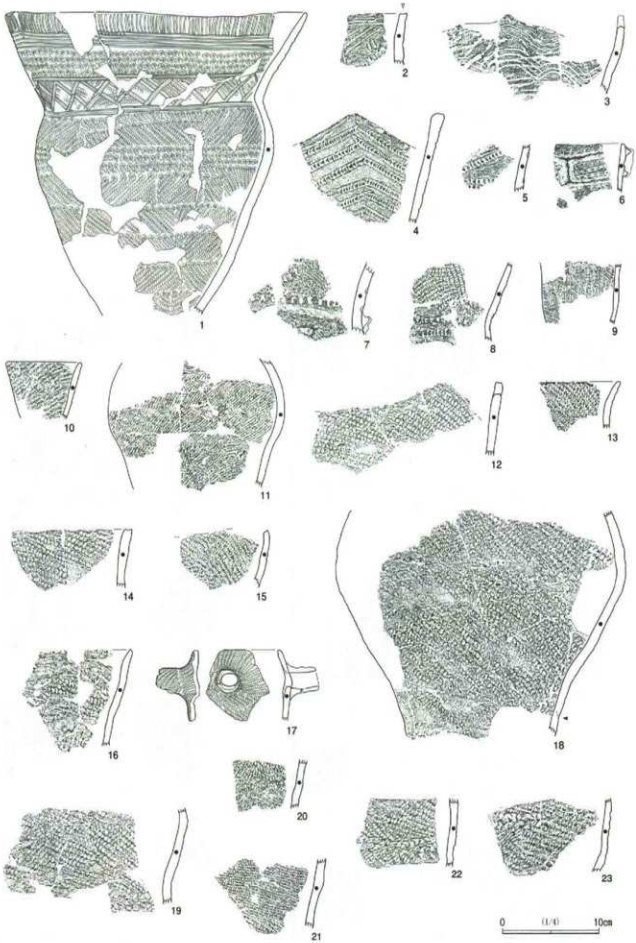
10・11は無節縄文Lが施される。10は推定口径7.6cm、現高5.7cmを測る小形土器である。11は胴部上半が丸く膨らむ器形で、現存部の最大径18.7cm、現高12.7cmを測る。12～39は単節縄文が施される。12～17・19～21はRLで、15は0段多条である。17は注口土器の注口部である。22・23は還付末端RLである。24～32はLRで、このうち29は還付末端、30・32は0段多条である。24は幅広な口頸部を括れで作出する甕形で、追加成形痕が認められる。口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。推定口径27.2cm、現高22.8cmを測る。25は大形波状口縁になると思われる深鉢で、口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。推定口径34.1cm、現高24.5cmを測る。26は上げ底で、口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。推定口径11.3cm、推定高13.7cmを測る。29の口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。31は推定底径8.0cm、現高6.9cmを測る。

18・33・34・36～39はLR／RLで、このうち33はLRが0段多条、39は還付末端0段多条である。18は胴部

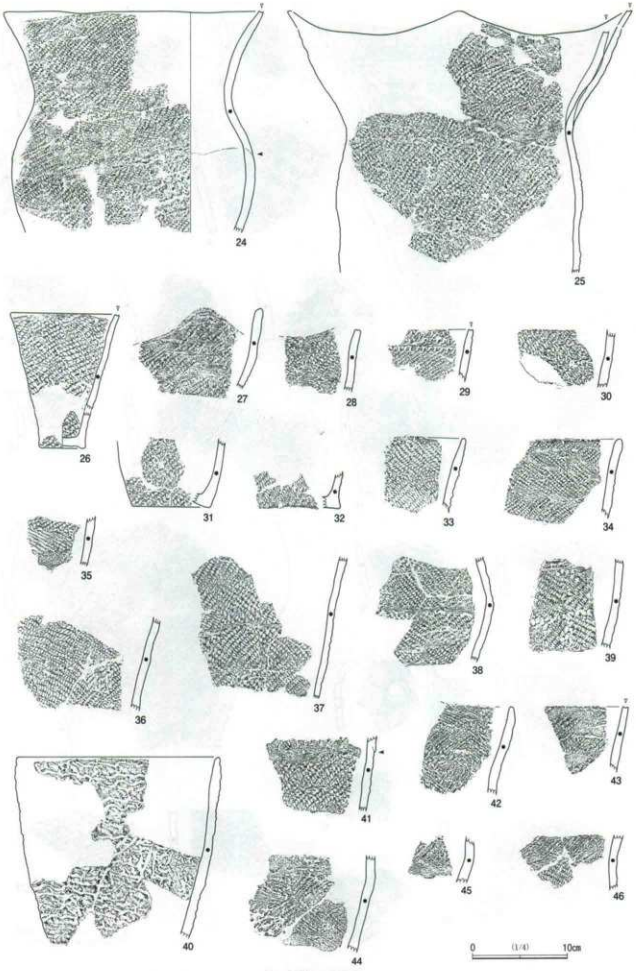

Y30-28
Y30-37
調査区外
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
A
A'
B
B'
17.20m
1 暗褐色土（含ローム粒・オレンジスコリア）
2 暗褐色土（含ローム粒多）
ピットの深さ
P1－55cm
P2－32cm
P3－28cm
P4－60cm
P5－64cm
P6－46cm
P7－29cm
P8－29cm
P9－43cm
P10－61cm
P11－61cm
P12－27cm
P13－46cm


Y30-28
C
C'
17.20m
0
(1/80)
4m

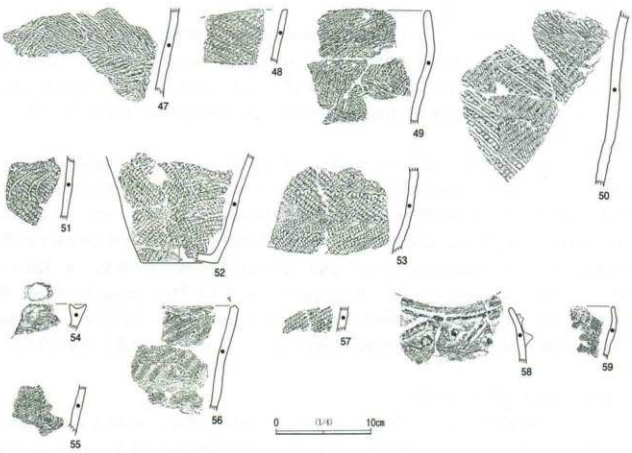
第27図　SI011（1）



第28図 SI011（2）


24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
0
(1/4)
10cm

第29図 SI011（3）



第30図　SI011（４）

上部が球形に膨らむ器形で、追加成形部位を境に羽状構成となる。推定最大径30.6cm、現高22.1cmを測る。35はLR／Rとなる。以上は羽状あるいは菱形構成を取るものが多い。40は原体は未明であるが、無節縄文の横位結節回転が集合波状沈線文のように密に施される。推定口径21.2cm、現高18.8cmを測る。41は複節LRLが施されるもので、追加成形痕が認められる。42～56は附加条縄文が施されるもので、附加条は２本用いるものが多い。42～47・54は第１種。基本的には附加条縄文の異原体を用いた羽状構成であるが、46は０段多条RLと第１種で羽状となる。43・56の口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。54は波頂部に凹文を持つ突起。48～52は第２種である。48は附加条縄文の異原体を用いた羽状構成となるが、附加条は繊細で軸の縄と対比的な効果を醸出している。50は０段多条LRと第２種で菱形構成となる。51の附加条も繊細で軸の縄と対比的な効果を醸出しているが、軸の縄への附加が緩んだためか片側が広がっている。52は附加条縄文の異原体を用いた羽状構成となるが、附加条はＬ・Ｒとも１本である。上げ底と思われ、推定底径8.0cm、現高11.1cmを測る。53は還付末端０段多条RLと軸の縄不明の附加条縄文で羽状構成となる。55・56は軸の縄が不明で、附加条はＲ３本である。57は撚糸文Ｒを施す。58は内傾する波状縁で、隆起線により口縁部に区画文を作出する。区画内には隆起線により鋸歯状文を配し、さらに瘤状貼付文を充填する。59は貝殻背圧痕文が施されるもので、器厚は所々異なり表裏とも凹凸が認められる。他に出土位置を記録した敲石・砥石各１点を図示した（第57図35、第59図46）。

SI012（第31図、図版３・４・10・23）

W33－56区付近に位置する。立ち上がり西側と床面中央部南側の一部に撹乱が認められるが、5.68m×4.92mの範囲を調査した。外形は不整円形で、確認面からの深さは0.12mを測る。炉は床面ほぼ中央に設けられる。規模は1.16m×0.54m、床面からの深さは0.07mを測る。柱穴と思われるものを含めピットは14本あるが、床面からの深さは0.1m～0.43mと比較的浅いものが半数以上である。炉近辺の３本を除き、壁に近い位置で巡る。

出土土器は全て第２群２類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約6.6kgの出土で16点を図示し得た。出土位置が記録されたものは覆土中層～上層の出土である。１は隆起線に押引文が付随し、附加条縄文第２種が施される。２～４は無節縄文Lが施される。５～７は単節縄文が施されるもので、５は還付末端RL、６はLRである。７はLR／RLの羽状縄文で、施文単位の切れ目に生じたミミズ腫れ状の粘土帯が隆起線文的である。８～14は附加条縄文が施されるもので、附加条は２本用いるものが多い。８～12は第２種で、８・９・11は羽状構成となる。８・11の附加条はL・Rとも４本である。12は推定口径22.0cm、現高25.1cmを測る。13・14は軸の縄が不明のものである。14は上げ底で、附加条はL１本である。底径7.0cm、現高1.9cmを測る。15は貝殻腹縁を用いた刺突文が縦位に施される。16は無文で、表裏とも凹凸が著しい。

SI013（第32図、図版４・10・23）

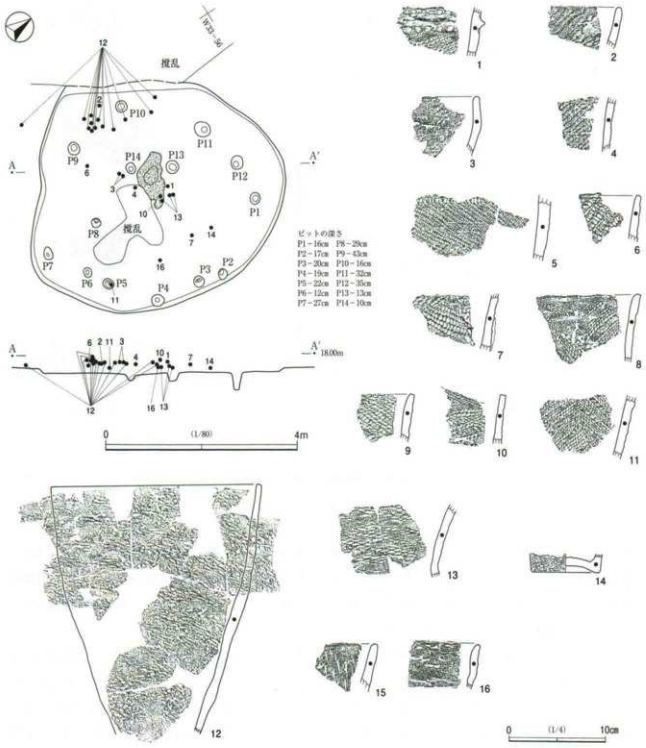
W33－57・67区付近に位置する。外形は4.68m×3.66mの不整楕円形を呈し、確認面からの深さは0.22mを測る。柱穴と思われるピットは８本あり、床面からの深さはP7が0.17mと最も浅く、P8が0.42mと最も深いが、P1～P6は0.3m前後と深さが揃う。床面中央よりやや西側に寄った位置に、炉が設けられる。規模は0.6m×0.52m、床面からの深さは0.04mを測る。

出土土器は全て第２群２類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約1.2kgの出土で４点を図示し得た。出土位置が記録されたものは床面からの出土である。１・２は単節縄文LRが施される。３・４は附加条縄文が施されるもので、いずれも軸の縄は不明である。４の附加条は異方向の原体を１組にしている。推定底径3.5cm、現高9.0cmを測る。

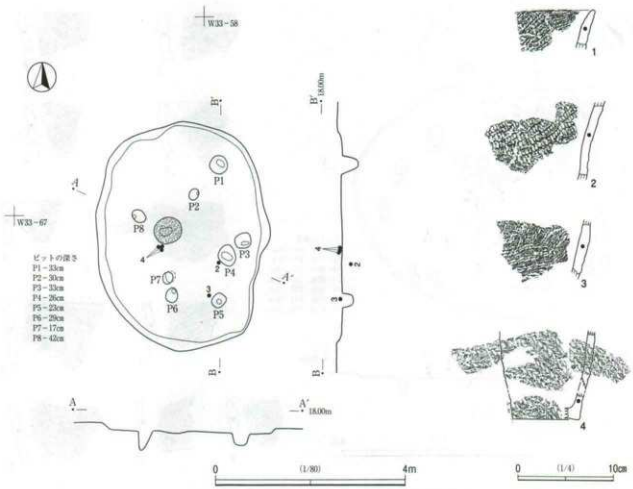
SI014（第33～35図、図版４・10・11・24）

X33－85区付近に位置する。現道との境界に所在するのでその養生のため全掘はできず、かつ確認トレンチで遺構全体を把握し得ないが、概ね略楕円形となろう。4.34m×3.72mの範囲を調査した。確認面からの深さは0.46mと本遺跡では遺存良好な竪穴住居跡である。炉は床面中心の周りに３か所認められるが、いずれも床面とのレベル差はほとんど見られず焼面と呼ぶべきかもしれない。炉Aは最も中心に近い位置にあり規模0.5m×0.34m、炉Bと炉Cはいづれも床面北東部にあり、規模は0.98m×0.73mと0.82m×0.56mとなる。ピットは11本あるが、うち７本は床面からの深さが0.05m～0.14mと浅い。P2・P7・P8・P10は床面からの深さが0.24m～0.37mで、柱穴と思われる。住居廃絶後の床面に小貝層が形成されていたが、選別等はし得なかった。

出土土器は遺構一括で中期前半約15ｇ、加曽利Ｅ式約300g、後期中葉約15g、晩期15gが出土している他は全て第２群２類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約21.2kgと本遺跡の遺構中ではSI011に次いで多量に出土しており、50点を図示し得た。出土位置が記録されたものは床面～覆土上層の出土で、平面


撹乱
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
A
A'
18.00m
ピットの深さ
P1－16cm　P8－29cm
P2－17cm　P9－43cm
P3－20cm　P10－16cm
P4－19cm　P11－32cm
P5－22cm　P12－35cm
P6－12cm　P13－13cm
P7－27cm　P14－10cm
0
(1/80)
4m
(1/4)
10cm

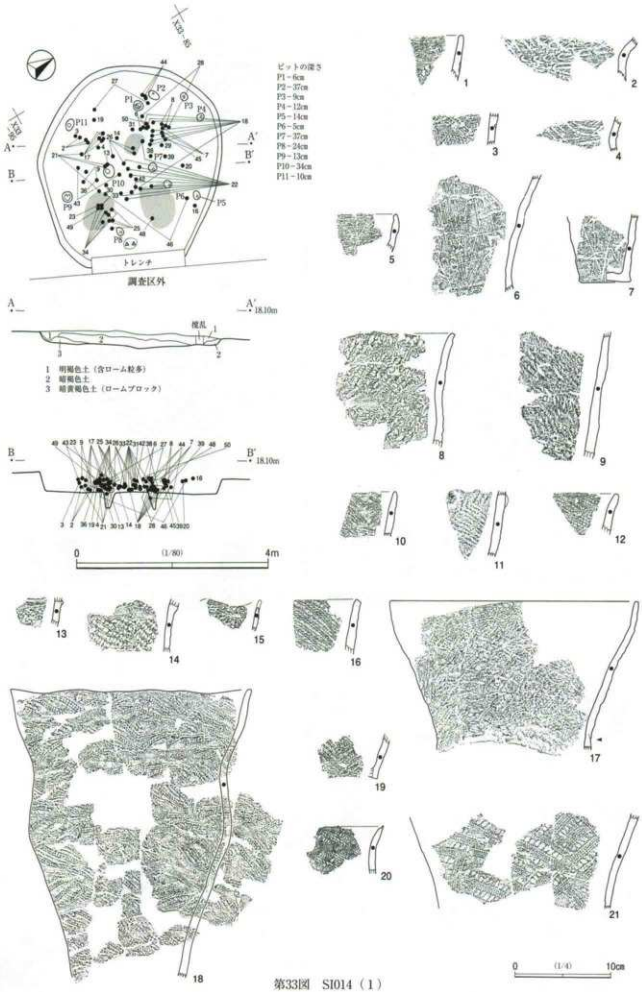
第31図　SI012



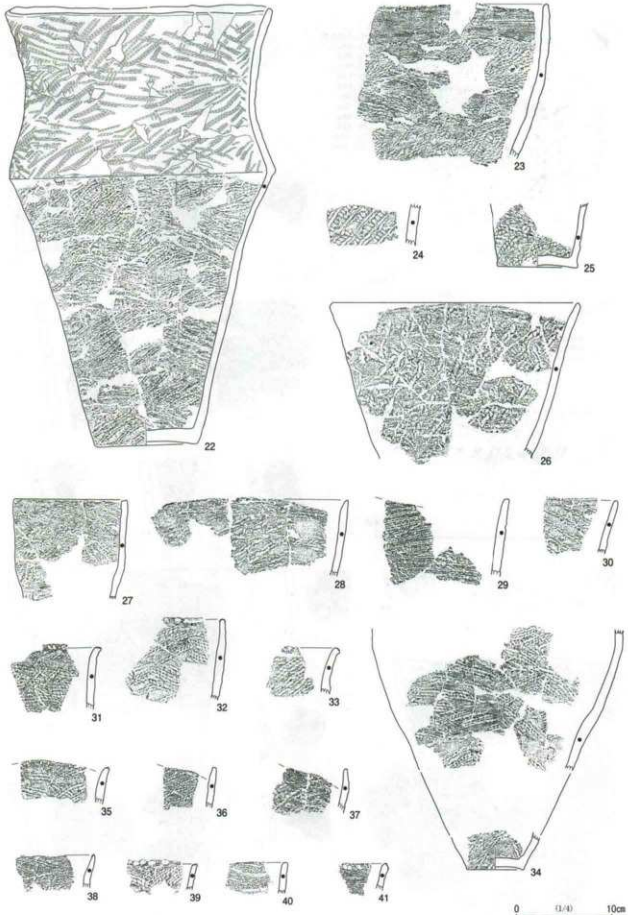
第32図　SI013

的には中央部に集中する傾向にある。1～4は半裁竹管内側を用いた平行沈線文が施される。1～3は刺突文が重ねられる。5～7は斜格子目文が施される。7は推定底径5.2cm、現高6.8cmを測る。8～11は無節縄文が施されるもので、8はL、9はR、10・11はL／Rの羽状である。12～14は単節縄文が施されるもので、全てRLである。15は撚糸文Rが横走する。

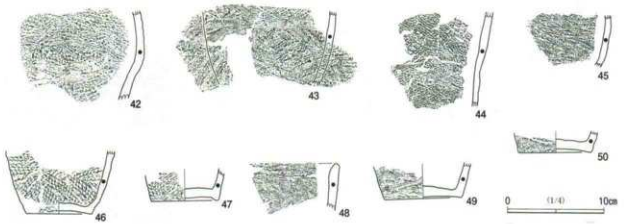
16～47は附加条縄文が施される。附加条は1～4本用いるものが認められる。16～19は第1種で、19は底部付近の破片で羽状構成を取ると思われる。17は撚りが緩んで不鮮明な箇所が多いが、第1種と第2種を併用している。第2種の附加条は比較的太い r 1本である。追加成形痕が認められ、推定口径26.0cm、現高15.1cmを測る。18は緩やかに波を打つが基本的には平縁で、附加条は第1種と第2種を併用して羽状構成を取る。軸の縄はいずれもRで、推定口径25.4cm、現高29.5cmを測る。20～25・46は第2種で、羽状または菱形構成を取るものがある。21は軸の縄である太目のLとRに、それぞれ附加条LとRを4本附加して菱形構成を取る。直前段合撚（異条）縄文に擬した施文効果が得られる。現存最大径24.2cm、現高9.7cmを測る。22の口縁部は朝顔形に開くが、これに続く胴部中位は「逆くの字」に屈曲し最大径となる強い稜を持ち、漸次やや上げ底の底部に収束する。異種原体により器面全体に羽状縄文が展開するが、部分的にはやや崩れた菱形構成を取る。口径27.7cm、器高45.0cmを測る比較的大形の深鉢である。23は第2種と軸の縄不明の異種原体で羽状構成を取る。25は推定底径8.3cm、現高6.4cmを測る。46は底部稜線まで羽状あるいは菱形構成が認められ、推定底径7.0cm、現高6.4cmを測る。26～45・47は軸の縄が不明のもの


ピットの深さ
P1－6cm
P2－37cm
P3－9cm
P4－12cm
P5－14cm
P6－5cm
P7－37cm
P8－24cm
P9－13cm
P10－34cm
P11－10cm
トレンチ
調査区外
1 明褐色土（含ローム粒多）
2 暗褐色土
3 暗黄褐色土（ロームブロック）
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm

第33図 SI014（1）



第34図 SI014（2）



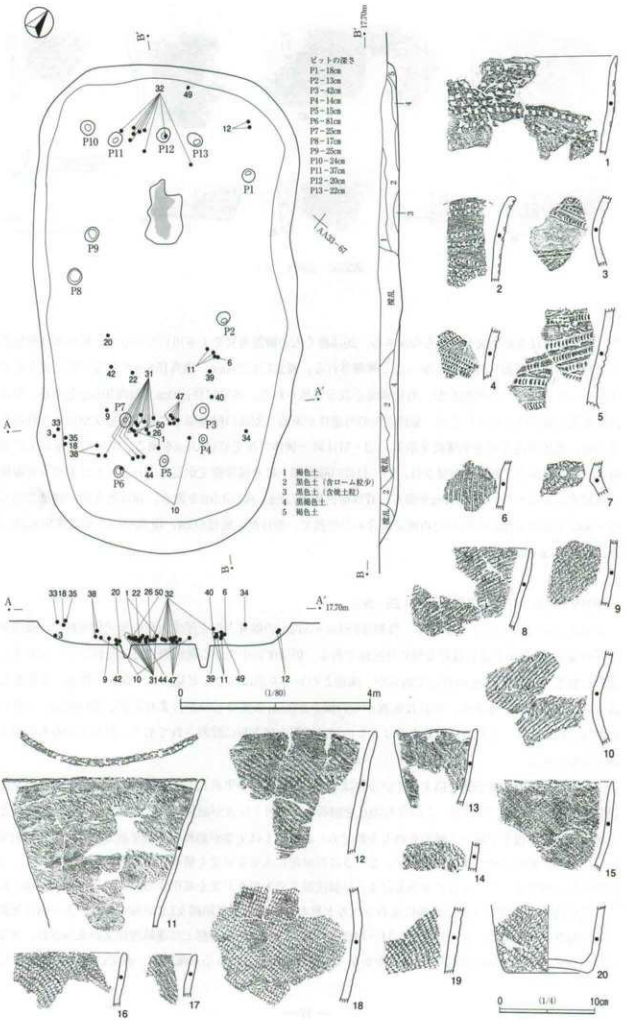
第35図　SI014（3）

で、羽状または菱形構成を取るものがある。26は粗く太い附加条Rを1本用いているが、軸の縄は附加条の太さが原因で器面に付きにくかったと推測される。推定口径26.0cm、現高15.8cmを測る。27は緩んだ原体を用いているため不明瞭だが、羽状構成を取ると思われる。推定口径12.0cm、現高10.0cmを測る。31は口縁端部に刻み目が付されるが、原体圧痕の可能性がある。32は口縁端部上に連続押捺文が巡らされると思われ、附加条縄文が菱形構成を取る。33・34は同一個体で推定底径6.0cmを測る。35は口縁端部上に間隔が不規則であるが刻み目が付され、39・41は口縁端部上に連続押捺文が巡らされる。43は菱形文が縦横に連繋すると思われ、現高7.4cmを測る。47は推定底径7.0cm、現高3.2cmを測る。48は無文の口縁部である。49・50は上部の文様が不明のため無文に含めた底部で、49は推定底径8.0cm、現高3.5cm、50は推定底径7.4cm、現高2.0cmを測る。

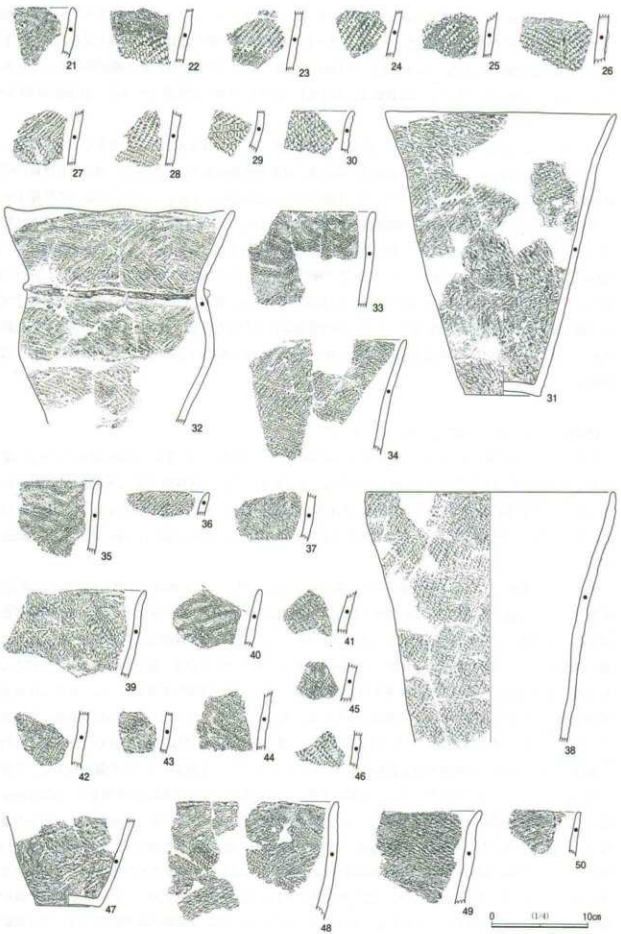
SI015（第36・37図、図版4・11・25・26）

AA33－66・76区付近に位置する。外形は9.84m×5.72mの隅丸方形を呈す大形の竪穴住居跡で、確認面からの深さは0.44mと遺存良好な竪穴住居跡である。炉は床面中央から北西側に寄った位置で、主軸上に認められる。規模は1.3m×0.7mであるが、床面とのレベル差はほとんど見られず焼面と呼ぶべきかもしれない。ピットは13本あり、中には床面からの深さが0.2m未満のものが含まれるが、他は0.2m～0.81mの範囲に収束する。これらは立ち上がりより内側の床面上に方形に配置されており、柱穴となるものが大部分と思われる。

出土土器は後期中葉が30g出土している他は全て第2群2類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約15.7kgと多量に出土しており、このうち50点を図示した。出土位置が記録されたものの多くは床面～覆土下層の出土で、覆土中層～上層のものも少数認められる。1は先端が潰れた半截半裁外側を用いた押引文を、口縁部区画内に横位連続して施す。2～5は口縁部に大形菱形文を構成すると考えられるもので、2は列点状の刺突文、3～5はC字爪形による結節沈線文で大形菱形文を描出する。6は斜沈線文が施される。7は円形竹管刺突文が口頸部に巡らされると思われ、地文に単節縄文LRが施される。8～14は無節縄文が施されるもので、8～10はL、11～14はRである。11は口縁端部上に連続押捺文が巡らされ、推定口径21.0cm、現高15.3cmを測る。13は緩やかな4単位の波状縁となる小形深鉢で、推定口径8.4cm、現高7.7


ピットの深さ
P1－18cm
P2－13cm
P3－42cm
P4－14cm
P5－15cm
P6－81cm
P7－25cm
P8－17cm
P9－25cm
P10－24cm
P11－37cm
P12－39cm
P13－22cm
1 褐色土
2 黒色土（含ローム粒少）
3 黒色土（含焼土粒）
4 黒褐色土
5 褐色土
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm

第36図　SI015（1）


21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
0
(1/4)
10cm

第37図　SI015（2）

cmを測る。15～26・28・29は単節縄文が施される。15～20はRLで、このうち17は0段多条である。20は上げ底で、推定底径9.0cm、現高7.2cmを測る。21～25はLRである。26～29は羽状構成を取る。26・28は単節RL／LRの羽状縄文である。26は施文単位の切れ目に生じたミミズ腫れ状の粘土帯が隆起線文的である。27は無節Lと附加条軸の縄不明の羽状縄文、29は還付末端RL／LRの羽状縄文である。30は複節LRLを施す。

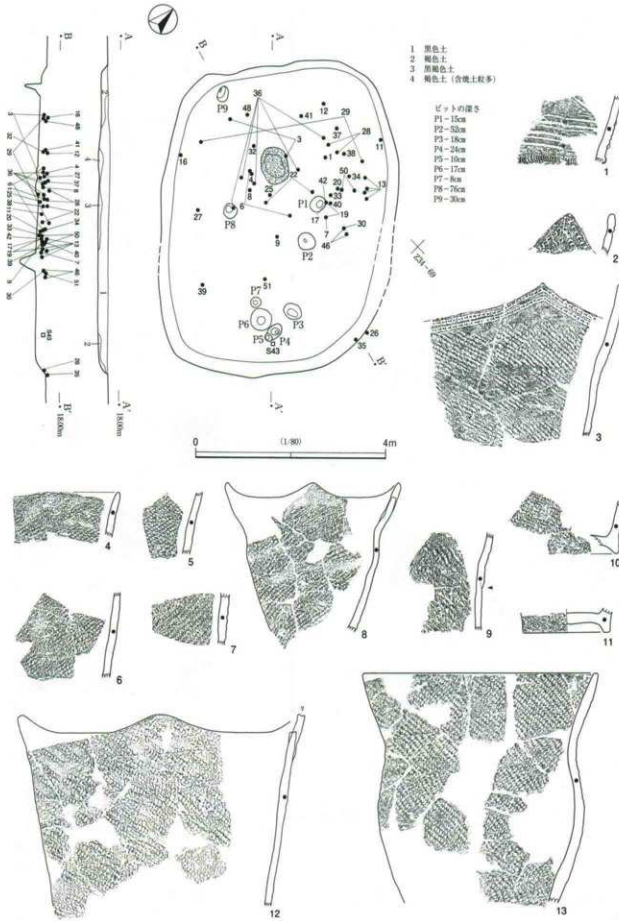
31～50は附加条縄文が施されるもの。附加条は2本用いるものがほとんどで、1本あるいは3本用いるものも若干認められる。31～37は第1種で、羽状または菱形構成を取るものがある。31は羽状構成の横帯区画幅が概ね等間隔である。上げ底で、推定口径23.9cm、器高28.5cmを測る。32は口頸部に隆起線文が巡らされ、口縁部と胴部を区画する。胴部はやや屈曲し緩やかな「逆くの字形」を呈して漸次、底部に収束すると思われる。口縁部・胴部とも附加条縄文で菱形構成を取るが、隆起線文上にも縄文が施される。推定口径24.2cm、現高21.5cmを測る。38～47は第2種で、羽状または菱形構成を取るものが多い。38は比較的短い単位で同一原体を横帯施文するもので、推定口径25.6cm、現高25.2cmを測る。41・44の附加条は繊細で軸の縄と対比的な効果を醸出している。46の附加条は比較的太いL1本である。47の附加条も比較的太いL1本で、底径6.7cm、現高9.2cmを測る。48～50は軸の縄が不明のもので、48は菱形構成、49は羽状構成を取る。

SI016（第38・39図、図版4・11・12・26・27）

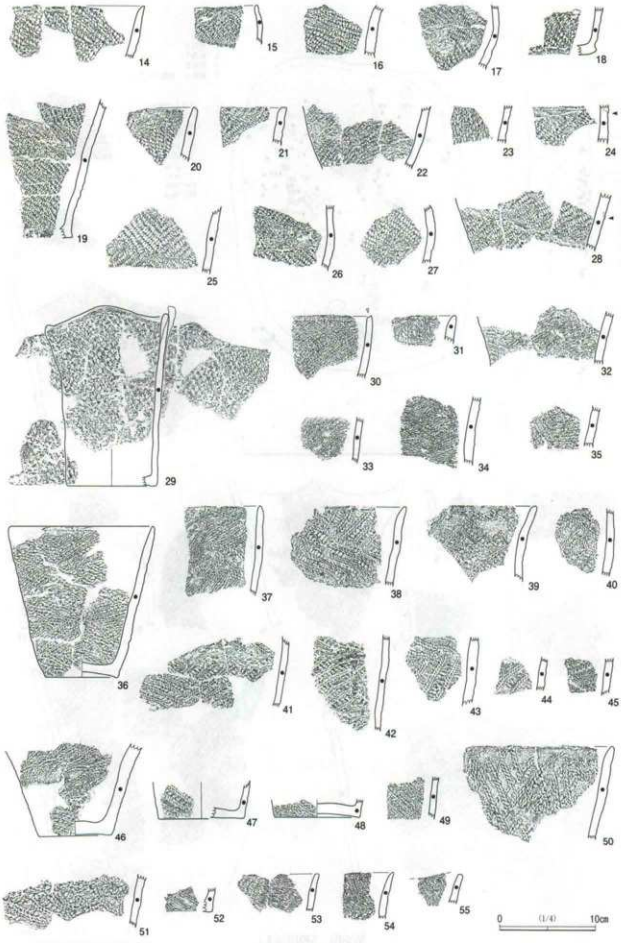
Z34－68区付近に位置する。立ち上がりの一部が攪乱により消失しているが、概ね6.44m×4.98mの隅丸方形となろう。確認面からの深さは0.25mを測る。炉は床面中央から北西側に寄った位置で、主軸上に認められる。規模は0.76m×0.57m、床面からの深さは0.06mを測る。柱穴と思われるものを含めピットは9本あるが、配置は不規則である。このうち7本は床面から0.08m～0.3mの深さ、残り2本は深さ0.52mと0.76mである。

出土土器は遺構一括で早期撚糸文系30g、後期中葉が5g出土している他は全て第2群2類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約4.4kgとそれほど多く出土していないが、55点を図示し得た。出土位置が記録されたものは床面～覆土上層の出土である。1はC字爪形による結節沈線文で区画される口縁部には半裁竹管内側を用いた平行沈線文が横位に数条巡らされる。沈線間に2箇所、瘤状貼付文が縦位に付される。右上端に斜沈線が認められるが、構成等は不明である。2・3は波状縁の形状に沿って、幅狭な区画帯が結節沈線文で作出される。3は口縁部以下にRが施される。4～7・9～11・53～55は無節縄文が施される。4～7はL、9・10はRである。11はL／Rで、推定底径8.8cm、現高2.4cmを測る。53～55はLの同一個体で、撚りに用いた繊維が固く器面に付きにくいためなのか、条間がやや空いた繊維痕が認められる。

8は波状縁を呈すると思われ、無節Lと閉じた縄の末端が看取できる単節LRを併用する。現高14.9cmを測る。12～28は単節縄文が施される。12～14・16～19はRLで、19は0段多条である。12は緩やかな波状縁で、口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。推定口径29.0cm、現高19.2cmを測る。13は甕形で、推定口径24.2cm、現高23.3cmを測る。14の口縁形態は内削ぎである。18は底部稜線が丸みを帯び、やや突出する。20～24はLRで、20は0段多条である。22は現存最大径13.7cm、現高6.2cmを測る。24には追加成形痕が認められる。15・25～28はRL／LRが施されるもので、28を除き羽状、菱形構成が明瞭である。28は追加成形痕が認められ、現存最大径16.5cm、現高5.8cmを測る。29は複節RLRを施す。4単位の波状縁になる比較


1 黒色土
2 褐色土
3 黒褐色土
4 褐色土（含焼土粒多）
ピットの深さ
P1－15cm
P2－52cm
P3－18cm
P4－24cm
P5－10cm
P6－17cm
P7－8cm
P8－76cm
P9－30cm
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm

第38図　SI016（1）


14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
0
(1/4)
10cm

第39図 SI016（2）

的小形の深鉢と思われるが、口縁部の形状と高さに違いが認められる。おそらく図化正面の対向一対が緩やかで大きく、左右の一対が小突起状になろう。推定口径は大形波状部で12.0cm、推定高18.0cmを測る。

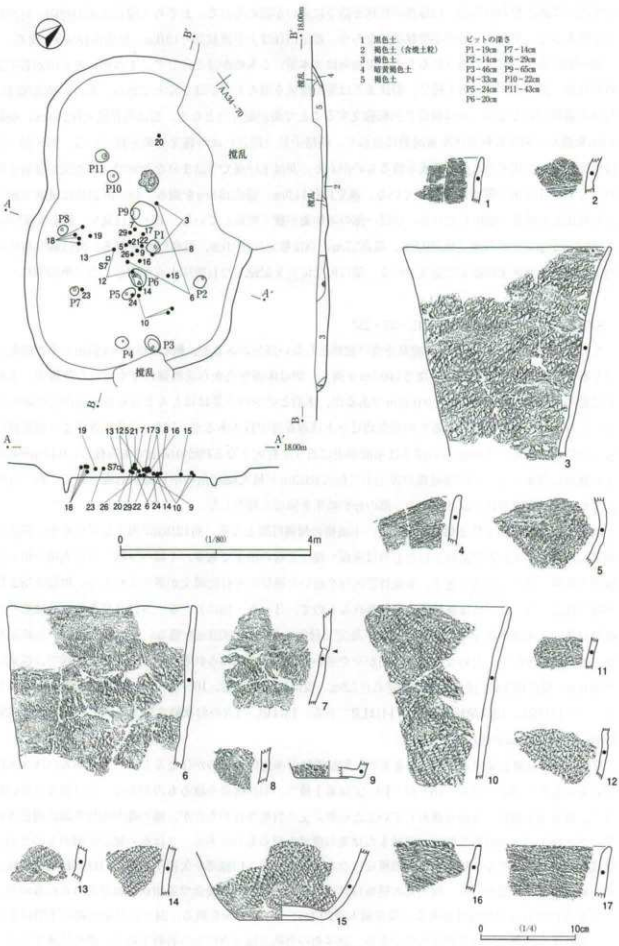
30～52は附加条縄文が施されるもの。附加条は２本用いるものがほとんどで、１本用いるものが若干認められる。30～35・50は第１種で、羽状または菱形構成を取るものがほとんどである。30の口縁端部はいわゆる溝状口唇となる。31は斜位に回転施文することで条が縦方向となる。32は現存最大径14.3cm、現高5.2cmを測る。50は異種原体を意図的に重ねて、斜格子目（網目）状の施文効果を得ている。36～49・51は第２種で、羽状または菱形構成を取るものがある。36は上げ底で寸詰まりな深鉢で、菱形文が器面を埋め尽くすような形で縦横に連繋している。推定口径14.9cm、器高15.6cmを測る。45の附加条は繊細で軸の縄と対比的な効果を醸出している。46は一部の附加条が縦く彎曲している。若干上げ底で、推定底径7.8cm、現高9.1cmを測る。47は推定底径9.1cm、現高3.7cm、48は推定底径9.0cm、現高1.8cmを測る。52は軸の縄は不明で、附加条が底部稜線まで施文される。他に出土位置を記録した石皿片１点を図示した（第59図43）。

SI017（第40・41図、図版４・12・27・28）

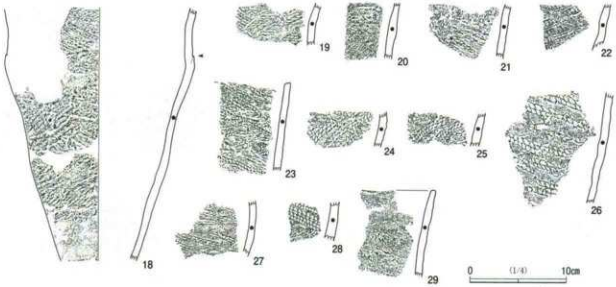
AA34－70区付近に位置する。撹乱を受け判然としない部分があるが、概ね6.48m×4.74mの不整隅丸方形と推定される。確認面からの深さは0.3mを測る。炉は床面中央から北西側にやや寄った位置で、主軸上に認められる。規模は0.44m×0.42mであるが、床面とのレベル差はほとんど見られず焼面と呼ぶべきかもしれない。柱穴と思われるものを含めピットは現存部で11本あるが、P10・11を除き炉より南東側に偏った位置にある。床面からの深さは床面中央にあり主柱穴となるP9が0.65mである他は、0.14m～0.46mの範囲に収束する。住居廃絶後の覆土中に最大長0.3m×最大幅0.2mの小貝層が形成されていた。貝サンプルは一括採取されており、その一部の分析結果を別項で報告した。

出土土器は全て第２群２類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約12.0kgが出土しているが、29点を図示し得た。出土位置が記録されたものは床面～覆土上層の出土である。１はヘラ状工具の先端を用いた繊細な沈線で斜格子目文を施す。半裁竹管内側を用いた横位の平行沈線文が巡らされよう。附加条第２種が施される。３～９・13は無節縄文が施されるもので、３～５・13はL、６～９はRである。３は撚りの緩い原体で、末端がZ字状の結節となる。推定口径22.1cm、現高20.9cmを測る。６は撚りに用いた繊維が固く器面に付きにくいためなのか、条間がやや空いた繊維痕が認められる。やや波を打つ平縁で、推定口径20.0cm、現高16.3cmを測る。９は推定底径7.2cm、現高1.8cmを測る。10～12・14・15は単節縄文が施される。10・11はRL、12は還付末端RL、14はLRである。15はRL／LRの羽状縄文である。上げ底で、推定底径9.6cm、現高9.2cmを測る。

２・16～27は附加条縄文が施されるもの。附加条は２本用いるものがほとんどで、１本あるいは３本用いるものも若干認められる。16・17・19・20は第１種で、羽状構成を取るものがある。17は撚りの緩い原体で、附加条が蛇行しながら横走しているため撚糸文と判断されがちだが、軸の縄が附加条間に観察される。２・18・21～23は第２種で、羽状または菱形構成を取るものがある。２は軸の縄が不明のものと羽状構成を取る。18はやや粗雑だが、菱形構成になると思われる。口縁部を欠損するが、口径に比して器高が高い細身の器形と思われる。胴上部の屈曲部付近に通常とは逆位の接合で追加成形痕が認められるので、成形も逆位で行った可能性がある。現存最大径20.2cm、現高25.3cmを測る。24～27は軸の縄が不明のもので、羽状または菱形構成を取るものがある。28は条の形状と施文方向から判断すると、撚糸文Rである。


1 黒色土
2 褐色土（含焼土粒）
3 褐色土
4 暗黄褐色土
5 褐色土
ピットの深さ
P1－19cm P7－14cm
P2－14cm P8－29cm
P3－46cm P9－65cm
P4－33cm P10－22cm
P5－24cm P11－43cm
P6－20cm
撹乱
18.00m
0 (1/80) 4m
0 (1/4) 10cm

第40図 SI017（1）



第41図　SI017（2）

29は無文で、器表面の整形が丁寧でないため凹凸がある。他に出土位置を記録した石鏃を1点図示した（第53図7）。

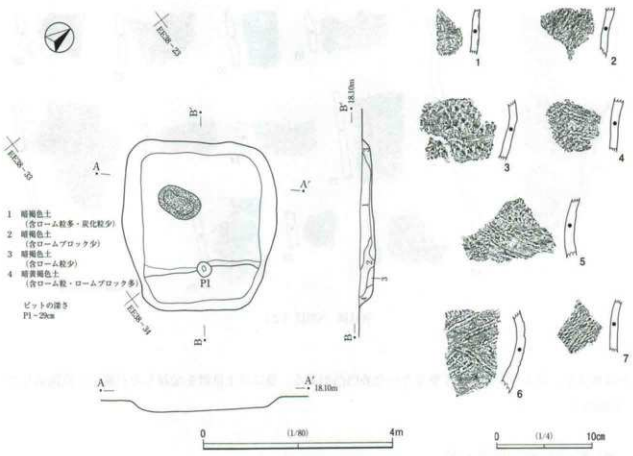
SI018（第42図、図版5・28）

EE38－23・24区付近に位置する。外形は3.42m×3.28mの隅丸方形を呈す小形の竪穴住居跡であるが、確認面からの深さは0.4mと遺存良好な竪穴住居跡である。南東側に最大長2.58m×最大幅1.02mで、最大0.1m程度の段差が認められる有段部を有す。柱穴と思われるピットは主軸上の有段部に1本認められ、深さ0.29mを測る。炉は主軸より西側の床面に偏在して設けられ、規模は0.48m×0.4m、深さは0.07mを測る。

出土土器は全て第2群2類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約0.43kgと少量の出土で、7点を図示するに止まった。全て遺構一括取り上げである。1は連続刺突文を横位に数条施すと思われる。2・3は無節縄文が施されるもので、2はL、3はRである。3は撚りに用いた繊維が堅いためか、器面に表出される繊維痕が深い。4～7は附加条縄文が施される。4・5は第2種で、附加条は2本である。4は羽状構成を取る。6・7は軸の縄が不明で、6は羽状あるいは菱形構成を取ると思われる。7は附加条が3本である。他に遺構一括取り上げの不明土製品1点を図示した（第61図3）。

SI019（第43～45図、図版5・12・13・28・29）

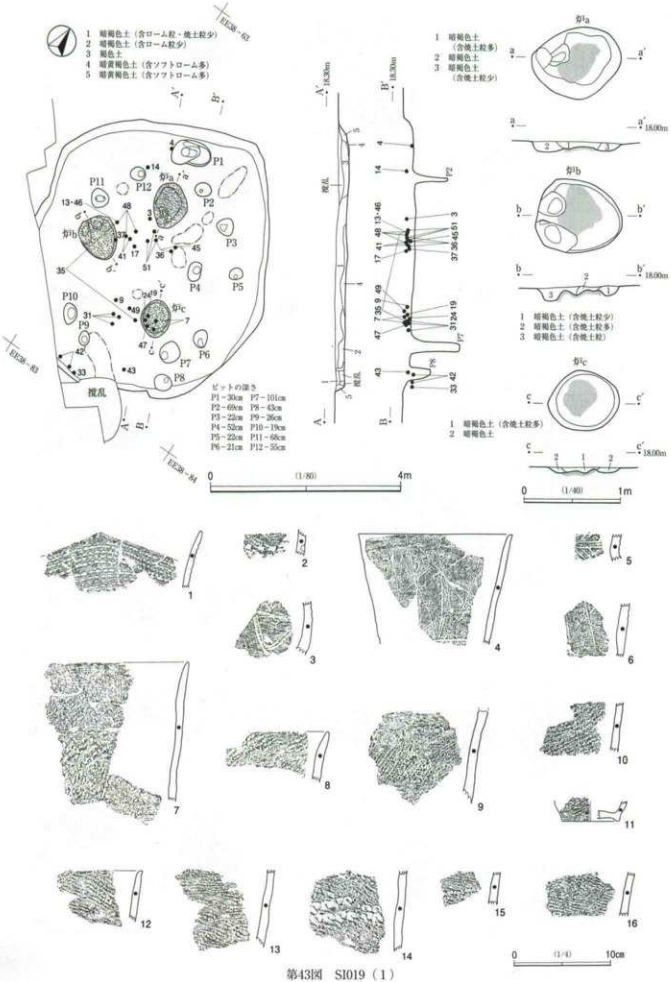
EE38－63・73区付近に位置する。現道との境界に所在するのでその養生のため全掘できず、かつ攪乱で部分的に消失しているため全体は未明だが、概ね不整隅丸方形を呈すと思われる。5.5m×4.96mの範囲を調査した。確認面からの深さは0.28mで、床面には小範囲の硬化面が数か所認められる。炉は床面中心の周辺に3か所認められる。炉Aは規模0.92m×0.57mで床面からの深さは0.12m、炉Bは規模0.92m×0.72mで床面からの深さは0.14m、炉Cは規模0.76m×0.62mで床面からの深さは0.06mを測る。柱穴と思われるピットは12本あるが、0.19m～1.01mまでばらつきがある。



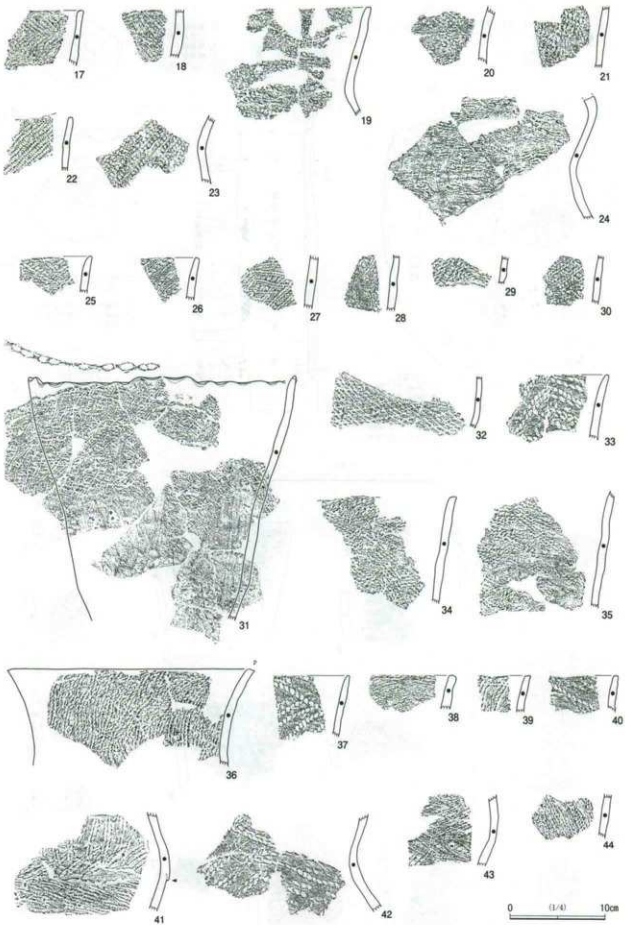
第42図　SI018

出土土器は全て第２群２類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約8.0kgが出土しているが、51点を図示し得た。出土位置が記録されたものは床面～覆土中層の出土である。１は波状縁の形状に沿って結節沈線文が密に施される薄手の土器で、内面調整も丁寧である。２は口頸部と思われる部位に押引文が認められ、附加条第２種も施される。３は半裁竹管内側を用いた平行沈線で鋸歯状沈線文が描出される。４は口縁端部から胴上部まで、ヘラ状工具の先端を用いて鋭く引いた斜格子目文が施される。残存部下端に同一工具により横位沈線文が描出されるが、詳細は不明である。推定口径16.1cm、現高11.1cmを測る。５は口頸部と思われる部位に、半裁竹管内側を用いた平行沈線文が認められる。無節Ｌを施す。６はヘラ状工具の先端を用いて鋭く引いた斜格子目文が施される。７～18は無節縄文が施されるもので、７・８・10・11はＬで、11は推定底径6.1cm、現高2.1cmを測る。12～16はＲで、14・15は還付末端である。17・18はＬ／Ｒで、17は菱形構成となる。19～23は単節縄文が施されるもので、19～21はRL、22はLR、23はRL／LRである。19の口頸部付近は斜位に回転施文するため条が横走する。

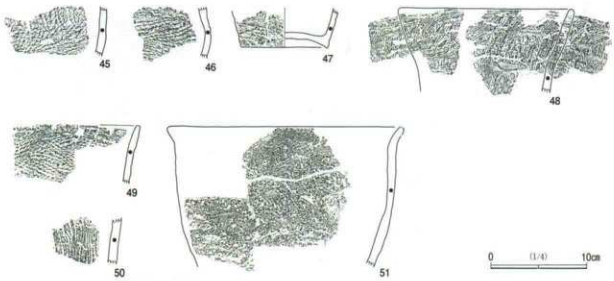
９・24～48は附加条縄文が施される。附加条は２本のものがほとんどであるが、１本あるいは３本、４本用いるものも若干認められる。９・24は第１種で、９の附加条はｒ２本である。24は口頸部が強く括れた後、胴部が甕形となろう。撚りが緩く軸の縄、附加条とも条の乱れが生じている。25～30は第２種で、羽状または菱形構成を取るものがある。26は附加条が繊細なＬ４本で、軸の縄が不鮮明な箇所も認められる。複数条のまとまりが規則的に間隔を置く場合、撚糸文とせず附加条軸の縄不明とする所以である。31・32は第３種である。31は口縁端部上に連続押捺文が施す。胴部下半は縦方向のヘラナデで無文化して


1 暗褐色土（含ローム粒・焼土粒少）
2 暗褐色土（含ローム粒少）
3 褐色土
4 暗黄褐色土（含ソフトローム多）
5 暗黄褐色土（含ソフトローム多）
ピットの深さ
P1－30cm P7－101cm
P2－69cm P8－43cm
P3－22cm P9－26cm
P4－52cm P10－19cm
P5－22cm P11－68cm
P6－21cm P12－55cm
0 (1/80) 4m
1 暗褐色土（含焼土粒多）
2 暗褐色土
3 暗褐色土（含焼土粒少）
1 暗褐色土（含焼土粒少）
2 暗褐色土（含焼土粒多）
3 暗褐色土（含焼土粒）
1 暗褐色土（含焼土粒多）
2 暗褐色土
0 (1/40) 1m
0 (1/4) 10cm

第43図 SI019（1）


17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
(1/4)
10cm

第44図　SI019（2）



第45図　SI019（3）

おり二帯構成となる。推定口径27.8cm、現高24.5cmを測る。32は口縁端部を欠損するが、ナゾリ沈線から判断すると波状縁となろう。33～47は軸の縄が不明のもので、羽状または菱形構成を取るものがある。太目の附加条を用いているものが多い。34～36は繰り返し施文し重なるため条間の空白が埋まり、一見すると撚糸文と見紛うものである。36の口縁端部はいわゆる溝状口唇で、推定口径25.0cm、現高9.7cmを測る。41は追加成形部位を境に口縁部～胴部中位は附加条軸の縄不明、胴部下半～底部には無節Rが施され二帯構成となる。47は上げ底で、推定底径9.1cm、現高4.0cmを測る。48～50は条の形状と施文方向から判断して、撚糸文が施されるものとした。48・49はRである。48は推定口径17.8cm、現高8.4cmを測る。50はLである。51は器表面が荒れていて不鮮明な部分が多いが、貝殻背圧痕文が施される。推定口径24.4cm、現高14.0cmを測る。

4　土坑

発掘区全体で僅か5基検出されているだけで、非常に散漫な分布を示している。

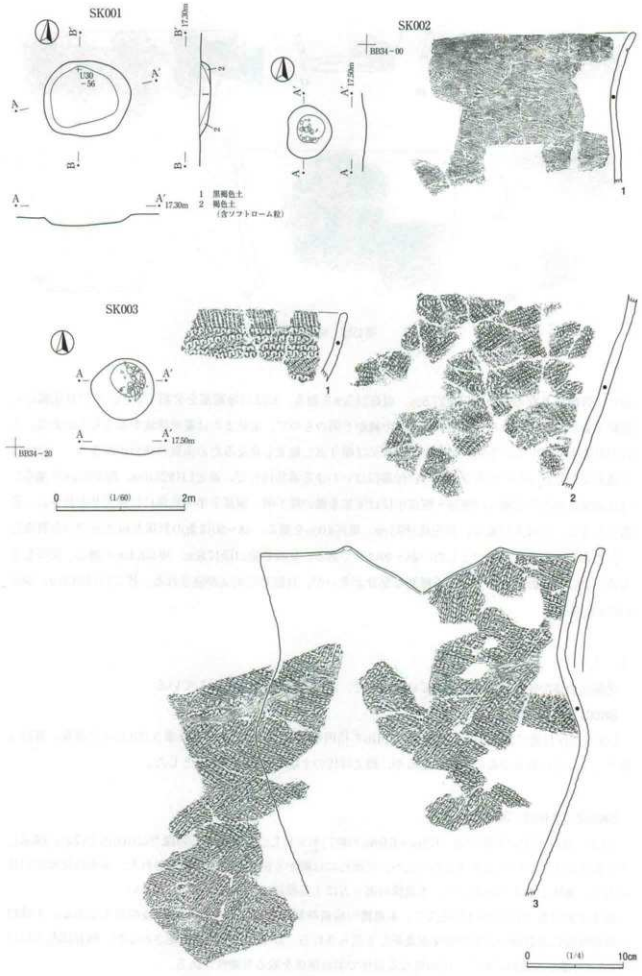
SK001（第46図）

U30－56区付近に位置する。1.38m×1.14mの楕円形を呈し、確認面からの深さは0.17mを測る。遺物は出土していないため詳細は不明であるが、縄文時代の土坑の可能性があるとした。

SK002（第46図、図版5・13・）

AA34－09区付近に位置する。0.8m×0.69mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.06mと浅い。図示した土器は出土レベルの記載はなかったが、平面的には細かく割れた状態で検出された。本来は比較的口径の大きい個体と考えられるので、本遺構の掘り方は土器埋設に伴うものかもしれない。

出土土器は第2群2類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。1点のみ約0.3kgの出土である。1は口縁端部付近に未貫通の円形刺突文が連続して巡らされる。以下には無節Rが施されるが、残存部左上には単節LRも僅かに認められる。段の異なる原体で羽状構成を取る可能性がある。



第46図　SK001・SK002・SK003

SK003（第46図、図版５・13・）

BB34－10区付近に位置する。1.0m×0.92mの略円形を呈し、確認面からの深さは0.07mと浅い。図示した土器は出土レベルの記載はなかったが、平面的には２個体分が細かく割れた状態で検出された。本遺構の掘り方はSK002と同様に土器埋設に伴うものかもしれない。

出土土器は図示したものが全てで、第２群２類の黒浜式が本遺構の帰属時期となる。約2.2kgの出土である。１・２は同一個体で口縁端部に刷毛目状沈線を施す。以下の口縁部には還付末端RL（おそらく０段多条）の頭部のみを４段施文した縄文帯が形成される。以下の胴部には還付末端０段多条RL／LRを用いた羽状、部分的には菱形構成を取ると思われる。縄文の施文順序であるが、羽状縄文を刷毛目状沈線以下から先に施した後、頭部のみの縄文帯を施していることが、口縁部破片の一部にある条と還付末端との切り合い関係から観察できる。胎土中に繊維・砂粒を少量含む。３は平縁の口縁端部に小突起が付されるが、その部分から漸次切り込み状に口縁部が下がる。決定要素がないため対称形に復元したが、中心に注口部が付く可能性はあり、胴部やや上部に最大径がある器形となろう。附加条第２種で菱形構成を取るもので、直前段合撚（異条）縄文に擬似した施文効果が得られている。推定口径34.3cm、現高35.3cmを測る。

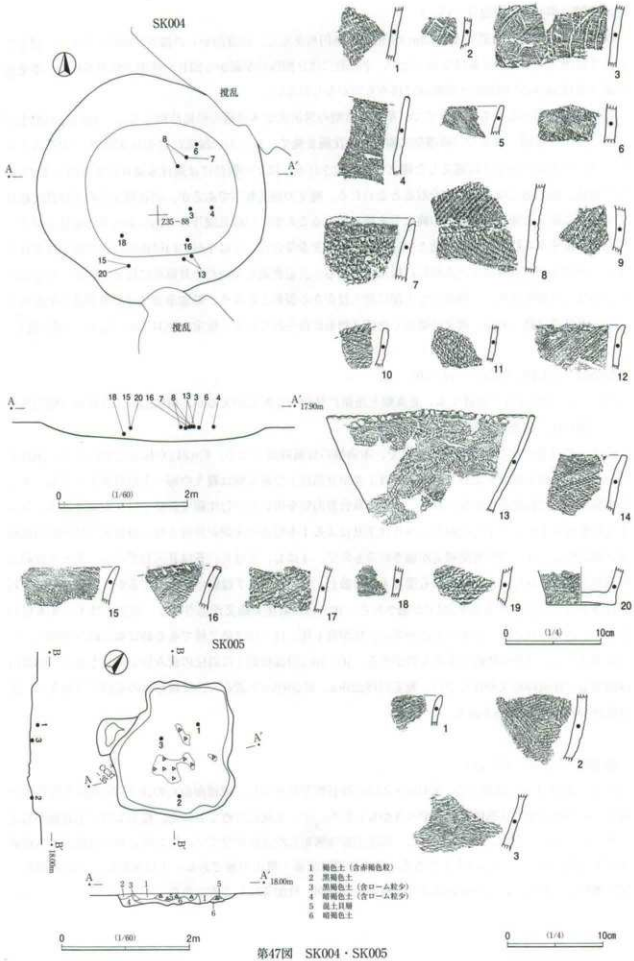
SK004（第47図、図版５・14・29）

Z35－77・78区付近に位置する。北東側と南側に部分的な撹乱が入るが、概ね3.6m×3.44mの略円形を呈すると思われ、確認面からの深さは0.3mを測る。

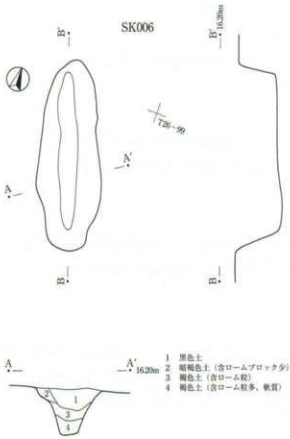
出土土器は全て第２群２類の黒浜式で、本遺構の帰属時期となる。約6.8kgが出土しているが、20点を図示し得た。出土位置が記録されたものは１点が底面直上である他は覆土中層～上層の出土である。１は地文無節Ｌ上に斜沈線文が施される。２は半裁竹管内側を用いた平行沈線で斜格子目文が施される。３は半裁竹管内側を用いた平行沈線と、ヘラ状工具による１本引きの沈線が併用され、縦位または斜位の沈線文を描出する。４～８は無節縄文が施されるもので、４はＬ、５はＲ、６はＲ／Ｌである。７・８は縄文帯の施文単位は異なるが、いずれも還付末端無節Ｌ／Ｒである。７は僅かに欠損するが、口縁端部に突起が付される。９は０段多条単節LRが施される。10～19は附加条縄文が施される。附加条は１～４本用いるものが認められるが、２本のものが多い。10が第１種、11・13は第２種である他は軸の縄が不明で、中には羽状あるいは菱形構成を取るものがある。10・16は口縁端部上に斜位の刻み目が巡らされる。13は口縁端部上に連続押捺文が巡らされ、推定口径22.0cm、現高9.8cmを測る。20は残存部の範囲では無文で、推定底径6.8cm、現高3.4cmを測る。

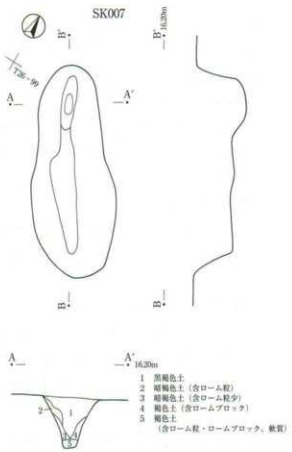
SK005（第47図、図版29）

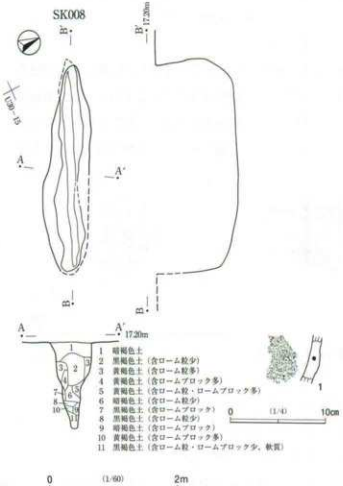
CC37－25区付近に位置する。2.94m×2.12mの不整方形を呈し、確認面からの深さは0.21mを測る。形状からいわゆる竪穴状遺構と分別すべきかもしれないが、土坑に含めておいた。覆土上層に小貝層が形成されていたが、選別等はし得なかった。出土土器は図示した３点が全てで、第２群２類の黒浜式が本遺構の帰属時期となる。0.1kgの出土である。出土位置は床面～覆土中層である。１は無節Ｌ、２は無節Ｌ／Ｒの菱形文である。３は附加条縄文で、軸の縄は不明、附加条はＬ２本である。



第47図　SK004・SK005







第48図　SK006・SK007・SK008

5　陥穴

発掘区全体で僅か3基検出されているだけであるが、このうち主軸もほぼ同じであるSK006とSK007は約2mの間隔で並列した位置関係にある。

SK006（第48図、図版5）

T26－98区付近に位置する。2.86m×1.04mの長楕円形を呈し、確認面からの深さは最深部で0.74mを測る。遺物は出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に頻出する溝型陥穴と考える。

SK007（第48図、図版5）

ET26－99区付近に位置する。3.2m×1.34mの長楕円形を呈し、確認面からの深さは最深部で0.84mを測る。遺物は出土していないが、遺構形状から草創期後半～早期前半に頻出する溝型陥穴と考える。

SK008（第48図、図版5・29）

U30－05区付近に位置する。3.23m×0.72mの長楕円形を呈し、確認面からの深さは最深部で1.34mを測る。遺構形状から草創期後半～早期前半に頻出する溝型陥穴と考える。遺物は遺構一括で1の含繊維無文土器が1点のみ出土している。第2群2類の黒浜式であるが、時期を決定するものではない。

6　遺構外出土土器（第49～52図、図版14・30～33）

本遺跡では遺構出土土器に加え遺構外出土土器の大半が黒浜式であるが、少量ながら早期前半撚糸文系土器から晩期後半の土器までの間の諸型式も出土しているので、順に説明しておく。

第1群1類　早期前半撚糸文系土器（第49図1～3、図版30）

1は単節RLが表面口縁直下、口縁端部上、裏面口縁直下上位に施される。井草式古段階の範疇で鎌倉市大船山居遺跡に典型例がある。胎土中に粗砂粒を多く含む。2は口縁端部が肥厚して外反する。裏面端部には連続的な指頭押捺によって生じた凹線が巡ると思われる。単節RLが端部上と胴部に施されるが、胴部は斜位に施文することで縦位の条を得る。3は疎らな撚糸文Lが施されるので稲荷台式に比定される。

第49図　遺構外出土土器（1）

第2群1類　前期初頭花積下層式土器（第50図4、図版30）

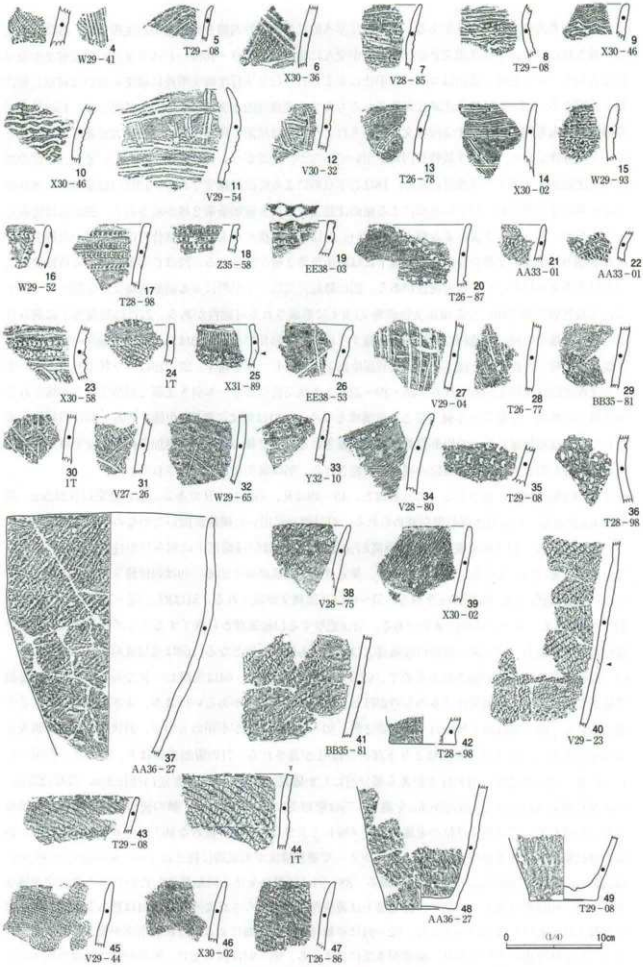
4は表面に単節RL、裏面に貝殻条痕文を施したいわゆる縄文条痕土器である。

第2群2類　前期中葉黒浜式土器（第50図5～第52図99、図版14・30～32）

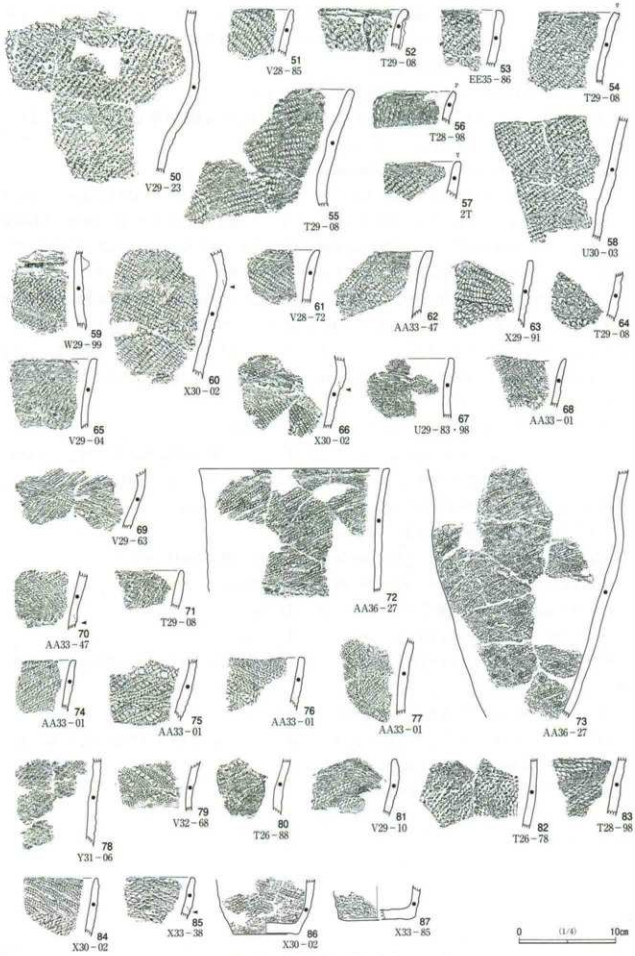
5・6は半裁竹管内側を用いた平行沈線文が施される。6の地文は複節LRLで、平行沈線のモチー

フから関山Ⅱ式終末の可能性がある。7～12は基本的に半裁竹管内側を用いた平行沈線文が、横位に集合して施される。8は平行沈線文と波状沈線文が交互に施される。9・10はいわゆる集合波状沈線文が施されるもので、波状沈線の描出はコンパス手法による。11・12は平行沈線文帯間に縦位あるいは斜位に短沈線を充填する。13～23は結節沈線文が施されるもので、直曲線的な文様モチーフを描出する。13は波状縁の口縁部に大形菱形文に類する波状文が描出されよう。14は結節の間隔が長い。15は大形菱形文を描出している可能性がある。16は半裁竹管内側を用いているが、先端がペン先状に加工されている。17は部分的に結節沈線が立ち消える可能性がある。18はC字爪形による結節沈線文である。19は口縁端部上に連続押捺文を巡らすと思われ、以下に爪形による結節沈線文を2条と附加条第2種が施される。20は結節沈線文に含めたが、押し引き手法による列点文に近い。21は先端に抉りの入った半裁竹管内側を用いた押引文が、口縁端部の狭小な無文帯を作出する。以下には附加条第2種が施される。22はC字爪形による結節沈線文で大形菱形文を描出している可能性がある。23は隆起線間にC字爪形による結節沈線文が付随する。以下には半裁竹管内側を用いた鋸歯状文帯が地文LR上に形成される可能性がある。24は口縁端部上に刻み目が付され、端部の狭小な範囲に斜沈線文を施す。以下は無節Rである。25は同じく口縁端部の狭小な範囲に縦位に密接した沈線文を施す。追加成形部位以下は無節L／Rを施す。27・28はヘラ状工具による一本引き沈線で縦位沈線文が施される。26・29～32はヘラ状工具による一本引き沈線で斜格子目文が施される。29は以下の無節Rが施される縄文帯と二帯構成となろう。31は地文に無節Rが施される。33は波状縁に密接して、34は波状縁に沿って円形竹管刺突文が施される。34は軸の縄不明の附加条縄文が菱形構成となろう。35は押し引き手法による横位の列点文が施される。36は刺突文が密に施される。

37～50は無節縄文が施される。37～42はL、43～49はR、50はL／Rである。37は推定口径21.5cm、現高24.4cmを測る。40は追加成形痕が認められる。41は撚りに用いた繊維が固いためなのか、繊維痕が深くくい込んでいる。42は推定底径7.0cm、現高3.7cmを測る。43は口縁端部上に刻み目が付され、44の端部上はいわゆる溝状口唇となる。48は上げ底で、推定底径cm、現高cmを測る。49は斜位施文で縦位の条を得ている。推定底径7.0cm、現高6.7cmを測る。51～61は単節縄文が施される。51はRL、52～59はLR、60・61はRL／LRである。51・57は0段多条である。52は肥厚する口縁端部から垂下するミミズ腫れ状の粘土帯が隆起線文的である。54・56・57の口縁端部上はいわゆる溝状口唇となる。60は追加成形痕が認められる。62～64は還付末端縄文が施されるもので、62は単節LR、単節RL、64は無節L／Rである。65～87は附加条縄文が施される。附加条は2本のものがほとんどであるが、1本あるいは3本、4本用いるものも若干認められる。65～70は第1種、71～79で第2種、80～87は軸の縄が不明のもので、羽状または菱形構成を取るものがある。66は追加成形痕より下部に単節RLが施される。71の附加条にはℓ、80にはrが用いられている。72・73は軸の縄の付きが悪く部分的にしか確認できない。72は推定口径19.8cm、現高12.3cm、73は現存部最大径20.8cm、現高26.3cmを測る。75は附加条に緩みがあるが、軸の縄が鮮明であるため撚糸文と分別される。77は施文単位の末端にミミズ腫れとまではいかない微妙な粘土の寄りが認められる。78は非常に繊細な附加条を用いているため、かえって菱形構成が視覚的に捉えにくい。86は推定底径6.9cm、現高5.8cm、推定底径8.0cm、現高3.5cmを測る。88～94は短軸絡条体を回転施文したいわゆる撚糸文が施される。88・89は撚糸文Rで、88の口縁端部上は連続押捺文が巡らされよう。90・91は撚糸文Lで、90の口縁端部上はいわゆる溝状口唇となる。92～94は単軸絡条体第5類による網目状撚糸文が施される。92は撚り戻った原体を用いたと思われ、繊維が多量に含まれる。93・94は撚糸文R、94の原体は繊細で胎土中に



第50図　道構外出土土器（2）



第51図　遺構外出土土器（3）

粗砂粒を含むので、大木2a式系であろう。95は貝殻腹縁文、96は貝殻条痕文を施す。97・98は無文であるが、横位のヘラナデ痕が認められる。98は推定底径8.0cm、現高7.8cmを測る。99は残存部の範囲では無文の上げ底で、推定底径8.0cm、現高3.5cmを測る。

第２群３類　前期後葉浮島式土器（第52図100～102、図版32）

100はⅠ式で、口縁端部から半裁竹管内側を用いたはC字爪形による結節沈線文、波状沈線文が交互に施される。101・102は三角文が施されるⅡ～Ⅲ式である。

第３群１類　中期前葉阿玉台式土器（第52図103～108、図版33）

103はⅠa式である。単列角押文で区画された狭小な口縁部文様帯内には、単列角押文が鋸歯状に充填される。文様帯の下端から断面三角形の隆起線文が「くの字形」に垂下すると思われる。区画外にも角押文が認められるが、詳細は不明である。口縁端部裏面には印刻文が施される。104は勝坂式の影響を受けたⅢ式で、口縁端部の断面カマボコ形の隆起線にキャタピラ文が付随する。以下にもキャタピラ文が並列する。胎土中に雲母粒をやや多目に含む。105はⅢ式で、口縁部に幅広角押文が付随する隆起線で楕円区画文を形成すると思われる。106はⅡ～Ⅲ式で、角押文が付随する区画接点に円板状貼付文が貼付される。107は大形波状縁になる無文の浅鉢と思われる。胎土中に雲母粒を多く含む。108は口縁端部から無節Ｌ／Ｒを施す。内面に強い稜を持ち、胎土中に長石など粗砂粒を多量に含む。Ⅳ式あるいはそれ以降と思われる。

第３群２類　中期後葉加曽利Ｅ式土器（第52図109～122、図版33）

多くがⅡ式で、一部はⅢ式になる可能性もある。109はキャリパー形の口縁部区画文、110～112・119はキャリパー形の胴部磨消懸垂文である。113～115は連弧文系の土器である。117・118は櫛歯状工具による条線文が施される。120は無文の浅鉢、121・122は有孔鍔付土器と思われる。

第４群１類　後期前半堀之内式土器（第52図123、図版33）

123は球状に膨らむ鉢形の可能性がある。内部に縄文を充填する弧線文が見られる。

第４群２類　後期中葉加曽利Ｂ式土器（第52図124～126、図版33）

124は入組弧線文が施される精製土器で、124・126は粗製土器である。

第４群３類　後期後葉安行式土器（第52図127～129・132～135・137、図版33）

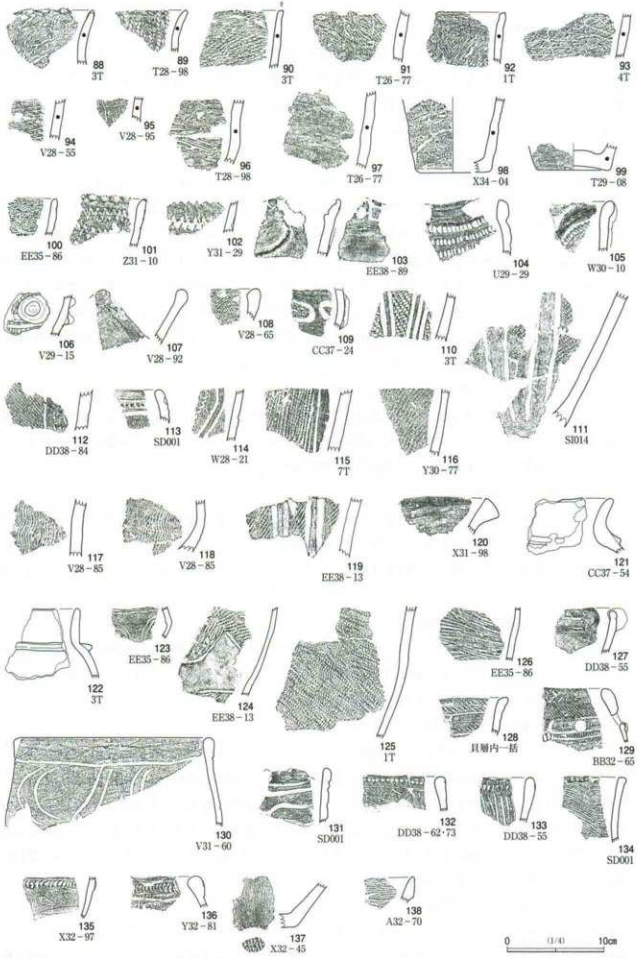
127・128は１式、129は２式の精製土器である。132～135は粗製土器である。137は網代痕のある底部である。

第５群１類　晩期前半安行式土器（第52図130・131・136、図版14・33）

130・131は３c式の精製土器で、136は３a式の粗製土器である。130は推定口径19.8cm、現高8.9cmを測る。

第５群２類　晩期後半の土器（第52図138、図版33）

138は屈曲する口縁端部に撚糸文Ｒが横位施文される。



第52図　遺構外出土土器（4）

7　土器以外の出土遺物

土器については前節までに遺構に伴うものと遺構外に分けて説明を加えた。ここでは石器と、出土量が比較的少ないものをとりまとめて記載する。遺構出土の遺物は、図示したものについては遺構の項に遺物名と点数を記載し、出土位置の記録のあるものは遺構図に位置を示しておいた。

（1）石器（第53～59図、図版36～38）

①石鏃（第53図1～13、図版36）

出土した13点すべてを図示した。使用される石材はチャート10点、安山岩2点、頁岩1点であり、チャートが76.9%を占める。本報告で扱った原畑遺跡の調査区から出土した剥片石器のうち、剥片は36点を数えるが、このうちチャートが15点と点数的に半数近くを占めることからも、チャートが多用されていることが窺える。反面、黒曜石製の剥片が8点出土しているにもかかわらず、石鏃その他の製品に黒曜石製のものがみられないことも特色としてあげられる。石鏃の形状は、凸基が1点（13）含まれる他はすべて凹基もしくは凹基に準じる。最大のものは長さ2.88cm、幅1.78cm（4）、最小のものは長さ1.26cm、幅0.81cm（5）を計るが、他は長さ2cm、幅1.3cm内外に収束される。遺構から出土した石鏃は、1のSI005住居跡、7のSI017住居跡であり、他はグリッド出土である。

②調整痕の認められる剥片（第53図14～16、図版36）

出土した3点をすべて図示した。14は泥岩製で打面から片側縁にかけて欠損している。調整は剥片末端部および打面から側縁にかけての腹面側に認められる。15はチャート製で、剥片末端部に調整を施す。16は頁岩製で、右側縁から末端部にかけて微細な調整を施す。

③石核（第53図17・18、図版36）

出土した2点をすべて図示した。両者ともチャート製である。17は円礫利用の石核であり、挟み割りされた上下両端からの剥離痕が表裏面に認められる。楔形石器としての報告例が多いが、上下両端の細かい剥離痕は刃部作出とは考え難い。18は角礫利用であり、上下両端から頻繁に剥片を作出していることが窺える。

④打製石斧（第54図19・20、図版36）

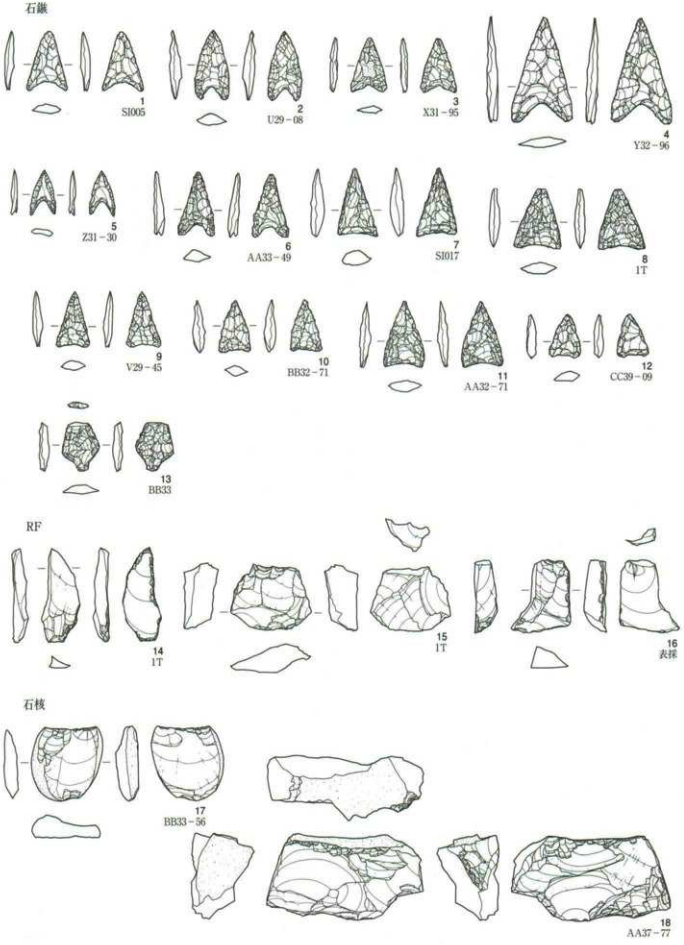
出土した2点をすべて図示した。19は変成岩の棒状礫の一端に刃部を作出し、片側縁には表裏両面に調整を施し形状を整えている。20は形状的に疑問が残るが、ここでは打製石斧の欠損品として扱った。安山岩製で、一部に原礫面を残し全周から密に調整を施す。

⑤磨製石斧（第54図21～第55図27、図版36）

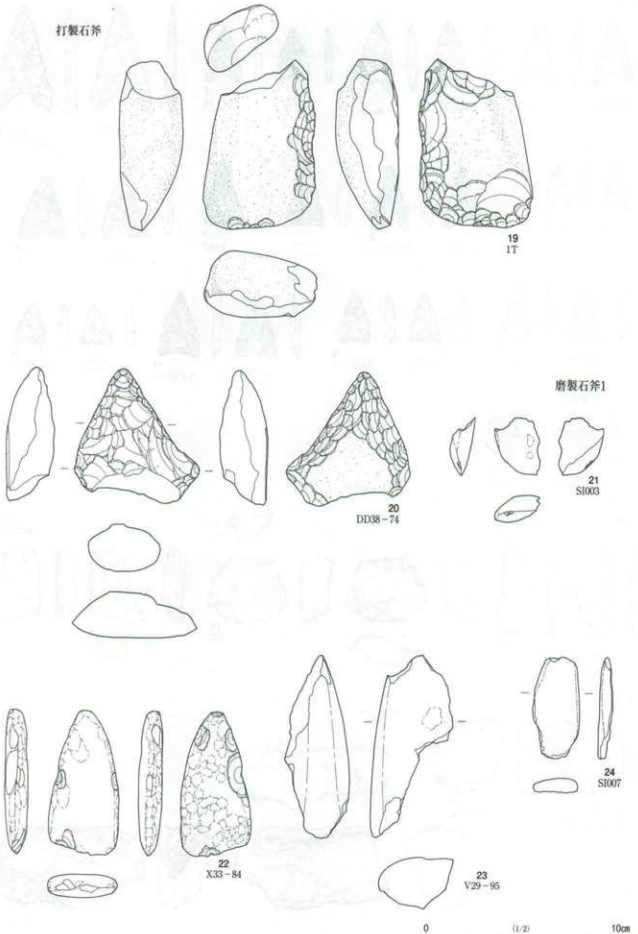
出土した8点のうち7点を図示した。遺構から出土したものは、21のSI003住居跡、24のSI007住居跡の2点である。すべて定角式の磨製石斧であり、表裏面と側面の境界には成形時の稜が明瞭に観察される。石材は24以外すべて緑泥片岩製であり、24については可視的な観察ではあるが翡翠製と考えられる。刃部の残存する個体については、円刃（21）、直刃（22・25）が混在するがすべて両刃である。各個体ともよく研磨されており、器表面は平滑で製作時の調整痕がほとんど見られない。唯一、22については、製作時の整形剥離痕が両側面、裏面に認められる。

⑥磨石（第55図28・29、図版37）

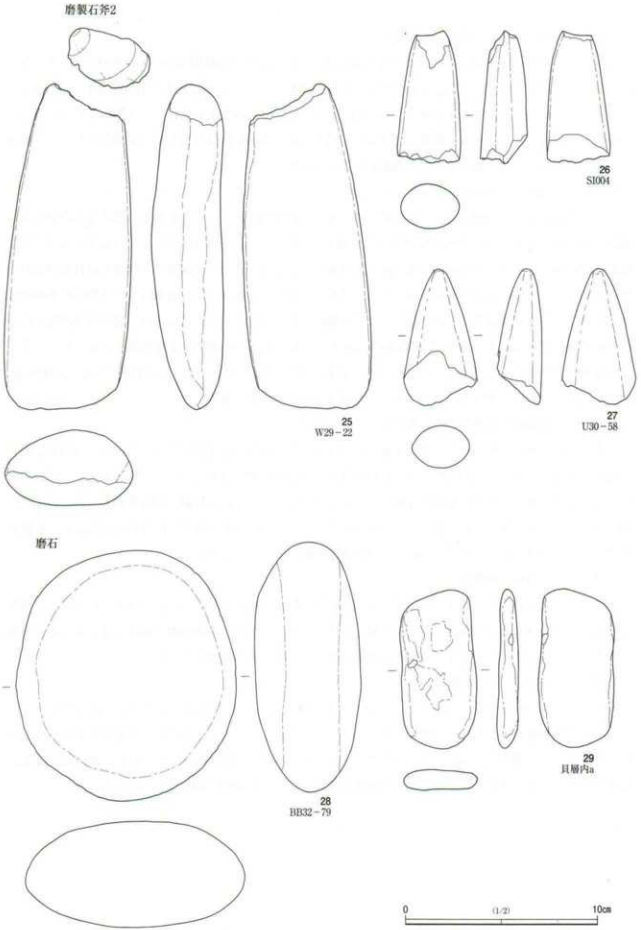
出土した3点のうち2点を図示した。形状の差はあるが、両者とも全体にわたり研磨されている。28は安山岩の円礫素材で、全面にわたり研磨されている。29は変成岩の扁平礫素材で、表裏面が特に研磨され


石鏃
1
SI005
2
U29－08
3
X31－95
4
Y32－96
5
Z31－30
6
AA33－49
7
SI017
8
1T
9
V29－45
10
BB32－71
11
AA32－71
12
CC39－09
13
BB33
RF
14
1T
15
1T
16
表採
石核
17
BB33－56
18
AA37－77
0
(2/3)
5cm

第53図　石器（1）


打製石斧
19
1T
磨製石斧1
21
SI003
20
DD38－74
24
SI007
22
X33－84
23
V29－95
0
(1/2)
10cm

第54図　石器（2）


磨製石斧2
25
W29－22
26
SI004
27
U30－58
磨石
28
BB32－79
29
貝層Pit a
0
(1/2)
10cm

第55図　石器（3）

ている。

⑦凹石（第56図30～第57図34、図版37）

出土した5点すべてを図示した。このうち遺構出土のものは30のSI004住居跡、31のSI006住居跡、32のSI005住居跡の3点である。片面のみに凹みを有する個体（32）、表裏面に凹みを有する個体（30・33）、表裏面および側面に凹みを有する個体（31・34）があり、いずれの凹みも敲打により作出されている。32は両側面に敲打による潰れ痕が明瞭に認められ、凹みおよび潰れ痕以外の器表面は原礫面である。この個体のみが砂岩製であり、他はすべて全面磨りにより形状を整えている。

⑧敲石（第57図35～第58図39、図版37）

出土した5点すべてを図示した。敲打痕のみられる部位は個体によって差がある。35は片面の中央部に微細な敲打痕が認められ、他の部位はすべて原礫面を留めている。SI011住居跡からの出土である。36は棒状礫を打割し、平滑な打割面の一端を用い敲打を行っている。また、尖端部にも微細な敲打痕が認められる。37・38は円礫の両側面を敲打部位として使用しており、敲き潰すような敲打のため原礫の形状が大きく変化している。38は端部に敲き潰したような敲打とは異なる剥落痕が認められ、複合的な敲打方法を窺わせる個体である。37はSI005住居跡からの出土である。39は全面研磨により形状が整えられ、一見すると磨製石斧の基部を想像させる形状である。敲打部位は端部であり、敲打面は平坦となる。SI008住居跡からの出土である。39は安山岩製であるが、他はすべて砂岩製である。

⑨石皿（第58図40～第59図45、図版38）

出土した6点すべて図示した。41の花崗岩以外はすべて多孔質の安山岩を使用している。原形を留めている個体はなく、すべて欠損品である。比較的遺存度の良好な40・41から、原形は楕円形もしくは円形を呈すると考えられる。また比較的遺存度の高い41を加えたこれら3点は片面に凹みを有し、特に40・42には凹みが複数確認できる。41の凹みは他の凹みと比較して整った円形であり、凹みの深度も深い。遺構から出土したものは、41のSI007住居跡、43のSI016住居跡の2点のみである。

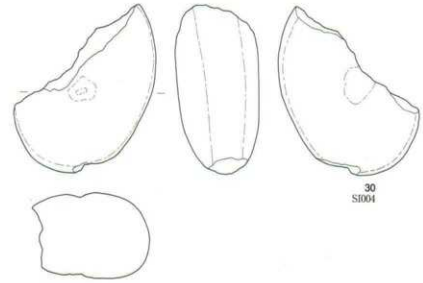
⑩砥石（第59図46、図版38）

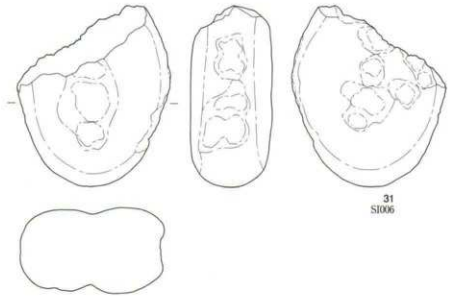
出土した3点のうち1点のみ図示した。SI011住居跡からの出土である。原面を留めている部位は表面と側縁の一部のみである。断面形状は長方形を呈すると考えられる。表面の磨り面は平滑であるが、全体に被熱しているため岩石を構成する砂粒の剥落が著しく、磨り痕は観察できない。

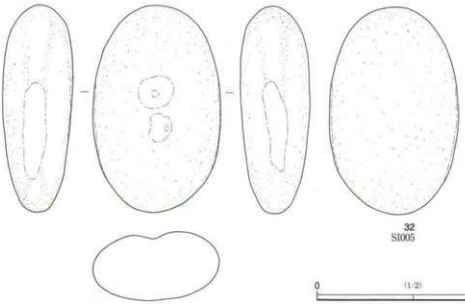
⑪軽石（第59図47・48、図版38）

出土した15点のうち2点を図示した。なお、2点以外ではSI003住居跡からは3点、軽石が出土している。両者とも面取りするように全体を整形されている。穿孔もしくは穿孔を意図した痕跡は認められない。47は平面形状、断面形状ともにいびつな台形を呈する。SI003住居跡からの出土である。48は表面に僅かな稜を有し、裏面はほぼ平坦となるように面取りされている。SI005住居跡からの出土である。

凹石1

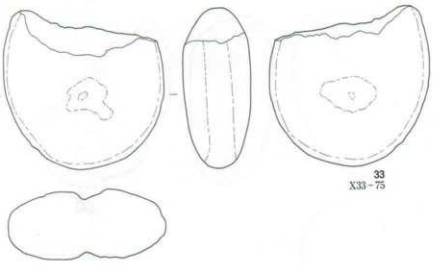




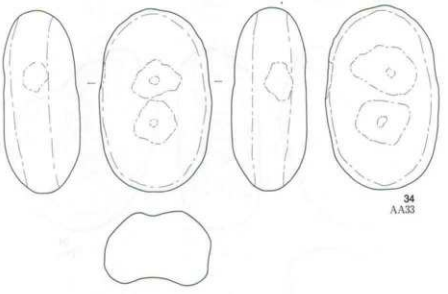


第56図　石器（4）

凹石2

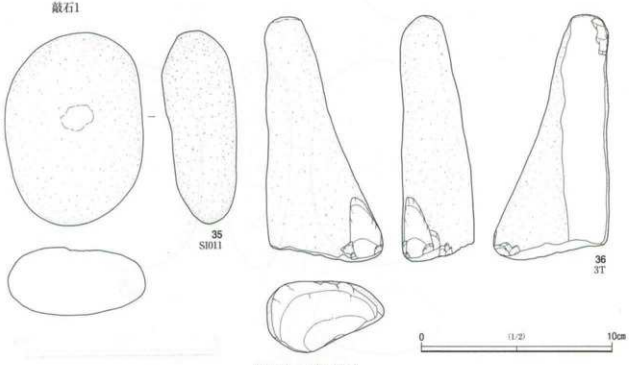


33
X33－75



34
AA33

敲石1



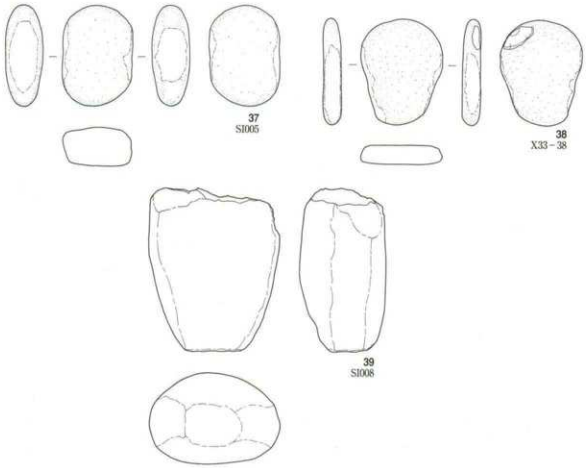
35
SI011

36
3T

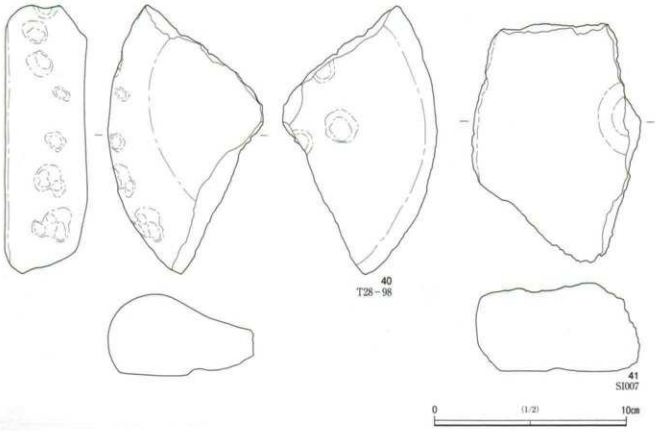
0 (1/2) 10cm

第57図　石器（5）

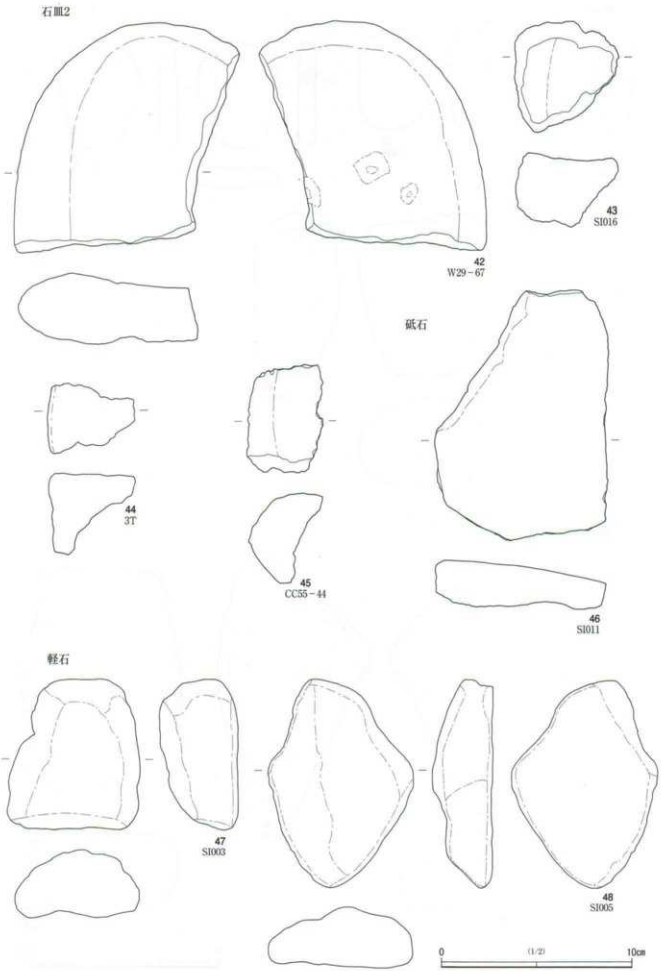
敲石2



石皿1



第58図　石器（6）


石皿2
43
SI016
42
W29－67
砥石
44
3T
45
CC55－44
46
SI011
軽石
47
SI003
48
SI005
0
(1/2)
10cm

第59図　石器（7）

（2）貝刃（第60図1、図版39）

1は殻長49.3㎜、殻高58.8㎜のハマグリ右貝を利用したものである。外面の刃部は腹縁右側1/2強に認められるが、左側は垂直に剥落している部分と欠損する部分となり、刃部の正確な範囲は不明である。内面の一部にも刃部作出のための剥離痕が認められるが交互剥離となり、この部分の刃部は鋸歯状となる。重量は17.02ｇで、SI008の遺構一括取り上げである。

（3）土製品（第61・62図、図版39）

①土器片錘（第61図1・2、図版39）

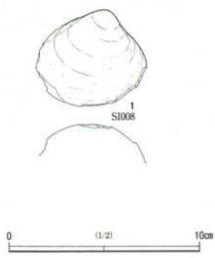
1は前期中葉黒浜式の土器片を再利用したもので、切れ目は一対で短軸上にある。最大長33㎜・最大幅42㎜・最大厚11㎜を測る。重量は17.2ｇで、SI005の遺構一括取り上げである。2は加曽利E式の土器片を再利用したもので、一部欠損するが切れ目は一対で短軸上にある。最大長41㎜・最大幅46㎜・最大厚14㎜を測る。重量は34.5ｇで、遺構外出土である。最大長33㎜・最大幅42㎜・最大厚11㎜を測る。重量は17.2ｇで、遺構外一括取り上げである。

②不明土製品（第61図3、図版39）

3は粘土塊を板状に伸ばしたもので、焼成は良好である。少量の繊維を含んでいるので、時期は黒浜式の可能性が高い。意図的なものではないが、沈線や刺突が部分的に認められる。最大長16㎜・最大幅34㎜・最大厚4㎜を測る。重量は1.97ｇで、SI018の遺構一括取り上げである。

③土製耳飾り（第62図1、図版39）

1はキノコ形の範疇に入る土製耳飾りで、縄文晩期大洞式系のものに類例が求められる。軸の部分はケズリ成形に伴う稜が、先端側を中心に残存している。先端側には円形の凹部を有す。最大長20㎜・最大幅13.5㎜を測る。重量は3.3ｇ。遺構外一括取り上げである。



第60図　貝刃

第61図　土器片錘・土製品

第62図　耳飾り

第3表　遺構一覧

No	遺構名	旧遺構名	遺構種別	平面形	規模 （最大長×最大幅：m）	深さ （m）	ピット数	炉（有無、規模・深さ：m）			貯蔵穴		大別時期	型式	位置	挿図No.
1	SI001	（9）SI001	住居跡	楕円形？	6.08×（4.78）	0.23	11	有	1.28×0.48	—			前期	黒浜	V27－15・16・25・26	第10図
2	SI002	（3）SI003	住居跡	方形？	（4.32）×（4.88）	0.32	（1）	不明	—	—			前期	黒浜	T28－96・97	第12図
3	SI003	（3）SI001	住居跡	不整楕円形	4.76×3.76	0.12	4	有	0.90×0.86	0.08			前期	黒浜	T28－97・98 T29－07・08	第13図
4	SI004	（3）SI002	住居跡	隅丸方形	（4.95）×4.10	0.14	2	有	0.52×0.39	0.07			前期	黒浜	T29－08・09・18・19	第16図
5	SI005	（4）SI002	住居跡	略楕円形	5.32×4.40	0.40	3	有	0.39×0.36	0.10			前期	黒浜	V28－84・85・94・95	第17図
6	SI006	（4）SI001	住居跡	隅丸方形	3.42×4.41	0.11	8	有	0.46×0.37	0.12	有		前期	黒浜	V29－02・03・04・13	第19図
7	SI007	（4）SI004	住居跡	略楕円形	7.58×5.74	0.10	4	有	A 0.34×0.30 B 0.35×0.30	0.06 0.10			前期	黒浜	V29－10・11・12・21・22	第20図
8	SI008	（4）SI003	住居跡	隅丸方形	3.94×4.58	0.42	13	有	A 0.70×0.58 B 0.33×0.30	0.09 0.05	有		前期	黒浜	V29－20・30・31	第22図
9	SI009	（4）SI005	住居跡	略円形	5.46×5.24	0.14	2	有	（0.40）×（0.28）	0.06			前期	黒浜	V29－32・33・42・43・53	第25図
10	SI010	（20）SI001	住居跡	方形？	（3.72）×5.40	0.46	（7）	有	0.63×0.52	—			前期	黒浜	V30－36・37・46・47	第26図
11	SI011	（12）C SI003	住居跡	略楕円形？	7.16×5.08	0.34	13	有	A 1.20×0.54 B 0.68×0.62	— —	有		前期	黒浜	V30－27・28・37・38・47・48	第27図
12	SI012	（5）SI001	住居跡	不整円形	5.68×4.92	0.12	14	有	1.16×0.54	0.07			前期	黒浜	W33－55・56・57・66・67	第31図
13	SI013	（5）SI002	住居跡	不整楕円形	4.68×3.66	0.22	8	有	0.60×0.52	0.04			前期	黒浜	W33－57・58・67・68	第32図
14	SI014	（5）SI003	住居跡	略楕円形？	4.34×3.72	0.46	11	有	A 0.50×0.34 B 0.98×0.73 C 0.82×0.56	— — —	有		前期	黒浜	X23－85・95	第33図
15	SI015	（15）SI004	住居跡	隅丸方形	9.84×5.72	0.44	13	有	1.30×0.70	—			前期	黒浜	AA33－56・65・66・67・75・76・77	第36図
16	SI016	（15）SI002	住居跡	隅丸方形	6.44×4.98	0.25	9	有	0.76×0.57	0.06			前期	黒浜	Z34－57・58・67・68・69・78	第38図
17	SI017	（15）SI003	住居跡	不整隅丸方形？	6.48×4.74	0.30	11	有	0.44×0.42	—	有		前期	黒浜	Z34－79・89 AA34－70・80	第40図
18	SI018	（23）SI002	住居跡	隅丸方形	3.42×3.28	0.40	1	有	0.48×0.40	0.07			前期	黒浜	EE38－23・24	第42図
19	SI019	（23）SI001	住居跡	不整隅丸方形	5.50×4.96	0.28	12	有	A 0.92×0.57 B 0.92×0.72 C 0.76×0.62	0.12 0.14 0.06			前期	黒浜	EE38－62・63・72・73	第43図
20	SI020	（12）C SI004	住居跡	方形	（3.22）×4.02	0.32	8	有	0.48×0.40	0.14			古墳中期	—	Y30－46・55・56	第64図
21	SI021	（12）C SI002	住居跡	方形	5.32×（5.06）	0.56	9	有	0.68×0.33	0.02			古墳中期	—	Y30－68・69・78・79・88・89	第65図

No	遺構名	旧遺構名	遺構種別	平面形	規模 （最大長×最大幅：m）	深さ （m）	貯蔵穴	大別時期	型式	位置	挿図No.
1	SK001	（4）SK001	土坑	楕円形	1.38×1.14	0.17		前期	—	U30－45・46・55・56	第46図
2	SK002	（15）SX002	土坑	略円形	0.80×0.69	0.06		前期	黒浜	AA34－09	第46図
3	SK003	（15）SX001	土坑	略円形	1.00×0.92	0.07		前期	黒浜	BB34－10	第46図
4	SK004	（15）SI001	土坑	略円形	3.60×3.44	0.30		前期	黒浜	Z35－77・78・87・88	第47図
5	SK005	（1）SI001	土坑	不整方形	2.94×2.12	0.21	有	前期	黒浜	CC37－24・25・35	第47図
6	SK006	（21）SK001	陥穴	長楕円形	2.86×1.04	0.74		草創期～早期	—	T26－88・98	第48図
7	SK007	（21）SK002	陥穴	長楕円形	3.20×1.34	0.84		草創期～早期	—	T26－89・99	第48図
8	SK008	（4）SK002	陥穴	長楕円形	3.23×0.72	1.34		草創期～早期	—	U30－05・15	第48図

第４表　縄文土器観察表

管理番号	遺物No	遺構・グリッド名	分類	形式名	部位	主な文様（縄文は原体を表記）
1	第10層　－1	SI001	第２群２類	黒浜	口縁部	網目状沈線文　結節沈線（半截竹管内側）による大形菱形文、０段多条単節RL/LR
2	－2	〃	〃	黒浜	胴部	結節沈線文
3	－3	〃	〃	黒浜	口縁部	結節沈線文＋隆起線
4	－4	〃	〃	黒浜	口縁部	斜格子目文
5	－5	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
6	－6	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
7	－7	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/R
8	－8	〃	〃	黒浜	口縁部	単節LR
9	－9	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
10	第11層　－10	〃	〃	黒浜	底部	環付末端単節RL/LR
11	－11	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸R＋R２本）
12	－12	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸R＋R２本）
13	－13	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L２本）
14	－14	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L３本）
15	－15	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸R＋R２本）/（軸L＋L２本）
16	－16	〃	〃	黒浜	底部	附加条②（軸R＋R２本）/（軸L＋L２本）
17	－17	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L２本）
18	－18	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L２本）　隆起線文
19	－19	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R＋R２本）
20	－20	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
21	－21	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋R２本）
22	第12層　－1	SI002	〃	黒浜	胴部	斜格子目文
23	－2	〃	〃	黒浜	胴部	列点状刺突文
24	－3	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
25	－4	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
26	－5	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
27	－6	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
28	－7	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
29	－8	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/R
30	－9	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R２本）
31	－10	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R２本）
32	－11	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R４本）
33	－12	〃	〃	黒浜	口縁部	爪形文L・R
34	第13層　－1	SI003	〃	黒浜	口縁部	沈線文
35	－2	〃	〃	黒浜	口縁部	平行沈線文
36	－3	〃	〃	黒浜	胴部	平行沈線文、０段多条LR
37	－4	〃	〃	黒浜	胴部	無節R、結節沈線文
38	－5	〃	〃	黒浜	口縁部	斜格子目文、無節R（燃痕の結節あり）
39	－6	〃	〃	黒浜	底部	無節R、斜格子目文（ヘラ描き沈線）
40	－7	〃	〃	黒浜	胴部	無節R、平行沈線文
41	－8	〃	〃	黒浜	胴部	沈線文
42	－9	〃	〃	黒浜	底部	沈線文
43	－10	〃	〃	黒浜	口縁部	結節沈線文
44	－11	〃	〃	黒浜	胴部	沈線文
45	第14層　－12	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
46	－13	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
47	－14	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
48	－15	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
49	－16	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
50	－17	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
51	－18	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/R
52	－19	〃	〃	黒浜	底部	無節L
53	－20	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
54	－21	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
55	－22	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
56	－23	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
57	－24	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
58	－25	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
59	－26	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
60	－27	〃	〃	黒浜	底部	無節R
61	－28	〃	〃	黒浜	底部	単節RL
62	－29	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L/R
63	－30	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
64	－31	〃	〃	黒浜	底部・脚部	単節RL

管理番号	遺物No.	遺構・グリッド名	分類	型式名	部位	主な文様（縄文は原体を表記）
65	第14図 −32	SI003	第2群2類	黒浜	口縁部	単節LR
66	−33	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
67	−34	〃	〃	黒浜	口縁部	環付末端単節LR
68	−35	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端単節LR
69	第15図 −36	〃	〃	黒浜	胴部	単節LL/LR
70	−37	〃	〃	黒浜	口縁部	前々段合撚
71	−38	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸L＋L2）
72	−39	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸不明＋R2本）
73	−40	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋ℓ1本）
74	−41	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R1本）
75	−42	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R，附加条（軸不明＋R2本）
76	−43	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R2本）
77	−44	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R2本）
78	−45	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R2本）
79	−46	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R2本）
80	−47	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R3本）
81	−48	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋R2本）
82	−49	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋R2本）
83	−50	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L4本）
84	−51	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R2本）
85	−52	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋L2本）
86	−53	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L1本）
87	−54	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L1本）
88	−55	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L1本）
89	−56	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L1本・R1本）
90	−57	〃	〃	黒浜	口縁部	撚糸文L
91	−58	〃	〃	黒浜	口縁部	撚糸文L
92	−59	〃	〃	黒浜	胴部	撚糸文R
93	−60	〃	〃	黒浜	底部	無文　底面に撚糸文L
94	−61	〃	〃	黒浜	口縁部	無文
95	−62	〃	〃	黒浜	胴部	無文
96	第16図 −1	SI004	〃	黒浜	胴部	沈線文
97	−2	〃	〃	黒浜	口縁部	斜格子目文
98	−3	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
99	−4	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
100	−5	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R，平行沈線文
101	−6	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
102	−7	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端単節LR
103	−8	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
104	−9	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端単節LR
105	−10	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸R＋R2本）
106	−11	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L1本）
107	−12	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋L2本）
108	−13	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R1本）
109	−14	〃	〃	黒浜	胴部	貝殻腹圧痕文
110	−15	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋R1本）
111	第17図 −1	SI005	〃	黒浜	口縁部	無節R　結節沈線文
112	−2	〃	〃	黒浜	胴部	隆帯＋結節沈線文
113	−3	〃	〃	黒浜	口縁部	縦位沈線文、無節L
114	−4	〃	〃	黒浜	口縁部	縦位沈線文、斜格子目文
115	−5	〃	〃	黒浜	口縁部	縦位沈線文
116	−6	〃	〃	黒浜	口縁部	縦位沈線文
117	−7	〃	〃	黒浜	底部	縦位沈線文
118	−8	〃	〃	黒浜	口縁部	斜格子目文
119	−9	〃	〃	黒浜	胴部	斜格子目文＋列点文
120	−10	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
121	−11	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
122	第18図 −12	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
123	−13	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
124	−14	〃	〃	黒浜	口縁部	無文帯＋無節L
125	−15	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
126	−16	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
127	−17	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
128	−18	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
129	−19	〃	〃	黒浜	底部	無節R
130	−20	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/R

管理番号	遺物No.	遺構・グリッド名	分類	型式名	部位	主な文様（縄文は原体を表記）
131	第18図 −21	SI005	第2群2類	黒浜	底部	無節L/R
132	−22	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/単節RL
133	−23	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L/R
134	−24	〃	〃	黒浜	口縁部	環付末端0段多条単節LR
135	−25	〃	〃	黒浜	胴部	0段多条単節LR
136	−26	〃	〃	黒浜	口縁部	環付末端単節RL
137	−27	〃	〃	黒浜	底部	附加条②（軸R＋L2本以上）
138	−28	〃	〃	黒浜	底部	附加条②（軸L＋L4本）/附加条（軸不明＋R4本）
139	−29	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R2本）
140	−30	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L1本）
141	−31	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L2本）
142	−32	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋L2本）
143	第19図 −1	SI006	〃	黒浜	口縁部	結節沈線文（立ち消え）
144	−2	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
145	−3	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
146	−4	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
147	−5	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
148	−6	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
149	−7	〃	〃	黒浜	胴部	0段多条単節RL
150	−8	〃	〃	黒浜	口縁部	単節LR
151	−9	〃	〃	黒浜	口縁部	環付末端0段多条RL/0段多条LR
152	−10	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR
153	−11	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸R＋R2本）、（軸L＋L2本）
154	−12	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸R＋R2本）、（軸L＋L2本）
155	−13	〃	〃	黒浜	底部	附加条①（軸L＋L2本）
156	−14	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L2本）、（軸R＋R2本）
157	−15	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋R2本）
158	−16	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L2本）、（軸R＋R2本）
159	第20図 −1	SI007	〃	黒浜	口縁部	櫛歯状沈線文、無節L/R
160	−2	〃	〃	黒浜	口縁部	櫛歯状沈線文、無節L
161	−3	〃	〃	黒浜	胴部	集合波状沈線文
162	−4	〃	〃	黒浜	口縁部	沈線文
163	−5	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
164	−6	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
165	−7	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
166	−8	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
167	−9	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
168	−10	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/R
169	−11	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R2本）
170	−12	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）
171	−13	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R1本）
172	−14	〃	〃	黒浜（大木2系）	口縁部	集合波状沈線文、綱目状撚糸文R？（原軸絡条体第5類）
173	第22図 −1	SI008	〃	黒浜	口縁部	平行沈線文
174	−2	〃	〃	黒浜	胴部	平行沈線文
175	−3	〃	〃	黒浜	口縁部	平行沈線文
176	−4	〃	〃	黒浜	口縁部	結節沈線による大形菱形文、附加条（軸不明＋L2本）/（軸不明＋R2本）
177	−5	〃	〃	黒浜	口縁部	結節沈線文
178	−6	〃	〃	黒浜	口縁部	結節沈線文
179	−7	〃	〃	黒浜	底部	無節R＋斜沈線文
180	−8	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
181	−9	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
182	−10	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
183	−11	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
184	−12	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
185	−13	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
186	第23図 −14	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
187	−15	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
188	−16	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
189	−17	〃	〃	黒浜	胴部	無文、無節R
190	−18	〃	〃	黒浜	底部	無節L/R
191	−19	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
192	−20	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
193	−21	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
194	−22	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
195	−23	〃	〃	黒浜	底部	単節RL
196	−24	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR

管理番号	遺物No.	遺構・グリッド名	分類	型式名	部位	主な文様（縄文は原体を表記）
197	第23図 −25	SI008	第2群2類	黒浜	胴部	単節LR
198	−26	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
199	−27	〃	〃	黒浜	底部	環付末端単節LR
200	−28	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL/LR
201	−29	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L２本）/（軸R＋R２本）
202	−30	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L２本）/（軸R＋R２本）
203	第24図 −31	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸R＋R２本）/附加条②（軸R＋R２本）
204	−32	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L２本）/（軸R＋R２本）
205	−33	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L１本とR１本の組）/（軸R＋L１本とR１本の組）
206	−34	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸R＋R２本）
207	−35	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸R＋R２本）
208	−36	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L２本）
209	−37	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L２本）
210	−38	〃	〃	黒浜	口縁部	無文、附加条②（軸R＋R２本）
211	−39	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R＋R２本）
212	−40	〃	〃	黒浜	底部	附加条②（軸R＋R２本）
213	−41	〃	〃	黒浜	底部	附加条②（軸R＋R２本）、（軸不明＋L２本）
214	−42	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L２本）/（軸不明＋R２本）
215	−43	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R２本）
216	−44	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R２本）
217	−45	〃	〃	黒浜	口縁部	貝殻条痕文
218	第25図 −1	SI009	〃	黒浜	胴部	沈線文、附加条（軸不明＋R２本）
219	−2	〃	〃	黒浜	口縁部	平行沈線文
220	−3	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
221	−4	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
222	−5	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
223	−6	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/R
224	−7	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
225	−8	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L２本）
226	−9	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L１本とR１本の組）
227	第26図 −1	SI010	〃	黒浜	口縁部	平行沈線文
228	−2	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
229	−3	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
230	−4	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
231	−5	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
232	−6	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
233	−7	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端単節LR
234	−8	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L２本）
235	−9	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R＋R１本）
236	第28図 −1	SI011	〃	黒浜	口縁部	刷毛目状沈線＋横位沈線、斜面＋山形沈線（半截竹管内側）、環付末端単節RL/LR
237	−2	〃	〃	黒浜	口縁部	平行沈線文
238	−3	〃	〃	黒浜	口縁部	波状沈線文
239	−4	〃	〃	黒浜	口縁部	結節沈線文
240	−5	〃	〃	黒浜	胴部	結節沈線文
241	−6	〃	〃	黒浜	口縁部	結節沈線文、０段多条単節LR
242	−7	〃	〃	黒浜	胴部	結節沈線文、隆起線、附加条①（軸R＋R２本）
243	−8	〃	〃	黒浜	胴部	結節沈線文、単節RL/LR
244	−9	〃	〃	黒浜	胴部	沈線文
245	−10	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
246	−11	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
247	−12	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
248	−13	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
249	−14	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
250	−15	〃	〃	黒浜	口縁部	０段多条単節RL
251	−16	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
252	−17	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
253	−18	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR
254	−19	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
255	−20	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
256	−21	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
257	−22	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端単節RL
258	−23	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端単節RL
259	第29図 −24	〃	〃	黒浜	口縁部	単節LR
260	−25	〃	〃	黒浜	口縁部	単節LR
261	−26	〃	〃	黒浜	口縁部	単節LR
262	−27	〃	〃	黒浜	口縁部	単節LR

管理番号	遺物No	遺構・グリッド名	分類	型式名	部位	主な文様（縄文は原体を表記）
263	第29図 －28	SI011	第２群２類	黒浜	口縁部	単節LR
264	－29	〃	〃	黒浜	口縁部	環付末端LR
265	－30	〃	〃	黒浜	胴部	０段多条単節LR
266	－31	〃	〃	黒浜	底部	単節LR
267	－32	〃	〃	黒浜	底部	０段多条単節LR
268	－33	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL/０段多条単節LR
269	－34	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL/LR
270	－35	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR/無節R
271	－36	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR
272	－37	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR
273	－38	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR
274	－39	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端０段多条単節RL/LR
275	－40	〃	〃	黒浜	口縁部	無節の結節回転
276	－41	〃	〃	黒浜	胴部	複節LRL
277	－42	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L２本）/（軸R＋R２本）
278	－43	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋r１本）
279	－44	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸L＋L２本）/（軸R＋R２本）
280	－45	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸L＋L２本）/附加条（軸不明＋R２本）
281	－46	〃	〃	黒浜	胴部	０段多条RL/附加条①（軸L＋L２本）
282	第30図 －47	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸L＋L２本）/（軸R＋R２本）
283	－48	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L２本）/（軸R＋R２本）
284	－49	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋R２本）
285	－50	〃	〃	黒浜	胴部	０段多条LR/附加条②（軸L＋r２本）
286	－51	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R＋R２本）/単節RL
287	－52	〃	〃	黒浜	底部	附加条②（軸R＋R１本）/（軸L＋L１本）
288	－53	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端単節RL/附加条（軸不明＋R２本）
289	－54	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸R＋R２本）
290	－55	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R３本）
291	－56	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R３本）
292	－57	〃	〃	黒浜	胴部	燃糸文R
293	－58	〃	〃	黒浜	口縁部	連南状隆起線，瘤状貼付文
294	－59	〃	〃	黒浜	口縁部	貝殻背圧痕文
295	第31図 －1	SI012	〃	黒浜	胴部	隆起線，押引文，附加条Ⅲ（軸R＋R２本）
296	－2	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
297	－3	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
298	－4	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
299	－5	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端単節RL
300	－6	〃	〃	黒浜	口縁部	単節LR
301	－7	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR（ミミズ腫れ状の粘土帯）
302	－8	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条Ⅲ（軸L＋L４本）/（軸R＋R４本）
303	－9	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸R＋R２本）
304	－10	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸R＋R２本）
305	－11	〃	〃	黒浜	胴部	附加条Ⅲ（軸L＋L４本）/（軸R＋R４本）
306	－12	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条Ⅲ（軸LR＋R２本）
307	－13	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R２本）
308	－14	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋L１本）
309	－15	〃	〃	黒浜	口縁部	貝殻腹縁刺突文
310	－16	〃	〃	黒浜	口縁部	無文
311	第32図 －1	SI013	〃	黒浜	口縁部	単節LR
312	－2	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
313	－3	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R２本）
314	－4	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋L１本とR１本の組）
315	第33図 －1	SI014	〃	黒浜	口縁部	平行沈線文＋刺突文
316	－2	〃	〃	黒浜	胴部	平行沈線文＋刺突文
317	－3	〃	〃	黒浜	胴部	平行沈線文，附加条（軸不明＋L２本）/（軸不明＋R２本）
318	－4	〃	〃	黒浜	胴部	平行沈線文
319	－5	〃	〃	黒浜	口縁部	斜格子目文
320	－6	〃	〃	黒浜	胴部	斜格子目文
321	－7	〃	〃	黒浜	底部	斜格子目文
322	－8	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
323	－9	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
324	－10	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L/R
325	－11	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/R
326	－12	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
327	－13	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
328	－14	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL

管理番号	遺物No.	遺構・グリッド名	分類	型式名	部位	主な文様（縄文は原体を表記）
329	第33図 −15	SI014	第2群2類	黒浜	口縁部	爪赤文R
330	−16	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸R＋R2本）
331	−17	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L2本）/附加条②（軸R＋r）
332	−18	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸R＋L2本）/附加条②（軸R＋R2本）
333	−19	〃	〃	黒浜	底部	附加条①（軸L＋L3本/軸R＋R2本）
334	−20	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L2本）
335	−21	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L4本/軸R＋L4本）
336	第34図 −22	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋R2本/軸R＋L2本）
337	−23	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸R＋R2本）/附加条（軸不明＋L2本）
338	−24	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R＋r2本）
339	−25	〃	〃	黒浜	底部	附加条②（軸R＋R2本/軸L＋L2本）
340	−26	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R1本）
341	−27	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本/軸不明＋R2本）
342	−28	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L1本）
343	−29	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R2本）
344	−30	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R2本）
345	−31	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L3本）/（軸不明＋R2本）
346	−32	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L3本）/（軸不明＋R3本）
347	−33	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L3本）
348	−34	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋L3本）/（軸不明＋R3本）
349	−35	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L3本）/（軸不明＋R3本）
350	−36	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R2本）
351	−37	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L1本）
352	−38	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R2本）
353	−39	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L3本）/（軸不明＋R3本）
354	−40	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）/（軸不明＋R2本）
355	−41	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）
356	第35図 −42	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L2本）
357	−43	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L3本）/（軸不明＋R3本）
358	−44	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L3本）/（軸不明＋R3本）
359	−45	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R1本）
360	−46	〃	〃	黒浜	底部	附加条②（軸L＋L3本）/（軸R＋R3本）
361	−47	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋L3本）/（軸不明＋R3本）
362	−48	〃	〃	黒浜	口縁部	無文
363	−49	〃	〃	黒浜	底部	無文
364	−50	〃	〃	黒浜	底部	無文
365	第36図 −1	SI015	〃	黒浜	口縁部	押引文（先潰れ半截竹管）
366	−2	〃	〃	黒浜	口縁部	列点状刺突文
367	−3	〃	〃	黒浜	胴部	結節沈線文（C字爪形）、無節L
368	−4	〃	〃	黒浜	胴部	結節沈線文（C字爪形）
369	−5	〃	〃	黒浜	胴部	結節沈線文（C字爪形）
370	−6	〃	〃	黒浜	胴部	沈線文
371	−7	〃	〃	黒浜	胴部	円形竹管刺突文　単節LR
372	−8	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
373	−9	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
374	−10	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
375	−11	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
376	−12	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
377	−13	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
378	−14	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
379	−15	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
380	−16	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
381	−17	〃	〃	黒浜	口縁部	0段多条単節RL
382	−18	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
383	−19	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
384	−20	〃	〃	黒浜	底部	単節RL
385	第37図 −21	〃	〃	黒浜	口縁部	単節LR
386	−22	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
387	−23	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
388	−24	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
389	−25	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
390	−26	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR（ミミズ腫れ状粘土帯）
391	−27	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/附加条（軸不明＋L）
392	−28	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR
393	−29	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端RL-LR
394	−30	〃	〃	黒浜	口縁部	複節LRL

管理番号	遺物No	遺構・グリッド名	分類	型式名	部位	主な文様（縄文は原体を表記）
395	第37図 −31	SI015	第2群2類	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L1本）/（軸R＋R2本）
396	−32	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
397	−33	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
398	−34	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
399	−35	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
400	−36	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L3本）
401	−37	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
402	−38	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸R＋R2本）
403	−39	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L3本）
404	−40	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
405	−41	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
406	−42	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
407	−43	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R＋L1本）
408	−44	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L2本）
409	−45	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
410	−46	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L1本）
411	−47	〃	〃	黒浜	底部	附加条②（軸L＋L1本）
412	−48	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）/（軸不明＋L2本）
413	−49	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）/（軸不明＋R2本）
414	−50	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）
415	第38図 −1	SI016	〃	黒浜	胴部	結節沈線文（C字爪形）、平行沈線文、楕状貼付文
416	−2	〃	〃	黒浜	口縁部	結節沈線文
417	−3	〃	〃	黒浜	口縁部	結節沈線文、無節R
418	−4	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
419	−5	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
420	−6	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
421	−7	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
422	−8	〃	〃	黒浜	口縁部	無文帯　無節L　単節LR（末端に結節）
423	−9	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
424	−10	〃	〃	黒浜	底部	無節R
425	−11	〃	〃	黒浜	底部	無節L/R
426	−12	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
427	−13	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
428	第39図 −14	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
429	−15	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL/LR
430	−16	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
431	−17	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
432	−18	〃	〃	黒浜	底部	単節RL
433	−19	〃	〃	黒浜	胴部	0段多条単節RL
434	−20	〃	〃	黒浜	口縁部	0段多条単節LR
435	−21	〃	〃	黒浜	口縁部	単節LR
436	−22	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
437	−23	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
438	−24	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
439	−25	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR
440	−26	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR
441	−27	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR
442	−28	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR
443	−29	〃	〃	黒浜	口縁部	複節RLR
444	−30	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
445	−31	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸R＋R2本）
446	−32	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸L＋L1本）/（軸R＋R2本）
447	−33	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸L＋L2本）
448	−34	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸L＋R2本）/（軸R＋R2本）
449	−35	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
450	−36	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
451	−37	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
452	−38	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
453	−39	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
454	−40	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
455	−41	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
456	−42	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸RL＋L2本）
457	−43	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
458	−44	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R＋R2本）
459	−45	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L？＋L2本）/（軸R＋R2本）
460	−46	〃	〃	黒浜	底部	附加条②（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）

管理番号	遺物No.	遺構・グリッド名	分類	型式名	部位	主な文様（縄文は原体を表記）
461	第39図 −47	SI016	第2群2類	黒浜	底部	附加条②（軸L+L2本）
462	−48	〃	〃	黒浜	底部	附加条②（軸L+L2本）/（軸R+R2本）
463	−49	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L+L2本）/（軸R+R2本）
464	−50	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L+L2本）/（軸R+R2本） 重ねて斜格子目文効果
465	−51	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L+L2本）
466	−52	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明+L2本）
467	−53	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
468	−54	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
469	−55	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
470	第40図 −1	SI017	〃	黒浜	口縁部	斜格子目文
471	−2	〃	〃	黒浜	胴部	平行沈線文、附加条②（軸R+L2本）/附加条（軸不明+L2本）
472	−3	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L（乙字結節）
473	−4	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
474	−5	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
475	−6	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
476	−7	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
477	−8	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
478	−9	〃	〃	黒浜	底部	無節R
479	−10	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
480	−11	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
481	−12	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端単節RL
482	−13	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
483	−14	〃	〃	黒浜	胴部	単節LR
484	−15	〃	〃	黒浜	底部	単節RL/LR
485	−16	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸R+R1本）
486	−17	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸R+L2本）
487	第41図 −18	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L+L2本）/（軸R+R2本）
488	−19	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸L+L2本）/（軸不明+R2本）
489	−20	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸L+L2本）
490	−21	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L+R2本）
491	−22	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R+r1本）
492	−23	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸L+L2本）/（軸R+R2本）
493	−24	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明+R2本）/（軸不明+L2本）
494	−25	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明+R3本）
495	−26	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明+L2本）
496	−27	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明+R2本）
497	−28	〃	〃	黒浜	胴部	爪串文L
498	−29	〃	〃	黒浜	口縁部	無文
499	第42図 −1	SI018	〃	黒浜	胴部	連続刺突文
500	−2	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
501	−3	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
502	−4	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L+R2本）
503	−5	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R+R2本）
504	−6	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明+R2本）
505	−7	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明+L3本）
506	第43図 −1	SI019	〃	黒浜	口縁部	結節沈線文
507	−2	〃	〃	黒浜	胴部	押引文、附加条②（軸L+L2本）
508	−3	〃	〃	黒浜	胴部	鋸歯状沈線文
509	−4	〃	〃	黒浜	口縁部	斜格子目文、沈線文
510	−5	〃	〃	黒浜	胴部	平行沈線文、無節L
511	−6	〃	〃	黒浜	胴部	斜格子目文
512	−7	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
513	−8	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
514	−9	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L+r2本）
515	−10	〃	〃	黒浜	胴部	無節L
516	−11	〃	〃	黒浜	底部	無節L
517	−12	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
518	−13	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
519	−14	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端無節R
520	−15	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端無節R
521	−16	〃	〃	黒浜	胴部	無節R
522	第44図 −17	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L/R
523	−18	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/R
524	−19	〃	〃	黒浜	口縁部	単節RL
525	−20	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL
526	−21	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL

管理番号	遺物No.	遺構・グリッド名	分類	型式名	部位	主な文様（縄文は原体を表記）
527	第44図 －22	SI019	第2群2類	黒浜	口縁部	単節LR
528	－23	〃	〃	黒浜	胴部	単節RL/LR
529	－24	〃	〃	黒浜	胴部	附加条①（軸R＋R1本）
530	－25	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋R2本）/（軸R＋L2本）
531	－26	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸R＋L4本）
532	－27	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋R2本）/（軸R＋L2本）
533	－28	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R＋L1本）
534	－29	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R＋L2本）
535	－30	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸R＋L2本）
536	－31	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条③（軸不明＋R）
537	－32	〃	〃	黒浜	胴部	附加条③（軸不明＋R）
538	－33	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）/（軸不明＋R2本）
539	－34	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R3本）
540	－35	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R2本）
541	－36	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L4本）
542	－37	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L1本）/（軸不明＋R1本）
543	－38	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L1本）
544	－39	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）
545	－40	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）
546	－41	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L2本）、無節R
547	－42	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L2本）/（軸不明＋R2本）
548	－43	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L2本）/（軸不明＋R2本）
549	－44	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L4本）
550	第45図 －45	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L2本）
551	－46	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L2本）
552	－47	〃	〃	黒浜	底部	附加条（軸不明＋L1本）/（軸不明＋R1本）
553	－48	〃	〃	黒浜	口縁部	燃糸文R
554	－49	〃	〃	黒浜	口縁部	燃糸文R
555	－50	〃	〃	黒浜	胴部	燃糸文L
556	－51	〃	〃	黒浜	口縁部	貝殻背圧痕文
557	第46図 －1	SK002	〃	黒浜	口縁部	無節R、一部単節LR、円形刺突文
558	第46図 －1	SK003	〃	黒浜	口縁部	硝毛目状沈線、環付末端0段多条単節RL/LR
559	－2	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端0段多条単節RL/LR
560	－3	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条②（軸LR＋R2本）/（軸RL＋L2本）
561	第47図 －1	SK004	〃	黒浜	胴部	無節L＋沈線文
562	－2	〃	〃	黒浜	胴部	斜格子目文
563	－3	〃	〃	黒浜	胴部	沈線文（ヘラ＋半截竹管内側）
564	－4	〃	〃	黒浜	口縁部	無節L
565	－5	〃	〃	黒浜	口縁部	無節R
566	－6	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/R
567	－7	〃	〃	黒浜	口縁部	環付末端無節L/R
568	－8	〃	〃	黒浜	胴部	環付末端無節L/R
569	－9	〃	〃	黒浜	胴部	0段多条単節LR
570	－10	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条①（軸R＋R2本）
571	－11	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L4本）/（軸R＋R1本）
572	－12	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）
573	－13	〃	〃	黒浜	胴部	附加条②（軸L＋L3本）/（軸不明＋R2本）
574	－14	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）/（軸不明＋R2本）
575	－15	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L2本）
576	－16	〃	〃	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋L2本）/（軸不明＋R2本）
577	－17	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L1本）
578	－18	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L2本）
579	－19	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L1本とR1本の組）
580	－20	〃	〃	黒浜	底部	無文
581	第47図 －1	SK005	〃	黒浜	口縁部	無節L
582	－2	〃	〃	黒浜	胴部	無節L/R
583	－3	〃	〃	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L2本）
584	第47図 －1	SK008	〃	黒浜	胴部	無文
585	第49図 －1	Y30－37	第1群1類	井草	口縁部	表裏縄文：単節RL
586	－2	Y30－37	〃	井草	口縁部	単節RL
587	－3	Z31－11	〃	稲荷台	胴部	燃糸文L
588	第50図 －4	W29－41	第2群1類	花積下層	胴部	表：単節RL 裏：貝殻条痕、縄文条痕土器
589	－5	T29－08	第2群2類	黒浜	口縁部	平行沈線
590	－6	X30－36	〃	黒浜（古） （関山Ⅱ群末）	胴部	複節LRL＋平行沈線文（半截竹管内側）
591	－7	V28－85	〃	黒浜	口縁部	集合沈線文（半截竹管）

管理番号	遺物No.	遺構・グリッド名	分類	型式名	部位	主な文様（構文は原体を表記）
592	第50図 －8	T29－08	第2群2類	黒浜	胴部	集合沈線文、集合波状沈線文（簡歯状工具）
593	－9	X30－46	＊	黒浜(大木2系)	口縁部	集合波状沈線文（半截竹管内側コンパス手法）
594	－10	X30－46	＊	黒浜(大木2系)	胴部	集合波状沈線文（半截竹管内側コンパス手法）
595	－11	V29－54	＊	黒浜	口縁部	平行沈線文（半截竹管内側）
596	－12	V30－32	＊	黒浜	胴部	平行沈線文（半截竹管内側）
597	－13	T26－78	＊	黒浜	口縁部	結節沈線文
598	－14	X30－02	＊	黒浜	口縁部	結節沈線文附加条（軸不明＋L2本）
599	－15	W29－93	＊	黒浜	口縁部	結節沈線文
600	－16	W29－52	＊	黒浜	口縁部	結節沈線文
601	－17	T28－98	＊	黒浜	口縁部	結節沈線文
602	－18	Z35－58	＊	黒浜	口縁部	結節沈線文
603	－19	EE38－03	＊	黒浜	口縁部	結節沈線文（C字爪形）、附加条②（軸R＋R2本）
604	－20	T26－87	＊	黒浜	口縁部	結節沈線文（列点文）
605	－21	AA33－01	＊	黒浜	口縁部	押引文（先細れ半截竹管）、附加条②（軸R＋R1本）
606	－22	AA33－01	＊	黒浜	胴部	結節沈線文（C字爪形）
607	－23	X30－58	＊	黒浜	胴部	平行沈線文、隆起線＋結節沈線文（C字爪形）、単節LR
608	－24	1T	＊	黒浜	口縁部	沈線文、無節R
609	－25	X31－89	＊	黒浜	口縁部	沈線文（条線）、無節L/R
610	－26	EE38－53	＊	黒浜	胴部	斜格子目文
611	－27	V29－04	＊	黒浜	胴部	沈線文
612	－28	T26－77	＊	黒浜	胴部	沈線文
613	－29	BB35－81	＊	黒浜	胴部	斜格子目文、無節R
614	－30	1T	＊	黒浜	胴部	斜格子目文
615	－31	V27－26	＊	黒浜	胴部	無節R＋斜格子目文
616	－32	W29－65	＊	黒浜	胴部	斜格子目文
617	－33	Y32－10	＊	黒浜	口縁部	円形竹管刺突文
618	－34	V28－80	＊	黒浜	口縁部	円形竹管刺突文、附加条（軸不明＋L2本）/（軸不明＋L2本）
619	－35	T29－08	＊	黒浜	胴部	列点文
620	－36	T28－98	＊	黒浜	胴部	刺突文
621	－37	AA36－27	＊	黒浜	口縁部	無節L
622	－38	V28－75	＊	黒浜	口縁部	無節L
623	－39	X30－02	＊	黒浜	口縁部	無節L
624	－40	V29－23	＊	黒浜	胴部	無節L
625	－41	BB35－81	＊	黒浜	胴部	無節L
626	－42	T28－98	＊	黒浜	底部	無節L
627	－43	T29－08	＊	黒浜	口縁部	無節R
628	－44	1T	＊	黒浜	口縁部	無節R
629	－45	V29－44	＊	黒浜	口縁部	無節R
630	－46	X30－02	＊	黒浜	口縁部	無節R
631	－47	T26－86	＊	黒浜	口縁部	無節R
632	－48	AA36－27	＊	黒浜	底部	無節R
633	－49	T 29－08	＊	黒浜	底部	無節R
634	第51図 －50	V29－23	＊	黒浜	胴部	無節L/R
635	－51	V28－85	＊	黒浜	口縁部	0段多条単節RL
636	－52	T29－08	＊	黒浜	口縁部	単節LR（ミミズ腫れ状粘土帯）
637	－53	EE35－86	＊	黒浜	口縁部	単節LR
638	－54	T29－08	＊	黒浜	口縁部	単節LR
639	－55	T29－08	＊	黒浜	口縁部	単節LR
640	－56	T29－98	＊	黒浜	口縁部	単節LR
641	－57	2T	＊	黒浜	口縁部	0段多条単節LR
642	－58	U30－03	＊	黒浜	胴部	単節LR
643	－59	W29－99	＊	黒浜	胴部	単節LR、隆帯
644	－60	X30－02	＊	黒浜	胴部	単節RL/LR
645	－61	V28－72	＊	黒浜	口縁部	単節RL/LR
646	－62	AA33－47	＊	黒浜	口縁部	環付末端単節LR
647	－63	X29－91	＊	黒浜	口縁部	環付末端単節RL
648	－64	T29－08	＊	黒浜	胴部	環付末端無節L/R
649	－65	V29－04	＊	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L1本）
650	－66	X30－02	＊	黒浜	胴部	附加条①（軸L＋L2本）、RL
651	－67	U29－83、U29－98	＊	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L3本）
652	－68	AA33－01	＊	黒浜	口縁部	附加条①（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
653	－69	V29－63	＊	黒浜	胴部	附加条①（軸L＋L2本）/（軸R＋R2本）
654	－70	AA33－47	＊	黒浜	胴部	附加条①（軸＋LL2本）/（軸R＋R2本） 部分的に変なり組目状
655	－71	T29－08	＊	黒浜	口縁部	附加条②（軸＋ℓ2本）
656	－72	AA36－27	＊	黒浜	口縁部	附加条②（軸R＋R2本）
657	第51図 －73	AA36－27	第2群2類	黒浜	胴部	附加条②（軸R＋R2本）

管理番号	遺物No	遺構・グリッド名	分類	型式名	部位	主な文様（縄文は原体を表記）
658	−74	AA33−01	*	黒浜	口縁部	附加条Ⅱ（軸文＋R２本）
659	−75	AA33−01	*	黒浜	胴部	附加条Ⅱ（軸文＋R２本）
660	−76	AA33−01	*	黒浜	口縁部	附加条Ⅱ（軸文＋R２本）/（軸L＋L２本）
661	−77	AA33−01	*	黒浜	胴部	附加条Ⅱ（軸L＋L２本）/ LR
662	−78	Y31−06	*	黒浜	胴部	附加条Ⅱ（軸文＋R２本）/（軸L＋２本）
663	−79	V32−68	*	黒浜	胴部	附加条Ⅱ（軸文＋R４本）/（軸L＋４本）
664	−80	T26−88	*	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋r１本）
665	−81	V29−10	*	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R２本）
666	−82	T26−78	*	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋R２本）
667	−83	T28−98	*	黒浜	胴部	附加条（軸不明＋L２本）
668	−84	X30−02	*	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R２本）/（軸不明＋L２本）
669	−85	X33−38	*	黒浜	口縁部	附加条（軸不明＋R２本）/（軸不明＋L２本）
670	−86	X30−02	*	黒浜	底部	附加条（軸不明＋R２本）/（軸不明＋L２本）
671	−87	X33−85	*	黒浜	底部	附加条（軸不明＋R２本）/（軸不明＋L２本）
672	第52図 −88	3T	*	黒浜	口縁部	撚糸文R
673	−89	T28−98	*	黒浜	口縁部	撚糸文R
674	−90	3T	*	黒浜	口縁部	撚糸文L
675	−91	T26−77	*	黒浜	胴部	撚糸文L
676	−92	1T	*	黒浜	口縁部	綱目状撚糸文L（短軸絡条体第５類）
677	−93	4T	*	黒浜	胴部	綱目状撚糸文R（短軸絡条体第５類）
678	−94	V28−55	*	黒浜	胴部	綱目状撚糸文R（短軸絡条体第５類）
679	−95	V28−95	*	黒浜	胴部	貝殻腹縁文
680	−96	T28−98	*	黒浜	胴部	貝殻条痕文
681	−97	T26−77	*	黒浜	胴部	無文
682	−98	X34−04	*	黒浜	底部	無文
683	−99	T29−08	*	黒浜	底部	無文
684	−100	EE35−86	第２群３類	浮島Ⅰ	口縁部	結節沈線文（C字爪形）
685	−101	Z31−10	*	浮島Ⅱ～Ⅲ	口縁部	三角文
686	−102	Y31−29	*	浮島Ⅱ～Ⅲ	胴部	三角文
687	−103	EE−38−89	第３群１類	阿玉台Ⅰa	口縁部	単列角押文、印刻文
688	−104	U29−29	*	勝坂後半	口縁部	キャタピラ文
689	−105	W30−10	*	阿玉台Ⅲ	口縁部	幅広角押文
690	−106	V29−15	*	阿玉台Ⅱ～Ⅲ	胴部	単列角押文、円板状貼付文
691	−107	V28−92	*	阿玉台	口縁部	無文
692	−108	Y28−65	*	阿玉台Ⅳ～	口縁部	無節L/R
693	−109	CC37−24	第３群２類	加曽利EⅡ	口縁部	単節RL
694	−110	3T	*	加曽利EⅡ	胴部	複節LRL
695	−111	DD38−84	*	加曽利EⅡ	胴部	単節RL、磨消懸垂文
696	−112	DD38−84	*	加曽利EⅡ	胴部	単節LR、磨消懸垂文
697	−113	SD001	*	加曽利EⅡ	胴部	撚糸文L、刻み目文、沈線文
698	−114	W28−21	*	加曽利EⅡ	口縁部	条線＋沈線区画文、波状沈線文
699	−115	7T	*	加曽利EⅡ	胴部	撚糸文R、磨消懸垂文
700	−116	Y30−77	*	加曽利EⅡ	胴部	単節RL
701	−117	V28−85	*	加曽利EⅡ～Ⅳ	胴部	条線文（櫛歯）
702	−118	V28−85	*	加曽利EⅡ～Ⅳ	胴部	条線文（櫛歯）
703	−119	EE38−13	*	加曽利EⅡ	胴部	単節RL、磨消懸垂文
704	−120	X31−98	*	加曽利EⅡ	口縁部	無文
705	−121	CC37−54	*	加曽利EⅡ	口縁部	無文、隆起線文（有孔鍔付）
706	−122	3T	*	加曽利EⅡ	口縁部	無文、隆起線文（有孔鍔付）
707	−123	EE35−86	第４群１類	堀之内or 加曽利B	胴部	単節LR
708	−124	EE38−13	第４群２類	加曽利B	胴部	単節LR、入組弧線文
709	−125	1T	*	加曽利B	胴部	単節RL
710	−126	EE35−86	*	加曽利B	胴部	縄文＋条線文
711	−127	DD38−55	第４群３類	安行1	口縁部	枠状文、貼付文
712	−128	EE16	*	安行1	口縁部	単節RL（帯縄文）
713	−129	BB32−65	*	安行2	口縁部	単節RL（帯縄文）
714	−130	Y31−60	第５群１類	安行3c	口縁部	弧線文
715	−131	SD001−1	*	安行3c	口縁部	沈線文
716	−132	DD38−62・73	第４群３類	安行1（粗製）	口縁部	条線文、沈線文、列点文
717	−133	DD38−55	*	安行1	口縁部	沈線文、列点文
718	−134	SD001−1	*	安行1（粗製）	口縁部	結縄文、条線文
719	−135	X32−97	*	安行2（粗製）	胴部	結縄文
720	−136	Y32−81	第５群１類	安行3a	口縁部	区画内刺突文
721	−137	X32−45	*	安行	底部	無文（網代痕あり）
722	−138	A32−70	第５群２類	晩期後半	口縁部	撚糸文R

第５表　縄文石器観察表

挿図番号	遺構・グリッド名	遺物番号	器種	石材	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g
第53図－1	SI005	314	石鏃	安山岩	22.61	16.18	4.01	0.91
－2	U29－08	2b	石鏃	チャート	26.24	13.40	4.48	1.31
－3	X31－95	2b	石鏃	チャート	20.33	13.78	2.95	0.72
－4	Y32－96	2	石鏃	チャート	40.19	24.09	4.16	2.82
－5	Z31－30	2	石鏃	頁岩	16.25	12.18	3.72	0.70
－6	AA33－49	1	石鏃	チャート	24.03	14.38	4.15	0.91
－7	SI017	14	石鏃	チャート	25.93	15.58	5.20	1.63
－8	1T－2	1h	石鏃	チャート	22.18	18.09	4.31	1.49
－9	V29－45	2	石鏃	チャート	20.47	13.07	3.83	0.69
－10	BB32－71	2	石鏃	チャート	19.20	12.25	4.81	0.85
－11	AA32－71	1	石鏃	チャート	25.02	15.71	4.23	1.30
－12	CC39－09	5	石鏃	安山岩	16.85	10.27	2.41	0.29
－13	BB33	1a	石鏃	チャート	17.89	14.92	3.59	0.93
－14	1T－1	1	RFL	泥岩	34.28	14.38	5.03	1.95
－15	1T－2	1f	RFL	チャート	25.73	31.79	12.22	9.00
－16	表採	b	RFL	頁岩	28.36	23.35	8.57	4.60
－17	BB33－56	2	石核	チャート	28.75	27.99	8.46	7.65
－18	AA37－77	2a	石核	チャート	31.81	62.29	24.66	49.46
第54図－19	1T－2	1a	打製石斧	変成岩	86.00	59.24	33.72	225.08
－20	DD38－74	1a	打製石斧	安山岩	67.64	66.35	26.04	95.44
－21	SI003	86	磨製石斧	緑泥片岩	28.98	24.16	13.87	5.16
－22	X33－84	54	磨製石斧	緑泥片岩	73.59	37.15	12.85	52.57
－23	V29－95	1	磨製石斧	緑泥片岩	92.13	39.92	34.79	101.82
－24	SI007	28	磨製石斧	翡翠？（質の悪い硬玉）	51.28	24.41	7.72	14.52
第55図－25	W29－22	2	磨製石斧	緑泥片岩	164.20	68.43	38.51	690.00
－26	SI004	1－1f	磨製石斧	緑泥片岩	67.47	34.42	24.28	82.57
－27	U30－58	2	磨製石斧	緑泥片岩	68.68	39.04	24.08	71.08
－28	BB32－79	2	磨石	安山岩	125.83	115.97	55.90	1110.00
－29	貝層内一括	a	磨石	変成岩	80.05	40.31	12.09	62.32
第56図－30	SI004	1－1a	凹石	安山岩	84.54	74.49	44.91	278.94
－31	SI006	7	凹石	安山岩	91.41	80.98	43.86	361.50
－32	SI005	45	凹石	砂岩	104.48	67.77	37.12	368.18
第57図－33	X33－75	2b	凹石	安山岩	80.39	84.83	35.70	314.78
－34	AA33	1a	凹石	安山岩	91.82	59.96	39.87	360.19
－35	SI011	17	敲石	砂岩	97.52	73.02	39.01	388.86
－36	T3	1a	敲石	砂岩	124.21	61.97	37.49	308.15
第58図－37	SI005	1－2g	敲石	砂岩	50.75	37.40	20.01	59.91
－38	X33－38	2b	敲石	砂岩	53.21	43.43	10.07	33.20
－39	SI008	242	敲石	安山岩	82.50	68.97	46.21	397.08
－40	T28－98	1a	石皿	安山岩	134.99	82.28	44.27	465.35
第59図－41	SI007	90	石皿	花崗岩	120.40	88.50	45.83	725.00
－42	W29－67	2	石皿	安山岩	115.52	120.19	36.54	583.66
－43	SI016	127	石皿	安山岩	55.90	54.50	37.53	71.49
－44	T3	1b	石皿	安山岩	35.21	46.37	41.01	46.98
－45	CC55－44	2	石皿	安山岩	54.48	40.87	44.68	95.31
－46	SI011	128	砥石	砂岩	125.09	91.25	25.19	311.12
－47	SI003	3a	軽石製品	軽石	75.87	69.27	36.80	25.35
－48	SI005	1－2i	軽石製品	軽石	106.27	77.84	32.50	37.34

8　貝層出土の動物遺存体

柏北部東地区の調査では、縄文前期各時期の遺構内貝層が多数発見されており、この時期の動物資源利用の実態を解明する上で、きわめて重要な資料となり得るものである。原畑遺跡においても、報告対象地区内で、遺構内貝層５か所を検出した。貝層の形成時期はすべて前期中葉・黒浜式期であり、いずれも住居跡床面上や覆土中に盛り上がるように堆積した、この時期に特徴的な形状の小規模貝層である。このうち、４遺構で貝サンプルを採取した結果、９種以上の貝類を検出した。貝類の同定は当事業のために作成した貝塚出土標本を元に上守が行ったが、西野雅人氏の助言を得た。なお、各貝層の堆積状況については第２章第１節中に記載した。

（１）分析方法

SI006・SI008・SI011・SI017でサンプルを採取した。ブロックごとや、貝層の一部でコラムサンプルを採取したが、諸般の事情により分析対象は一部を各遺構一括で扱った（第６表）。

貝サンプルは9.52㎜・4㎜・2㎜・1㎜・0.5㎜メッシュの試験フルイによる水洗分離を経て、選別作業を行った。貝類は４㎜メッシュ以上を選別し、二枚貝類は殻頂部の鉸歯が約半分遺存するものを左右別に集計し、多いほうを最小個体数とした。巻貝類は殻軸の下端が遺存するものを集計した。計測作業は計測可能個体が多い種について実施した。計測は、デジタルノギスを使って行った。魚類・哺乳類等についてはすべてのメッシュを対象として選別することを基本としたが、ほぼ含まれていないため、精密な選別を実施しなかった。

第６表　貝サンプル一覧

サンプル名	旧遺構名	種別	時期１	時期	採取法	cut	採取量	分析量	備　考
SI006	(4)SI001	住居跡	前期中	黒浜	一括	3	10.5㎥	4.5㎥	床確化面直上の12ブロックの小貝層のうち、貝層A～Cを採取。分析は一括
SI008	(4)SI003	住居跡	前期中	黒浜	一括	8	12.1㎥	3.0㎥	床確化面上４ブロックの小貝層のうち貝層Aでコラムサンプル８カット採取。分析は一部を一括
SI011	(12)SI003	住居跡	前期中	黒浜	一括	1	14.7㎥	4.5㎥	床面上に比較的大きな貝層形成。20cm四方で一括採取。一部を分析
SI017	(15)SI003	住居跡	前期中	黒浜	一括	1	不明	4.5㎥	覆土中の小貝層全量一括採取。一部を分析
以下は分析対象外									
SI014	(5)SI004	住居跡	前期中	黒浜	一括	—	—	—	覆土中の小貝層。サンプルなし
SK005	(1)SI001	土坑	前期中	黒浜	一括	—	—	—	覆土中の小貝層。サンプルなし

第７表　動物遺存体種名一覧

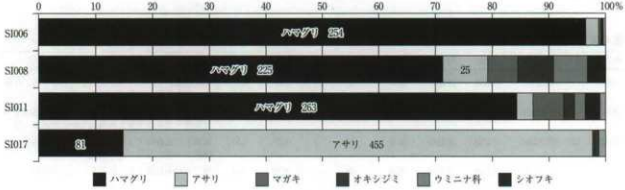
腹足綱	直腹足亜綱	アマオブネガイ目	アマオブネガイ科	ヒロクチカノコ	*Dostia violacea*
	前鰓亜綱	盤足目	タマキビ科	タマキビ	*Littorina brevicula*
		中腹足目	ウミニナ科	ウミニナ科	*Potamididae gen. & sp. Indet.*
			タマガイ科	ツメタガイ	*Glossaulax didyma*
二枚貝綱		フネガイ目	フネガイ科	ハイガイ	*Tegillarca granosa*
				サルボオ	*Scapharca subcrenata*
			イタボガキ科	マガキ	*Crassostrea gigas*
		マルスダレガイ目	バカガイ科	シオフキ	*Mactra quadrangularis*
			マルスダレガイ科	ハマグリ	*Meretrix lusoria*
				アサリ	*Ruditapes philippinarum*
				オキシジミ	*Cyclina sinensis*

（2）貝類（図版39）

貝類は6科9種以上を検出した（第7表）。第8表には同定数を、第9表・第63図には貝種組成を示した。主要構成種は、内湾砂底種のハマグリ、アサリの2種であり、SI008で約8割、SI011で9割弱、SI006・SI017ではほとんどを占めている。SI006・SI008・SI911はハマグリ主体、SI017はアサリ主体である。これに湾奥泥底干潟種のマガキ・オキシジミ・ウミニナ類、内湾砂底種のシオフキが若干混じっている。湾奥泥底干潟種と内湾砂底種が混在する点は、当地域の前期貝層の特徴といえるが、黒浜式期には比較的ハマグリとアサリが集中するようである。計測値については、データの提示に留めておく。

第8表　貝種組成

種名	SI006	SI008	SI011	SI017	全体	%
ハマグリ	254	225	263	81	823	57.15%
アサリ	6	25	9	455	495	34.38%
マガキ	1	17	17	1	36	2.50%
オキシジミ		20	6	3	29	2.01%
ウミニナ科		19	6	1	26	1.81%
シオフキ	1	10	8	1	20	1.39%
その他	1		3	7	11	0.76%
	263	316	312	549	1440	
その他の内訳						
サルボオ	1		2	5	8	
ツメタガイ				1	1	
ハイガイ			1		1	
オオノガイ				1	1	



第63図　貝種組成

第9表　貝類計測値分布

ハマグリ殻長

cm	SI006	SI008	SI011	SI017
-5				
-10				1
-15				
-20				1
-25	4	11	3	5
-30	37	44	29	16
-35	26	32	19	9
-40	12	7	11	6
-45	2	4	5	1
-50		1	2	
-55			2	
-60				
-65				
試料数	81	100	71	39
平均	30.5	30.3	32.6	29.1
標準偏差	3.9	5.7	6.4	6.4

アサリ殻長

	SI008	SI017
-5		
-10		7
-15		8
-20	1	43
-25	1	24
-30	1	5
-35	8	
-40		
-45		
-50		
-55		
-60		
-65		
試料数	11	87
平均	34.8	23.2
標準偏差	5.1	4.7

マガキ殻長

	SI008	SI011
-5		
-10		
-15		2
-20		5
-25		3
-30	1	3
-35	8	2
-40	3	1
-45	4	1
-50	4	1
-55	2	1
-60	1	
-65		
試料数	23	19
平均	45.4	31.8
標準偏差	7.6	11.4

第2節　古墳時代

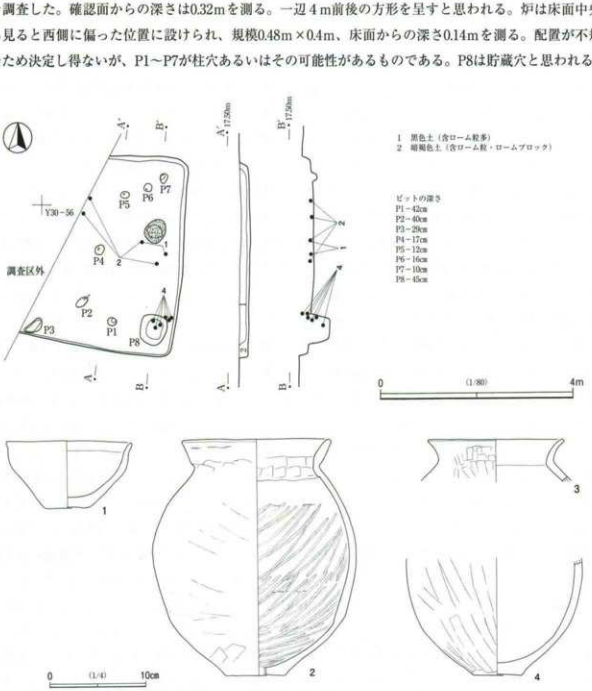
1　概要

第1次から第23次まで実施した上層本調査の合計面積は10,099㎡あるが、古墳時代は中期に属する2軒の竪穴住居跡とそれに伴う土器、加えて遺構外から出土した少量の埴輪片の検出に止まった。2軒の住居跡は遺跡中央北側にあたるY30区の近接した位置にある。

2　竪穴住居跡

SI020（第64図、図版5・40）

Y30－56区付近に位置する。調査区域外との境界に所在するため全掘できず、概ね3.22m×4.02mの範囲を調査した。確認面からの深さは0.32mを測る。一辺4m前後の方形を呈すと思われる。炉は床面中央から見ると西側に偏った位置に設けられ、規模0.48m×0.4m、床面からの深さ0.14mを測る。配置が不規則なため決定し得ないが、P1～P7が柱穴あるいはその可能性があるものである。P8は貯蔵穴と思われる。



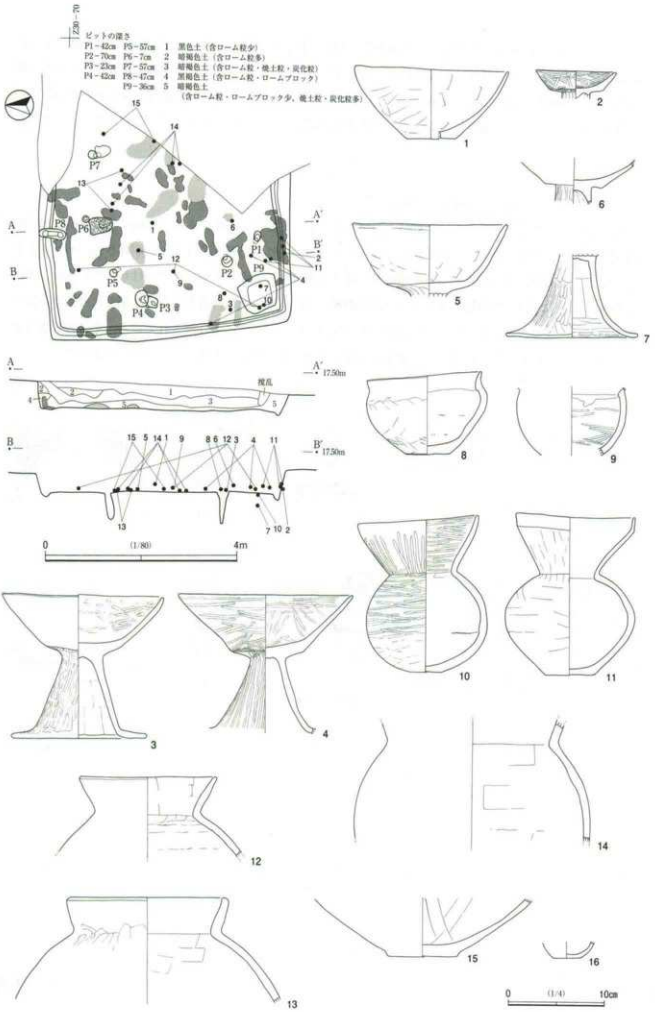
第64図　SI020

遺物のうち出土位置が記録されたものは床面～覆土中層、貯蔵穴中の出土である。1は杯である。器肉の厚い平底の底部から、体部は内湾しながら外上方に立ち上がり、口縁部で外方向に摘み上げられている。内面口縁部に稜線が形成されている。摩耗が著しいため器面の遺存度は低いが、内外面平滑に調整されていたと思われる。2～4は甕である。2は胴部中位に最大径を有する球形の胴部の甕である。口縁部は短く外傾する。口縁部は器肉を厚くするため粘土が補填されている。底部付近とそれ以上との成形時の接合が悪く、器面に凹凸が生じている。内外面共に丁寧な調整で、内面には縦方向のヘラミガキが施されている。二次焼成により外面には煤の付着が著しく、器面の剥離もみられる。3は甕の口縁部片である。大きく外反する形状で口唇部に煤の付着がみられる。4は甕の底部付近の遺存である。外面はヘラナデが縦方向に施され、二次的な焼成による煤の付着がみられる。

SI021（第65図、図版5・40）

Y30－68・69区付近に位置する。北東から南側にかけては削平を受け消失していたため、概ね5.32m×5.06mの範囲の調査に止まった。確認面からの深さは0.56mを測る。一辺5.3m前後の方形を呈すと思われる。壁沿いを中心とした床面上全体から焼土や炭化材が検出されており、焼失家屋になる可能性が高い。炉は想定される主軸上の北側に偏った床面に設けられ、規模0.48m×0.33m、床面からの深さ0.02mを測る。ピットは9本検出されている。このうちP2・P5・P7は主柱穴、P9は貯蔵穴と思われる。

遺物のうち出土位置が記録されたものは床面～覆土中層、貯蔵穴埋土中の出土である。1は杯である。平底の底部から体部はほぼ直線的に外上方に立ち上がり、口縁部でわずかに上方に立ち上がる。器肉は薄く、丁寧に調整されている。内面は赤彩が確認できるものの遺存状態は悪い。外面も赤彩の可能性があるが不明瞭である。2は器台である。器受け部のみの遺存である。平らな底部から口縁部は直線的に外方向に立ち上がる。内外面丁寧にヘラミガキが施されている。内外面共に黒色を呈しているが、台部などの破損部分も同様の黒色であることから、二次的な火を受けたことにより、黒変したものと考えられる。3～7は高杯である。3・4は類似した器形で脚部は下方の開く円錐形を呈し、裾部は強く屈曲し開く。杯部は僅かに底部が形成され、口縁部はほぼ直線的に開く。内外面共に丁寧にヘラミガキが施されている。2個体ともに黒色部分が多く器面の荒れが確認できるが、二次焼成時のものと思われる。5は杯部のみの遺存である。底部が形成され、箱状を呈している。内面は赤彩に類似した色調であるが、焼成時の変色によるものと思われる。内外面平滑に調整されている。6は杯部の一部のみの遺存である。小さく平らな底部から口縁部は直線的に開く。内面の荒れが著しい。7は脚部のみの遺存である。下方の開く円錐形で裾部は漸次大きく開く。外面は縦方向の幅の狭いヘラナデが施されている。外面裾部には黒斑がみられる。8～11は壺である。8・9は無頸の壺である。8は平底の底部で最大径を胴部上位に有する。口縁部は小さく外傾する。内面の磨滅が著しく、口縁部を中心に煤の付着がみられる。9は胴部片で内外面赤彩が施されている。底部付近にヘラ状工具による深い切り込み痕が確認できる。断面が三角形を呈していることから、金属器の砥石として転用されたことが考えられる。10・11はいわゆる坩である。10は小さな底部を形成し、最大径を胴部中位に持つ球形の胴部である。口縁部は僅かに内湾しながら外上方に立ち上がる。内外面ヘラミガキが施され、器面は平滑である。外面と内面口縁部に赤彩が施されている。11は胴部中位に最大径を有している。胴部の形状は算盤玉状を呈する。口縁部は直線的に外傾し、口唇部で上方に立ち上がる。外面胴部と内面口縁部に黒斑がみられる。12～15は甕である。12は胴部上位から口縁部の遺存であ

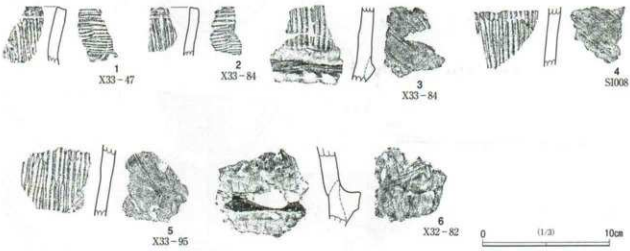

Z30－70
ピットの深さ
P1－42cm P5－57cm 1 黒色土（含ローム粒少）
P2－70cm P6－7cm 2 暗褐色土（含ローム粒多）
P3－23cm P7－57cm 3 暗褐色土（含ローム粒・焼土粒・炭化粒）
P4－42cm P8－47cm 4 黒褐色土（含ローム粒・ロームブロック）
P9－36cm 5 暗褐色土
（含ローム粒・ロームブロック少，焼土粒・炭化粒多）
A
A'
B
B'
17.50m
撹乱
0
(1/80)
4m
0
(1/4)
10cm

第65図 SI021

る。口縁部はほぼ直線的に外傾する。内面胴部に明確な接合痕が残る。外面全体に煤の付着が確認できる。13は口縁部片である。口縁部は上方に伸び、口唇部で摘み上げられることで、外面に面取り状の形状が形成される。外面の一部に黒斑がみられる。14は胴部片である。おそらく球形の胴部となろう。外面には煤の付着が著しい。15は底部片である。若干突出する底部である。16はミニチュア土器である。丁寧な調整である。

3　遺構外出土の埴輪（第66図、図版40）

全て破片のみの遺存であるため詳細は不明である。1・2は口縁部片である。外面には縦方向、内面には同じ工具により横方向のハケ調整が施されている。のちに外面口唇部にヨコナデが施され、ハケ目を消している。3は突帯部の破片である。明確な三角の形状で稜の上面は丁寧になでつけられているが、下面は粗雑である。6は人物埴輪の基台部と裾部との接合部にあたる突帯の遺存である。裾部には細かい目の縦方向のハケ調整が施されているが、突帯の貼り付け時のなでつけにより消されている。突帯の形状は歪んだ台形で、上面が平らになる。胎土は赤味を帯びた橙褐色で堅緻である。ややスコリアが目立つ。



第66図　埴輪

第3章　まとめ

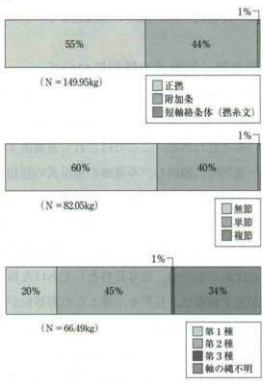
第1節　黒浜式の縄文原体について

多種多彩な縄文原体を製作した関山式と比較すれば、黒浜式の縄文原体は貧弱であることは否めない事実であり、型式間のヒアタスも強く感じられるところである。このような理由からか、関山式を中心に羽状縄文土器群前半の縄文原体を追求した既往研究がある一方で、黒浜式の縄文原体に関する研究は管見の限りではあるが、各論を述べたものはあっても総論的に検討したものはなかったと思われる[1]。

本項も黒浜式の縄文原体を深く追求するものではないが、原畑遺跡の黒浜式は後述するようにごく一部を除き同式でもより古い部分の好資料と考えられるため、縄文原体の内容から何か特徴的なことが捉えられないかと考えた。今回は住居跡出土の黒浜式に限って縄文原体を分類したが、その結果、大きく捉えて無節・単節・複節という正撚の縄文（結節回転を含む）、反撚の縄文、附加条縄文、前々段合撚（異節）、短軸絡条体を回転施文したいわゆる撚糸文が確認できた[2]。各々の重量を集計した上で、3つの項目を設けそれぞれを重量比で表した（第67図）。なお、縄文が施される住居跡出土土器の総重量は約150kgであるが、反撚の縄文と前々段合撚（異節）は微量であったため重量比から除外している。

正撚縄文は約55%、附加条縄文は約44%、撚糸文は約1%である（第67図上段）。より安定した撚りが得られる正撚が半数以上を占めるのは従来の知見どおりと思われるが、附加条縄文が半数近くを占めることはおそらく予想外の結果であり、一遺跡の集計ではあるがこのような結果が数字で示されるのも初めてと思われる。これに比して黒浜式に一定量存在すると従来から言われてきた撚糸文が極端に少ない。この理由等については附加条の内容に触れた際に述べることとする。

正撚縄文では無節が約60%、単節が約39%、複節が約1%である（第67図中段）。従来の知見どおり無節縄文が多数を占めている。図では示していないが無節はLが約55%、Rが約45%、単節はRLが約40%、LRが約60%、複節はLRLが約45%、RLRが約55%である[3]。この数字を見ると単節にはやや量的差が認められるものの、総じて左撚り：右撚りの比率はほぼ均衡していると見て良さそうである。黒浜式は羽状縄文土器群であるので比率が均衡しているのは当然と思われるかもしれないが、実際は羽状構成をとらない単方向の斜縄文が施される個体資料も多く存在している。本遺跡では羽状構成の有無を問わず、左撚り、右撚りの縄文原体がほぼ同じ割合で用いられていた可能性を指摘しうる[4]。また、これも図示していないが還付末端となるものは無節では約11%、単節では約4%を確認しており、二ツ木式から関山式に盛んに用いられた還付末端が一定量残存していることがわかる。



第67図　縄文原体の重量比

附加条では附加条を軸の縄と同方向に絡げた第１種が約20%、附加条を軸の縄と反対方向に絡げた第２種が約45%、附加条を軸の縄に右巻きし、左巻きしている第３種が約１%、軸の縄は不明であるが附加条と判断されるものは約34%となる（第67図下段）。軸の縄に絡げた附加条は１本から４本まで確認できる。統計処理は行わなかったが、２本用いたものが最も多いと思われる。種別で最も多い第２種では、附加条に繊細な縄を用い幅のある軸の縄を地にして対比的な効果を醸出した例（図版34－８）や、附加条を３～４本用いたり太い２本を用いたりして附加条に幅を持たせ、軸の縄の条を分断させることで、関山式で盛んに用いられた直前段合撚の擬似的効果をもたらした例（図版35－１）がある。このように第２種は他の附加条に比べより施文効果が高いことから、盛んに用いられた可能性がある。

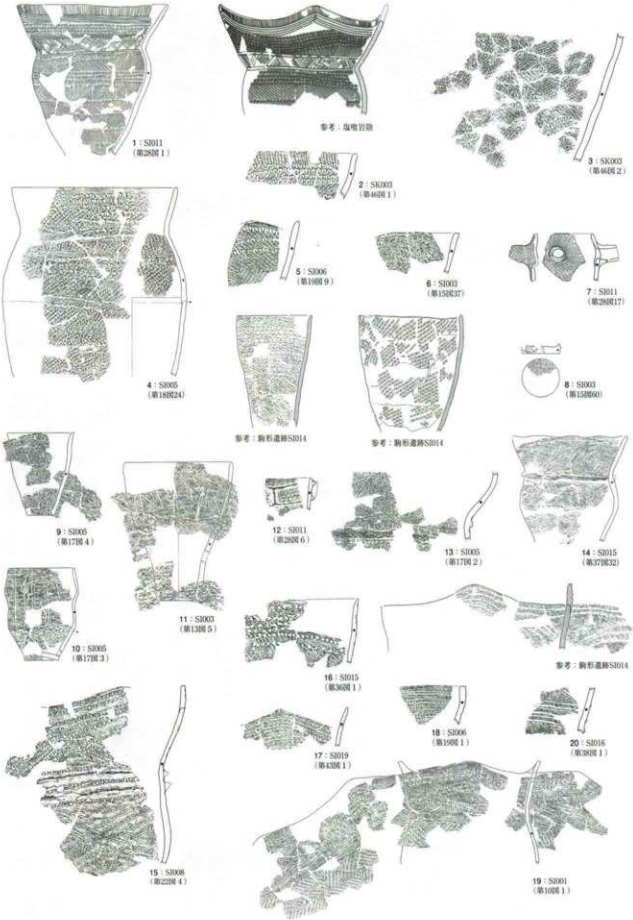
軸の縄は不明だが附加条縄文と判断したものは全体の約1/3ある[5]。規則的に条間の空いた回転圧痕の多くを撚糸文とせず附加条縄文と考えた理由は、駒形遺跡の報告で既述しておいた[6]。要点を再度述べれば、２条以上が組になり規則的な間隔をおいて施文されている場合、軸に棒状工具を用いた撚糸文より軸の縄に撚紐を絡げた附加条の方がより軸に絡みつくので、２条以上があまり緩むことなく安定して表出される可能性が高いと、土器の観察結果及び製作原体の施文実験から判断できたためである。また、第１種・第２種に識別されたものの中にも附加条が軸の縄より突出するためか、部分的に軸の縄が付いていない或いは付きにくくなっているものが実際認められることから、この考えは補強されよう。今回はこれらの理由に加え、施文単位方向に対して条間の空いた回転圧痕が斜位にあるものを附加条縄文（図版35－３・４）、同一方向にあるものを撚糸文（図版35－５）と判別した。今まで撚糸文とされた事例中には、軸の縄が不明である附加条縄文が相当数含まれていると考える。

原体の素材は一般的には細かく裂かれた比較的軟らかな繊維をよく撚り合わせているが、中には樹皮など硬い繊維を用いよく撚り合わせていないものがあると指摘されている（山内1979）。素材は不明であるが、本遺跡の無節の中に撚りに用いた繊維が硬く粗いためか、繊維痕の器面への食い込みが節があるかのように表出された例（第18図23など）があることを付記しておきたい。

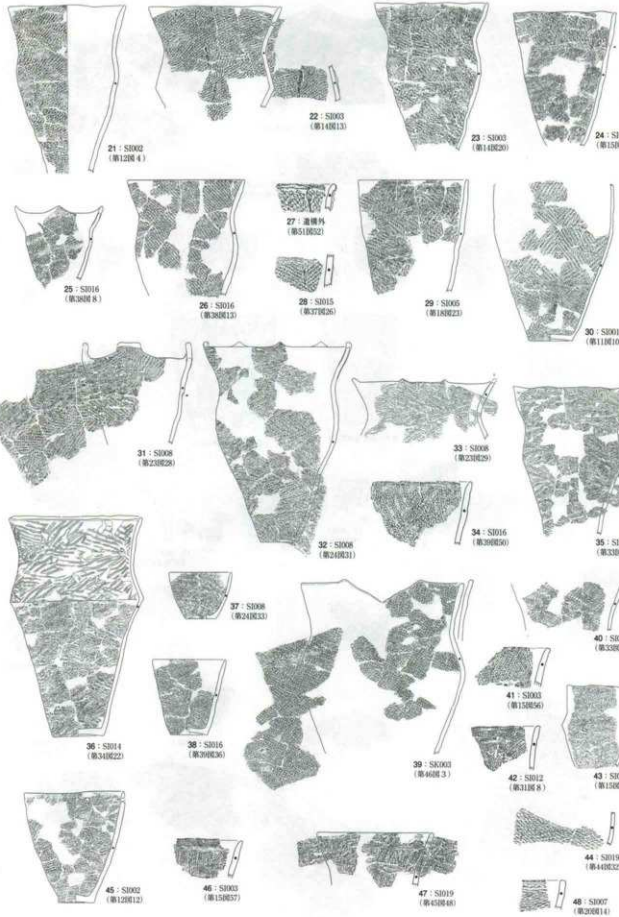
第２節　黒浜式の様相について

原畑遺跡では黒浜式に帰属する竪穴住居跡19軒、土坑４基が検出され、良好な資料が得られた。中でもSI001・003・005・008・011・014・015・019出土土器は充実した内容で、相互補完的に型式内容を示していると思われる。ここではこれら遺構出土土器を中心に遺構、遺構外出土を併せた主要な資料を第68図１～第70図に抽出し、本遺跡の黒浜式の様相についてまとめておきたい。

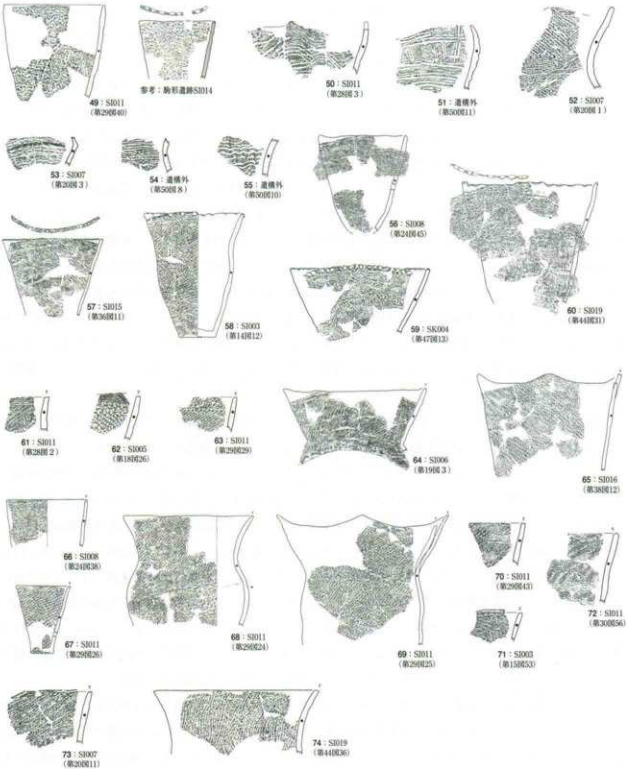
第68図１～８は具備する諸要素から、羽状縄文系土器群の前型式である関山式の遺制が認められるものである。１は口縁端部の刷毛目状沈線（短沈線帯）、半截竹管内側を強めに引いた平行沈線による文様モチーフ、還付末端羽状構成による横帯区画の採用など関山Ⅱ式的要素を種々持つ土器で、平縁と波状縁の差はあるものの、参考資料としてあげた福島県塩喰岩陰例に酷似している。また、胎土中には少量の繊維が含まれる他、長石を主体とした粗砂粒が多量に含まれる。塩喰岩陰例を実見していないが、この胎土は大木２式に特徴的である[7]。２・３は同一個体であるが欠損部があるため、口縁端部の刷毛目状沈線、還付末端羽状構成による横帯区画の採用以外の情報は得られない。４・５は還付末端縄文が施されるもので、４は甕形である。参考資料は隣接する駒形遺跡SI014例で、還付末端施文の好例である。６は前々段合撚（異節）縄文が施されるもので、参考資料はやはり駒形遺跡SI014の好例である。７は注口部の形状が関山


1：SI011
（第28図1）
参考：塩喰岩強
2：SK003
（第46図1）
3：SK003
（第46図2）
4：SI005
（第18図24）
5：SI006
（第19図9）
6：SI003
（第15図37）
7：SI011
（第28図17）
参考：胸形遺跡SI014
参考：胸形遺跡SI014
8：SI003
（第15図60）
9：SI005
（第17図4）
10：SI005
（第17図3）
11：SI003
（第13図5）
12：SI011
（第28図6）
13：SI005
（第17図2）
14：SI015
（第37図32）
参考：胸形遺跡SI014
15：SI008
（第22図4）
16：SI015
（第36図1）
17：SI019
（第43図1）
18：SI006
（第19図1）
19：SI001
（第10図1）
20：SI016
（第38図1）

第68図　黒浜式土器（1）


21：SI002
（第12図4）
22：SI003
（第14図13）
23：SI003
（第14図20）
24：SI003
（第15図42）
25：SI016
（第38図8）
26：SI016
（第38図13）
27：遺構外
（第51図32）
28：SI015
（第37図26）
29：SI005
（第18図23）
30：SI001
（第11図10）
31：SI008
（第23図28）
32：SI008
（第24図31）
33：SI008
（第23図29）
34：SI016
（第39図50）
35：SI014
（第33図18）
36：SI014
（第34図22）
37：SI008
（第24図33）
38：SI016
（第39図36）
39：SK003
（第46図3）
40：SI014
（第33図21）
41：SI003
（第15図56）
42：SI012
（第31図8）
43：SI003
（第15図41）
44：SI019
（第44図32）
45：SI002
（第12図12）
46：SI003
（第15図57）
47：SI019
（第45図46）
48：SI007
（第20図14）

第69図　黒浜式土器（2）


49：SI011
（第29図40）
参考：胴形遺跡SI014
50：SI011
（第28図３）
51：遺構外
（第50図11）
52：SI007
（第20図１）
53：SI007
（第20図３）
54：遺構外
（第50図８）
55：遺構外
（第50図10）
56：SI008
（第34図45）
57：SI015
（第36図11）
58：SI003
（第14図12）
59：SK004
（第47図13）
60：SI019
（第44図31）
61：SI011
（第28図２）
62：SI005
（第18図26）
63：SI011
（第29図29）
64：SI006
（第19図３）
65：SI016
（第38図12）
66：SI008
（第24図38）
67：SI011
（第29図26）
68：SI011
（第29図24）
69：SI011
（第29図25）
70：SI011
（第29図43）
71：SI003
（第13図53）
72：SI011
（第30図56）
73：SI007
（第20図11）
74：SI019
（第44図36）

第70図　黒浜式土器（３）

式のようなU字形にはならないが、片口注口土器の口縁上部に付く円孔状の注口部である。8は外底面の一部に撚糸文が施されるものである。花積下層式～関山式まで外底面への縄文施文は一定量認められるもので、黒浜式の最も古い部分まで認められる要素と言われている[8]。

第68図9～11は縦位、斜位、やや粗雑な斜格子目の沈線文が施されるもので、黒浜式を代表する有文の一つである。本遺跡ではヘラ状工具などによる一本引き沈線よりも、半裁竹管内側を用いた平行沈線で描出したものが多い。黒浜式も中頃以降になると縦位沈線の獲得によって肋骨文や葉脈文が派生するが、これら沈線文系の土器群はその祖形となるものである。10は追加成形痕の上下で沈線文→縄文の二帯構成になっている。欠損部位があり定かではないが、11も本来、追加成形痕を境にして二帯構成になると思われる。この二帯構成の土器は類例がある程度存在している。二帯構成は縄文→沈線文と逆転はするが、黒浜式の最も古い部分の良好な一括資料である黒浜遺跡群宿上貝塚第3号住居跡例にも複数認められる[9]。

第68図12～15は隆起線が認められるもので、隆起線上に或いは付随して結節沈線文が施される。12は隆起線で口縁部に狭小な枠状文を形成し、13～15は鍔状隆起線が口縁部と胴部を区画して巡らされる。これらは附加条縄文が大形の菱形構成を取り横位展開すると思われるが、このことは隆起線とりわけ鍔状隆起線文が巡らされる土器の出自系統を考える上で重要である。15では鍔状隆起線文で区画された口縁部には結節沈線による大形菱形文が、胴部には附加条縄文による大形菱形がそれぞれ展開しており、図形構成上の強い繋がりが想定できる。

第68図15～20は結節沈線が口縁部に横位展開するものである。15については既述したとおりである。16・17は直線的な押引文、結節沈線文が密接して横位に施されるが、図形的には大形菱形文を形成しないと思われる。これらと大形菱形文の中間的様相を示すのか定かではないが、参考資料とした駒形SI014例は大形波状文を展開している。18は結節沈線の立ち消えが認められる。19は波状縁の口縁端部に刷毛目状沈線が施され、口縁部には結節沈線による大形菱形文が展開する。胴部には単節縄文が菱形構成を取る。やや不規則で結節沈線の立ち消えと呼べる内容か不明だが、沈線化している箇所も認められる。以上は有尾系土器と有尾系土器の影響を受けた土器群である。特に19は刷毛目状沈線、結節沈線による大形菱形文の展開、胴部単節縄文の整然とした菱形構成など、県内出土資料としては最も有尾系土器の特徴を具備している[10]。20は口縁部下端の区画線としてC字爪形による結節沈線が巡らされるよう。区画内の構成は半裁竹管内側を用いた平行沈線文が横位展開し、残存部右上の沈線文（おそらく平行沈線）の向きから鋸歯状文を描出する可能性がある。平行沈線文間には2ヶ所に小粒ながら瘤状貼付文が付される[11]。

第69図21～31は正燄の無節、単節縄文が施されるものである。器形では21など底径に対し器高のある細身の深鉢がある。また、22のような牽牛花状の器形のものが存在するのもこの時期の特徴である。縄文は成形後、器面の乾燥があまり進んでいない時点で施されているようで、22・27・28のように横位縄文の施文単位変換点に、回転施文に伴いはみ出した粘土帯がミミズ腫れ状に付される。何か意図を持って付されたものか、文様に準ずる可能性がある。新井和之氏によれば、黒浜式の前後型式である関山式、諸磯a式に見られない要素で、黒浜式の変遷の中では氏の言う第Ⅳ段階まで存在し、それ以後になくなるようである（新井2010）。また、29・30のように羽状・菱形構成を取る個体がある一方で、第1節で既述したように羽状縄文系土器でありながら、21～23・25・26のように斜縄文となる個体も多い。24は追加成形痕の上下で無節R→軸の縄不明の附加条縄文という二帯構成になっている。31は欠損しているが4単位の板状突起が波頂部に付くと思われる[12]。縄文は追加成形痕を境にして胴部側は羽状構成が明瞭であるが、口縁部

側はランダムな施文方向で羽状構成の意識がない。加えて胴部には羽状縄文に重ねた特異なヘラ書き沈線が認められる。

第69図32～44は附加条縄文が施されるもので、同図45～48は撚糸文が施されるものである。第1節において附加条縄文と撚糸文の判別法とその重量比、附加条種別毎の重量比などについて概述しているので多くは繰り返さないが、正撚縄文に次いで附加条縄文が多用されており、従来の撚糸文が少なからず用いられているという見解は修正が必要と思われる。附加条の施文効果であるが、附加条第1種の32・33、第2種の36・38に見られるように、有尾系土器の大形菱形文にも通じる附加条による菱形構成が展開する。また、附加条第2種では39・40のように軸の縄と附加条の太さを意識して附加条縄文を作成することで、関山Ⅱ式まで多用された直前段合撚（異条）縄文の擬似的効果が得られている。44は附加条第3種で附加条を左巻き、右巻きすることで、48の大木2a式系と思われる網目状撚糸文の擬似的効果が得られている。34は第1種であるが、斜方向に重ねて施文することで網目状撚糸文の擬似的効果が得られている。また、41は軸の縄は不明だが、附加条に異方向の原体を一組にして用い矢羽状の条を表出している。45～47の撚糸文は施文方向に条が一致し、器面を埋め尽くすように施されているが、総じて装飾性に乏しい。なお、48の胎土中には第68図1と同様に長石を主体とした粗砂粒が多量に含まれている。器形では32・35のような細身のキャリパー形の深鉢、39のような甕形に近いものがある他に、36・43のような牽牛花状の器形のものが存在している。

第50図49は原体種別は未明だが、無節の結節回転が横位に連続して施されるもので、参考資料の駒形遺跡SI014例に酷似する。この参考資料の口縁端部上には連続押捺文が施されていることに注目しておきたい。第50図50～55は半裁竹管内側を用いた平行沈線文・コンパス文、櫛歯文など施文具の違いにより複数あるが、基本的に集合沈線文、集合波状沈線文が横位展開する土器である。結節回転の土器は類例に乏しいため可能性の指摘であるが、横位展開する点では集合波状沈線文と施文効果が近似している。第50図56は貝殻条痕文が外面全面に施され、器形は尖底もしくは径の小さい不安定な平底になると思われる稀有な例である。

第50図57～74は口縁端部（口唇部）上が加飾されているものである[13]。57は刻み目が付され、58～60は連続押捺文が施されるもので、61～74は溝状口唇となるものである。これらの口縁部以下の文様を瞥見してみると、通常の縄文、附加条の個体以外に、附加条第3種（60）、関山式の遺制である鋸歯状沈線文（61）、還付末端縄文（62・63）などにも加飾されていることがわかる。

以上の解説から原畑遺跡の黒浜式を整理要約すると、

① 関山式の遺制を示す文様構成、文様要素を持つ土器が一定程度含まれている。

② 有尾系土器あるいは有尾系の影響を受けた土器が、東関東地域としてはまとまっており、しかも汎関東的には古い段階に位置付けられる可能性がある。

③ 附加条縄文が予想以上に用いられている。これは施文効果が関山式から継承されたり、有尾系土器の大形菱形文の図形に合致して発展した可能性がある。

④ 口唇部装飾は刻み目の付加、連続押捺文、溝状口唇とも一定程度認められるが、外底面への施文は1点のみの検出であった。

ここまで述べてきた内容から、原畑遺跡の黒浜式土器は概ねより古い部分のまとまった資料であることが理解できたかと思う[14]。今回は紙数の関係で実見を行った他遺跡の土器群について、資料化することが

ほとんどできなかった。今後、新資料の蓄積が見込まれる柏北部東遺跡群諸遺跡を含め、重要資料が数多く存在する千葉県北西部の既報告資料について、稿をまとめる機会を持ちたいと考える。

註1　前期前半の施文原体については、1974『関山貝塚』における庄野靖寿氏の関山式の縄文原体に係る研究、1986「施文原体の変遷－羽状縄文系土器－花積下層式～関山式土器」による下村克彦氏の総合的研究をはじめ、優れた成果がいくつか認められる。一方、黒浜式は山内清男氏による1979『日本先史土器の縄紋』中で附加条縄文の多い型式として挙げられてはいるが、新井和之氏の一連の研究成果（新井1977他）中に所々見受けられるものの、総合的に論じたものは見られない。

2　図版34・35に縄文を中心とした本遺跡出土黒浜式の主な文様の拡大写真を示しておいた。

3　羽状縄文の破片は、羽状となる原体が無節、単節、複節いずれの場合もそれぞれの合計重量を二分し、左撚りと右撚りに振り分けて集計した。

4　山内清男氏は『日本先史土器の縄紋』の中で「縄紋の統計的研究」を表し、日本先史時代の縄の撚り方の癖を検討しており、一般的には右撚り優勢の型式が多いと言及されている。しかし、ほぼ同時期の地域差や同一地方における時代差の中で、左撚りと右撚りの縄文の比率がいずれかに偏る例があることも指摘されている。例えば、中期後半関東地方の加曽利E式では左撚りが優勢で、同東北地方南部の大木式では右撚りが優勢であるとされる。また、羽状縄文土器群には常に左撚りと右撚りの縄を用意して置く第3の癖（筆者註：左撚り、右撚りに偏るのは、第1、第2の癖ということか）があるとするが、円筒下層式c、dでは羽状構成をとるもの以外は右撚りが多いとのことである。なお、左撚り・右撚りの撚り方向は1段の縄で決定される。

5　これら軸の縄不明とした附加条は網目状には交差していないので第3種になるものは含まないと考えられる。本来は第1種あるいは第2種のいずれかに編入されるものである。

6　『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編1』P.39の註1で記載した。

7　関山式の遺制が認められる県内出土資料の好例として流山市若葉台遺跡011住居跡1が挙げられる。実見した結果、本例との相違点として刷毛目状沈線の喪失、平行沈線文による鋸歯状モチーフの口縁部での拡大化、地文が還付末端ではないことなどを挙げることができた。なお、この地文は報告では直前段合撚（異条）とされるが、附加条第1種と判定した。

8　外底面への施文は、黒浜式を5段階に細分した新井和之氏が第1段階に認められる要素の一つとしたもので、多くは縄文の施文である。原畑遺跡でも分類の際に注意を払ったが、抽出できたのは図示した資料1点のみであった。資料実見に来られた新井氏の指摘もあったので、遺漏がないよう掲載資料を再観察したが追加し得なかった。また、新井氏は底部縄紋の施文後、縄文をナデ消すものが存在することを指摘しているが、本遺跡資料の実見の際、そのことについての言及はなかったので、含まれていないと判断して良いかもしれない。

9　運田市教育委員会田中和之氏、小宮雪晴氏にお世話になり実見することができた。

10　従来、若葉台遺跡002住居跡1は有尾系土器の県内出土資料の好例として挙げられてきた。実見の結果、この土器は口縁端部が狭小な羽状縄文帯となり、口縁部には結節沈線が関山Ⅱ式から繋がるような鋸歯状モチーフを描出している点でやや異質と感じられた。

11　鋸歯状文、瘤状貼付文を有す平行沈線文の構成が逆位であること、結節沈線文は用いられていないなど異

なる点は多いが、黒浜遺跡群宿上貝塚第３号住居跡例が類似している。註９のとおり実見することができた。

12　このような突起が付く例が有尾系土器にあることを、資料実見に来られた新井和之氏より伺った。

13　新井和之氏が黒浜式第Ⅰ段階のメルクマールの一つとして、口唇部装飾に言及している（新井2010他）。

14　新井和之氏と奥野麦生氏、田中和之氏、小宮雪晴氏の黒浜式細分案の相違については、それぞれの論文を読んで認識はしている。現段階では内容の咀嚼が不十分でコメントできる立場ではないため、第Ⅰ～Ⅴ段階や古・中・新段階という区分は用いない。

引用参考文献（著者五十音順）

新井和之 1977「植房貝塚の土器とその周辺」『奈和』15　奈和同人会

1979「黒浜式土器小考」『日本考古学研究所集報Ⅱ』　日本考古学研究所

1979「黒浜式土器研究の問題点」『土曜考古』創刊号　土曜考古学研究会

1982「５ 黒浜式土器」『縄文文化の研究３　縄文土器Ⅰ』雄山閣出版

1984「ａ考察　土器について」『佐倉市鏑木諏訪尾余遺跡』鏑木諏訪尾余遺跡研究会

1985「黒浜式研究の現状と今後の課題－黒浜式土器は２細分でも良いのか－」『土曜考古』10 土曜考古学研究会

1986「文様系統論　関山式土器－その成立と終末－」『土曜考古』17　土曜考古学研究会

1986「関山・黒浜式土器認識に関する一考察－植の内遺跡ⅠA住居址出土土器を中心とした黒浜式土器４細分案へのコメント－」『竹篦』創刊号　北総たけべらの会

1988「黒浜式土器段階分けの発想法」『奈和』26 奈和同人会

1990「内野式土器・水子式土器及び相互刺突文の再検討」『奈和』28 奈和同人会

1993「千葉県勝浦市上長者台遺跡出土の黒浜式土器再検討」『縄文時代』４ 縄文時代文化研究会

1999「関東地方　前期（黒浜式）」『縄文時代』10 縄文時代文化研究会

2000「関東地方周辺における縄文前期中葉の縦区画とコンパス文に関する－考察－黒浜式土器第Ⅲ段階の成立と展開－」『奈和』38 奈和同人会

2010「黒浜式土器第Ⅰ段階、第Ⅱ段階口唇部装飾、底部底面施文の再検討」『奈和』47 奈和同人会

我孫子市教育委員会 1976『我孫子市柴崎遺跡調査報告書（第三次・第四次）』

奥野麦生 1989「黒浜式土器の系統性とその変遷」『土曜考古』13 土曜考古学研究会

上守秀明 2010「下総台地北西部における縄文前期の遺跡分布と生産活動－基礎データの提示と展望－」『房総の考古学　史館終刊記念』

小宮雪晴 1996「黒浜式土器の構成と展開に関する一考察〈黒浜貝塚群出土土器を中心として〉」『埼葛地域文化の研究　下津弘君・塚越哲也君追悼論文集』

埼葛地区文化財担当者会 1999『埼葛の縄文前期－埼葛地区縄文時代前期調査報告書－』埼葛地区文化財担当者会報告書３

埼玉県教育委員会 1987『黒浜貝塚群宿上貝塚・御林遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査報告16

（財）千葉県都市公社 1974『柏市鴻ノ巣遺跡』

1975『飯山満東遺跡』

（財）千葉県教育振興財団 2009『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書２－柏市駒形遺跡－縄文時代以降編１』

(財) 千葉県文化財センター 1984「花前Ⅰ・中山新田Ⅱ・中山新田Ⅲ」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
1986「谷・上貝塚・若葉台・塚 (1)・(2)・馬土手 (1)・(2)・(3)」『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』
1989「関宿町飯塚貝塚」「下総利根大橋有料道路建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」
(財) 福島県文化センター 1994「塩喰岩陰遺跡」「東北横断自動車道遺跡調査報告25」
遠谷昌彦 2001「関東・中部・北陸地方の大木2a式土器の研究－土器型式から見た周辺地域との交流－」『縄文時代』12 縄文時代文化研究会
田中和之 2008『縄文土器 前期』『総覧縄文土器』アム・プロモーション
谷藤保彦他 1997『第10回縄文セミナー 前期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
鳥羽政之 1996「関山式から黒山式へ－古東京湾岸を中心に－」『埼葛地域文化の研究 下津弘君・塚越哲也君追悼論文集』
野田市遺跡調査会 1987『千葉県野田市楢の内遺跡』第Ⅳ次発掘調査
野田市楢の内遺跡調査会 1981『野田市楢の内遺跡発掘調査報告書』
西村正衛 1984『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心にして－』早稲田大学出版部
蓮田市教育委員会 2005『～黒浜遺跡群～ 宿浦遺跡 宿上遺跡 宿下遺跡 天神前遺跡』
原町西貝塚調査団他 1985『原町西貝塚発掘調査報告書』
松戸市遺跡調査会 2006『千葉県松戸市八ヶ崎遺跡』－第1・2地点発掘調査報告書－
松戸市役所 1961「中金杉木戸口遺跡・二ッ木溜台遺跡」『松戸市史 上巻』
山内清男 1979『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

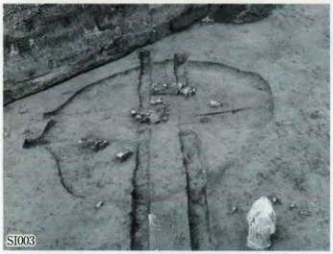
写　真　図　版

花前Ⅰ遺跡
花前Ⅱ遺跡
花前Ⅲ遺跡
矢船Ⅰ遺跡
矢船Ⅱ遺跡
駒形遺跡
富士見遺跡
大松遺跡
原畑遺跡
小山台遺跡
寺下前遺跡
宮前遺跡
八反目台遺跡

遺跡周辺航空写真

SI001

SI002


SI003

SI004

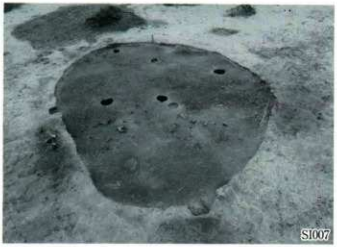
SI005遺物出土状況

SI005

SI006遺物出土状況

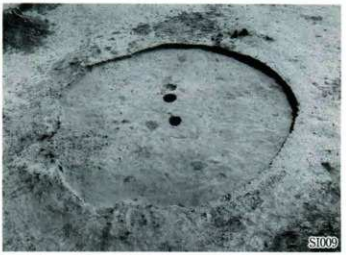
SI006

竪穴住居跡 1


SI007

SI008遺物出土状況

SI008


SI009

SI010

SI011貝層検出状況

SI011

SI012

竪穴住居跡２

SI012

SI013

SI014遺物出土状況

SI014－1

SI014－2

SI015

SI016

SI017

竪穴住居跡３

SI018

SI019

SI020

SI021

SK002遺物出土状況

SK003遺物出土状況

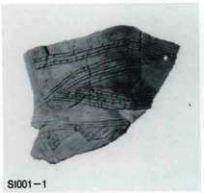
SK004

SK006

SK007

SK008

竪穴住居跡４・土坑・陥穴


SI001－1

SI002－3

SI003－6

SI001－2

SI002－4

SI003－12

SI001－13

SI002－12

SI003－13

SI001－16

SI002－1

SI003－5

SI003－16

縄文土器 1

SI003－19

SI003－20

SI003－24

SI003－29

SI003－36

SI003－41

SI003－42

SI003－48

SI003－50

SI005－3

SI005－4

SI005－5

SI005－6

SI005－7

縄文土器２

SI005－11

SI005－14

SI005－19

SI005－23

SI005－24

SI005－28

SI006－3

SI008－4

SI008－7

SI008－28

SI008－17

SI008－18

SI008－21

SI008－27

縄文土器３

SI008－29

SI008－30

SI008－31

SI008－32

SI008－33

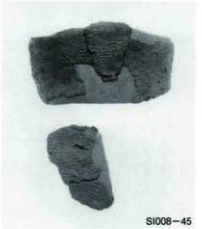
SI008－35

SI008－38

SI008－40

SI008－41

SI008－42


SI008－45

SI011－1

SI011－11

SI011－18

縄文土器 4

SI011－24

SI011－52

SI014－17

SI011－25

SI012－12

SI014－18

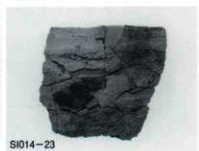
SI011－26

SI013－4

SI014－22

SI011－40

SI014－7


SI014－23

縄文土器５

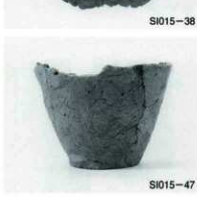
SI014−26

SI015−11

SI015−38

SI014−27

SI015−13


SI015−47

SI014−34

SI015−20

SI016−3

SI015−31

SI016−8

SI014−43

SI014−46

SI015−32

SI016−10

縄文土器6

SI016−12

SI016−13

SI016−22

SI016−28

SI016−29

SI016−32

SI016−36

SI016−46

SI016−50

SI017−3

SI017−6

SI017−15

SI017−18

SI019−4

SI019−7

SI019−36

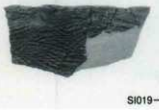
SI019−41

SI019−19

SI019−42

SI019−24

SI019−47


SI019−49

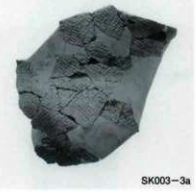
SI019−31

SI019−51

SK002−1

SK003−1

SK003−2


SK003−3a

SK003−3b

縄文土器 8

SK004－13

SK004－20

遺構外37

遺構外40

遺構外48

遺構外49

遺構外50

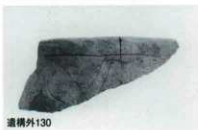
遺構外55

遺構外72

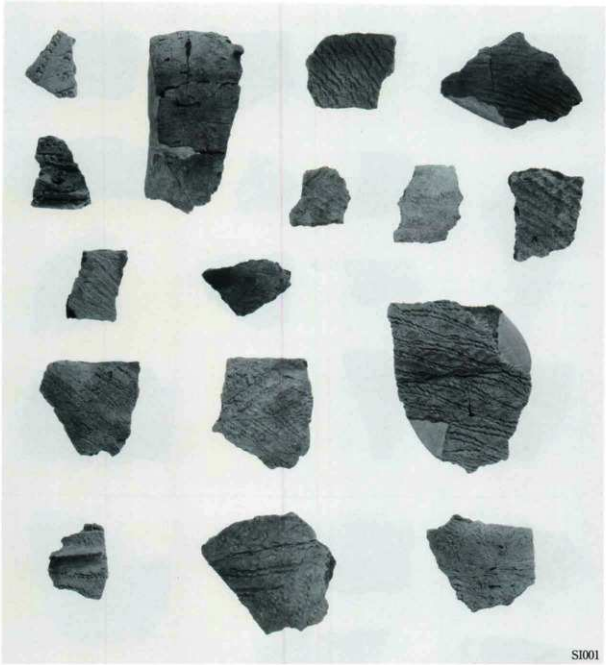
遺構外73

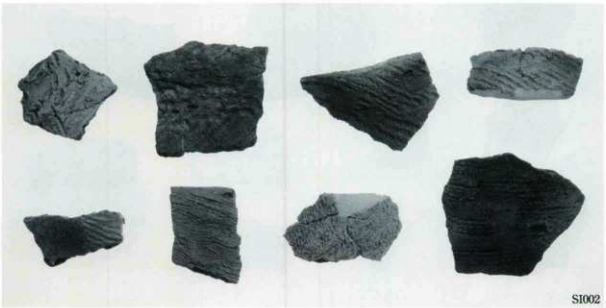
遺構外86

遺構外87

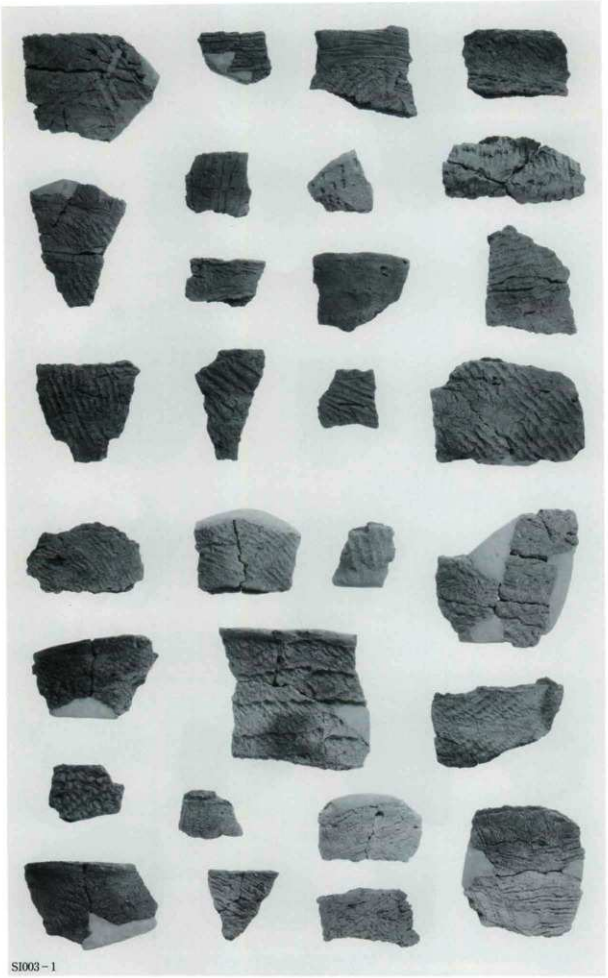

遺構外130

縄文土器 9



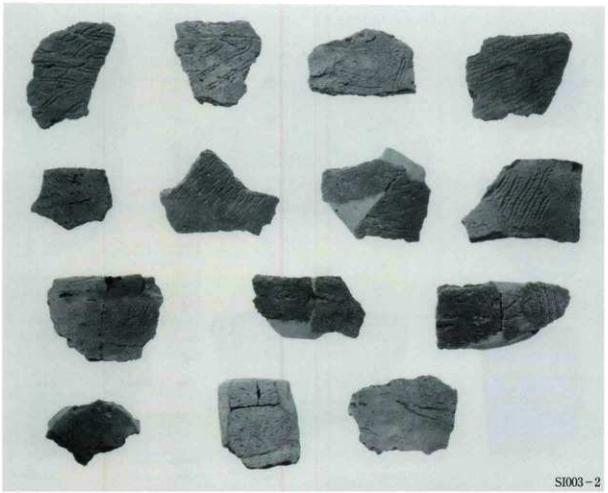


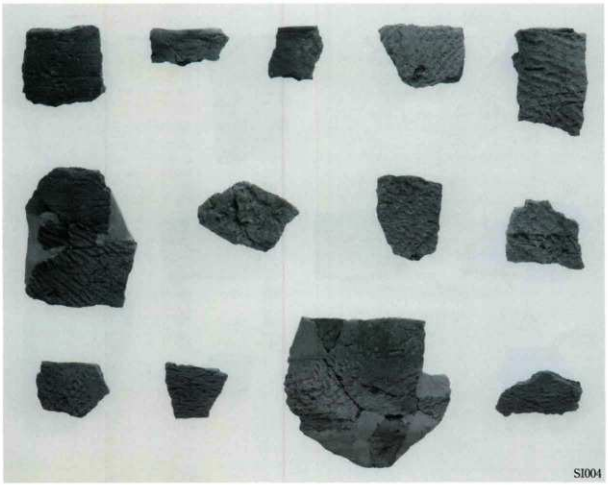
縄文土器10



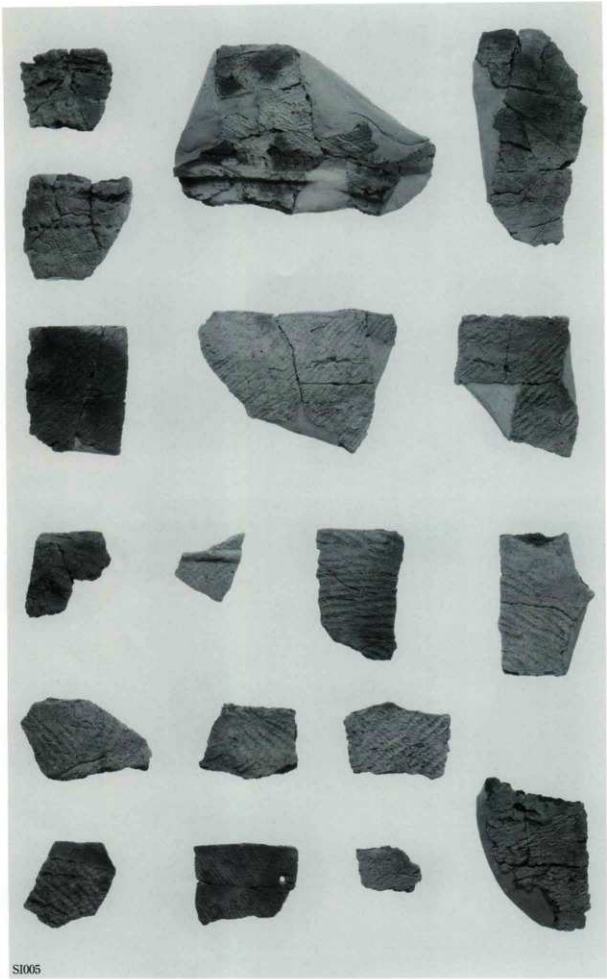
SI003－1

縄文土器11

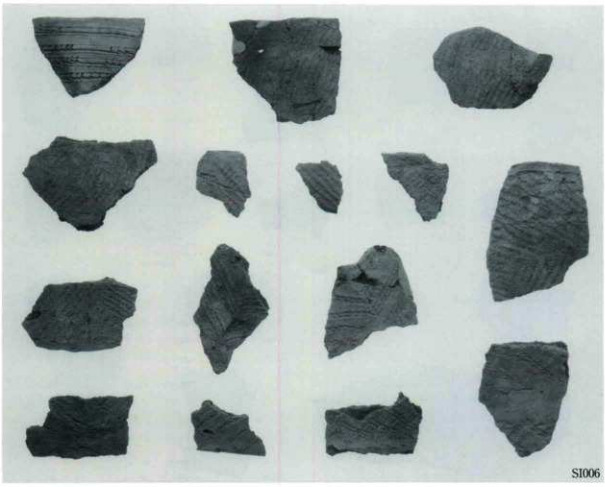


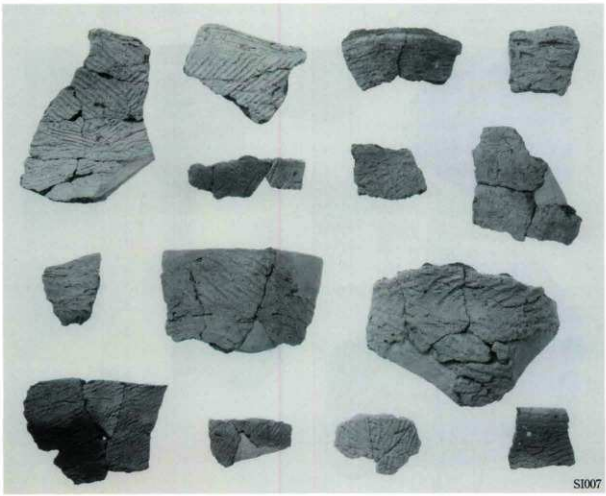


縄文土器12

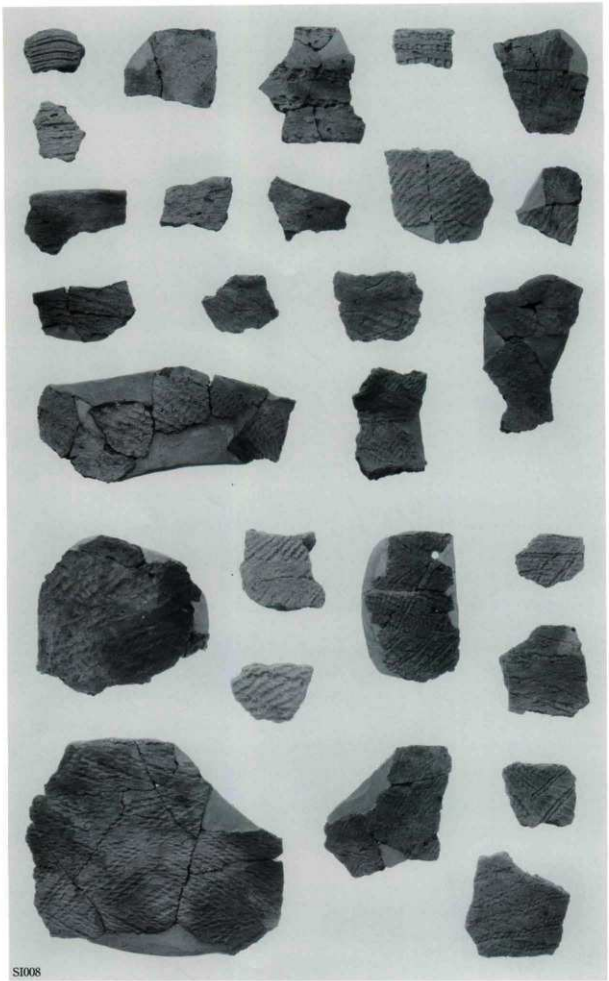


縄文土器13

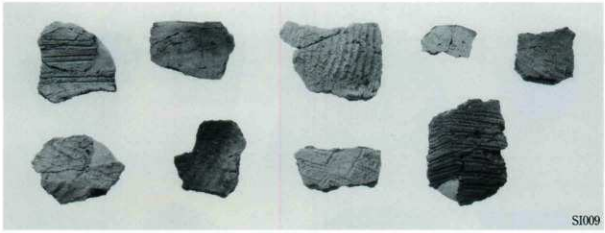


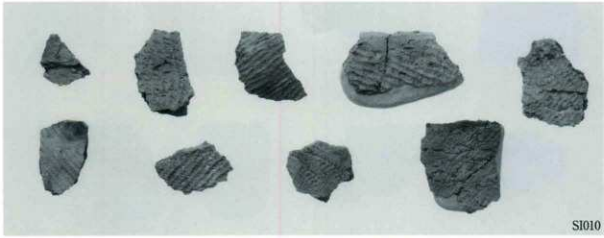


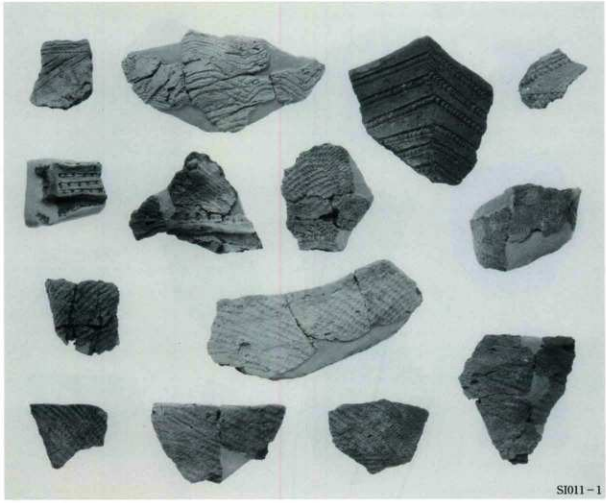
縄文土器14



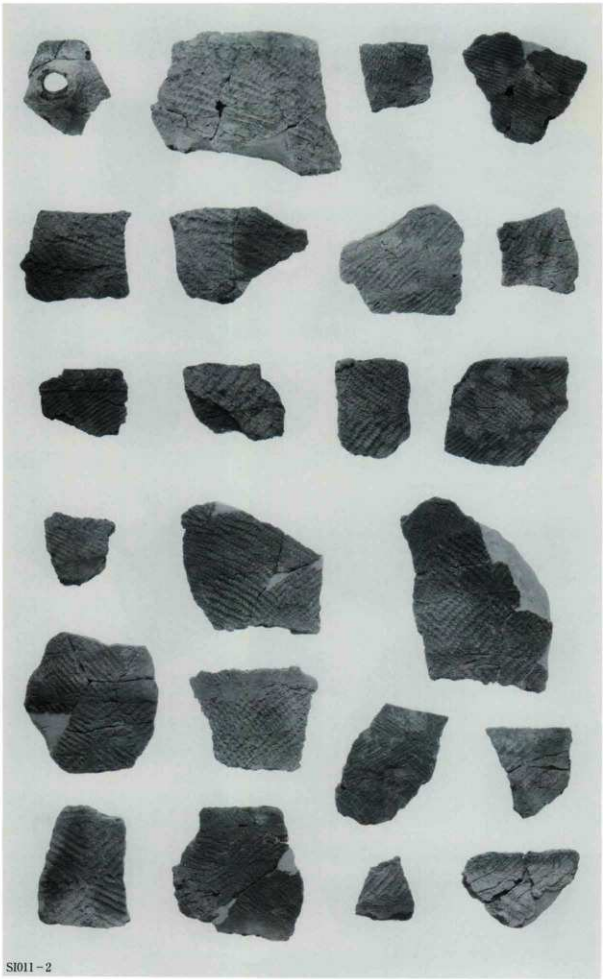
縄文土器15





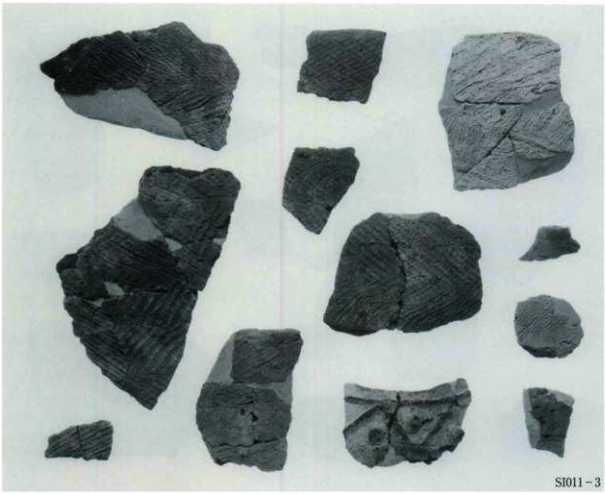


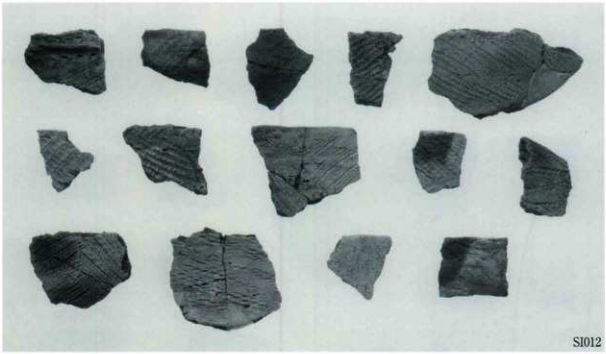
縄文土器16



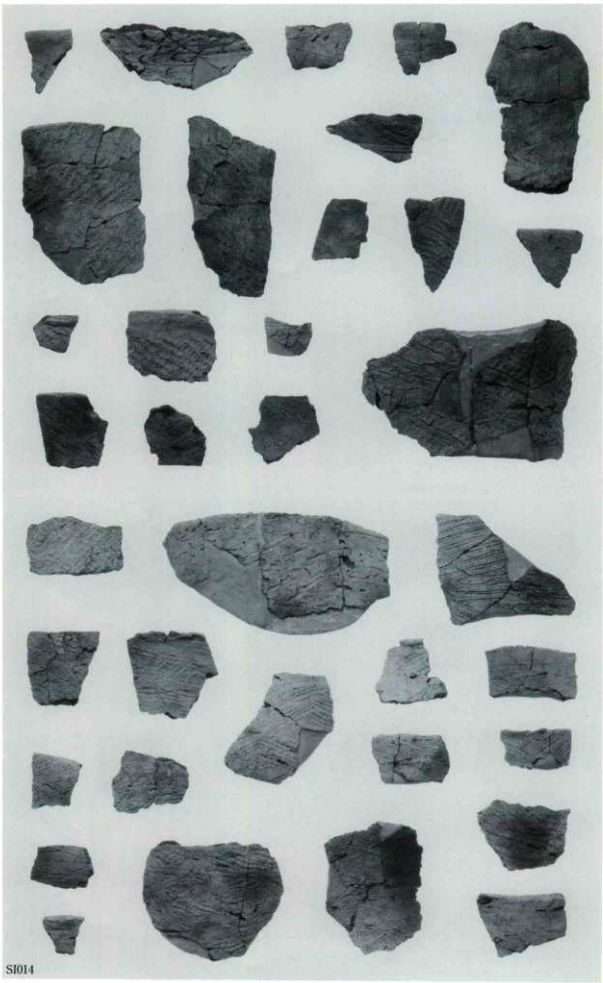
SI011－2

縄文土器17

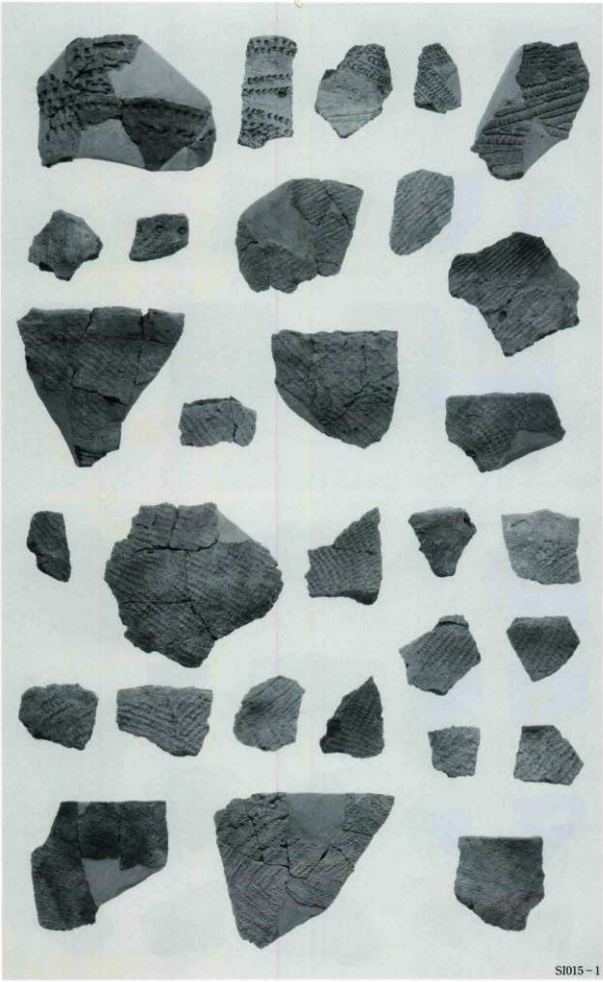




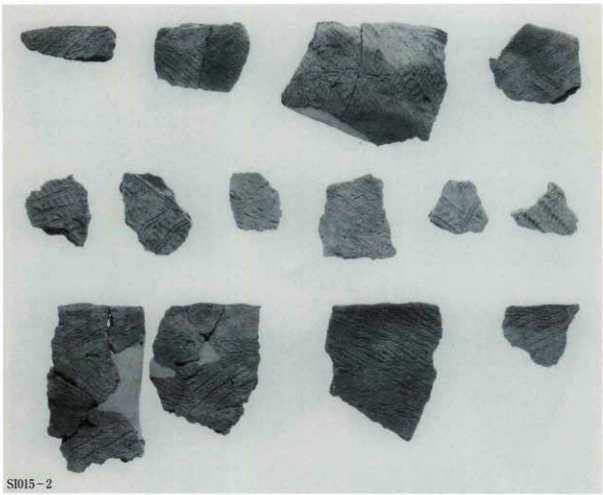
縄文土器18



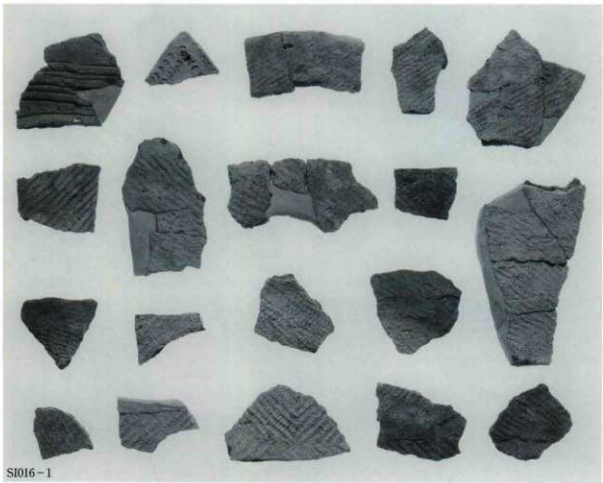
縄文土器19



縄文土器20

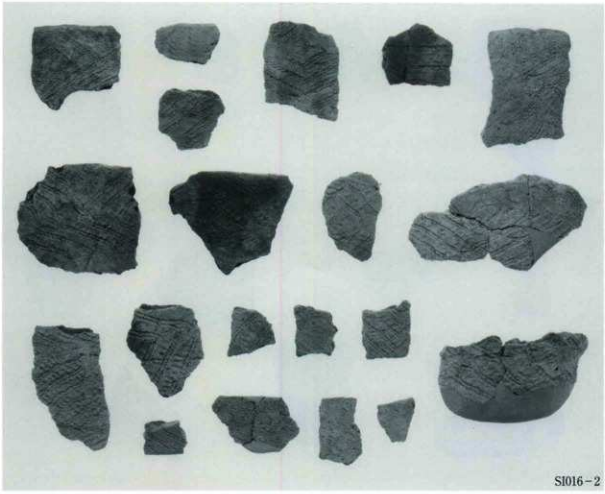


SI015－2

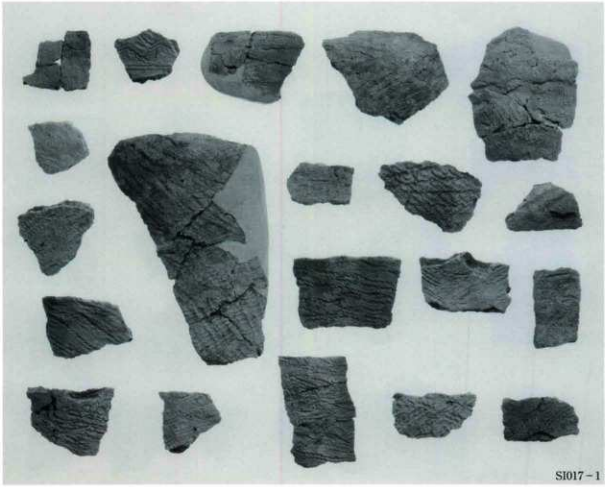


SI016－1

縄文土器21



SI016－2

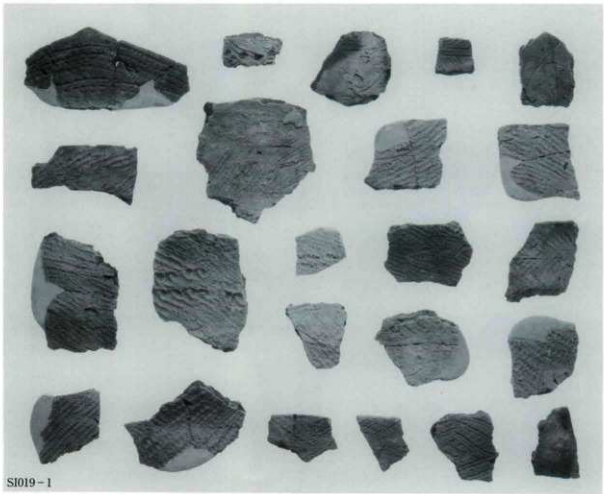


SI017－1

縄文土器22

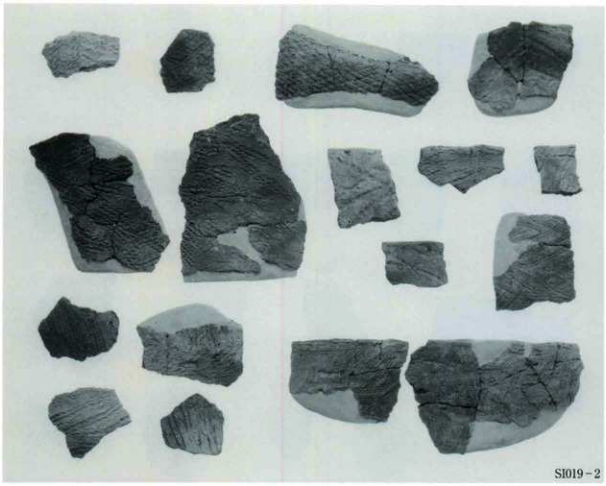
SI017－2

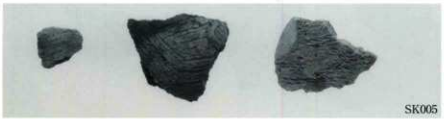
SI018

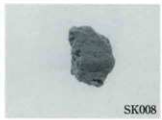


SI019－1

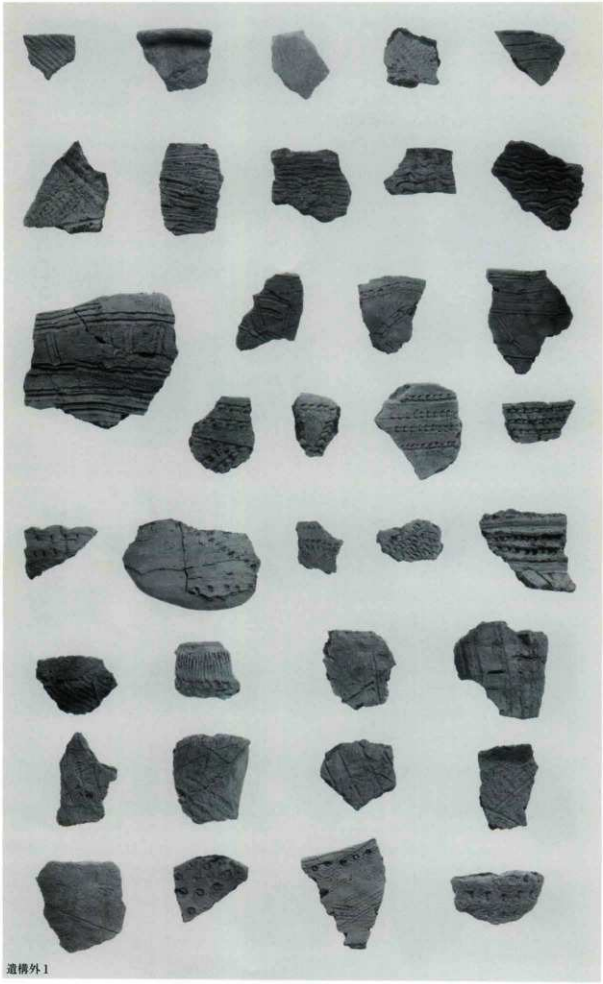
縄文土器23





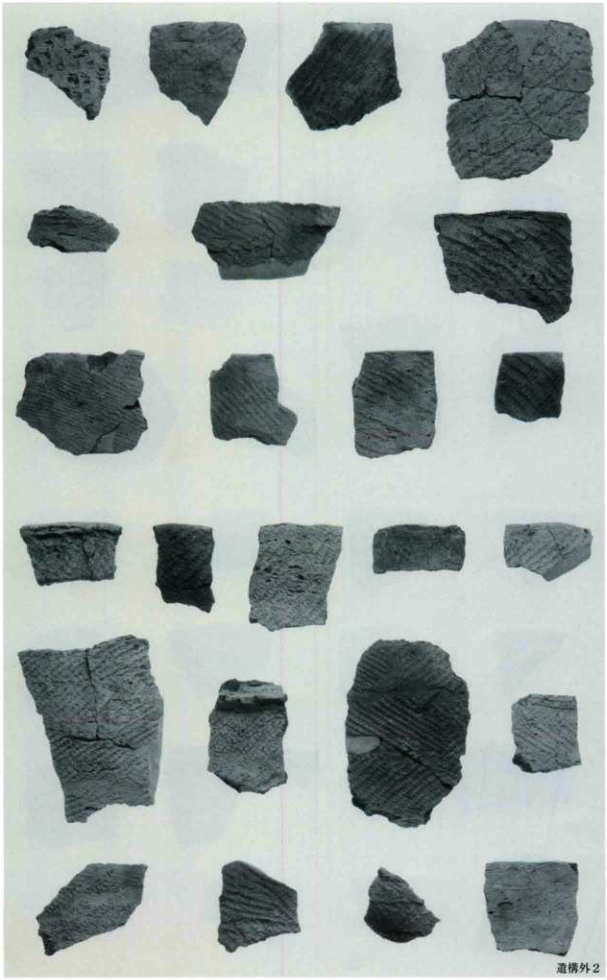


縄文土器24

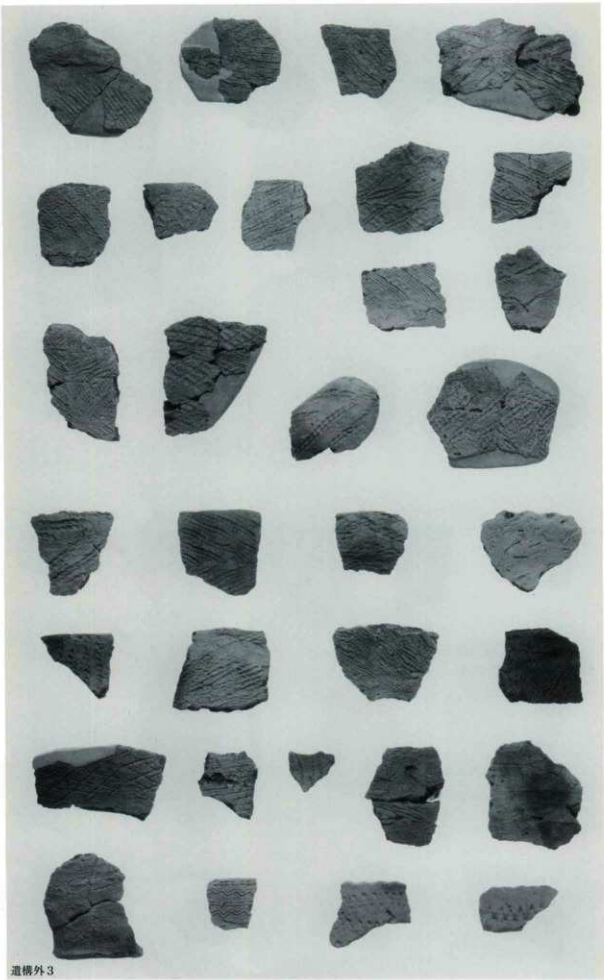


遺構外 1

縄文土器25

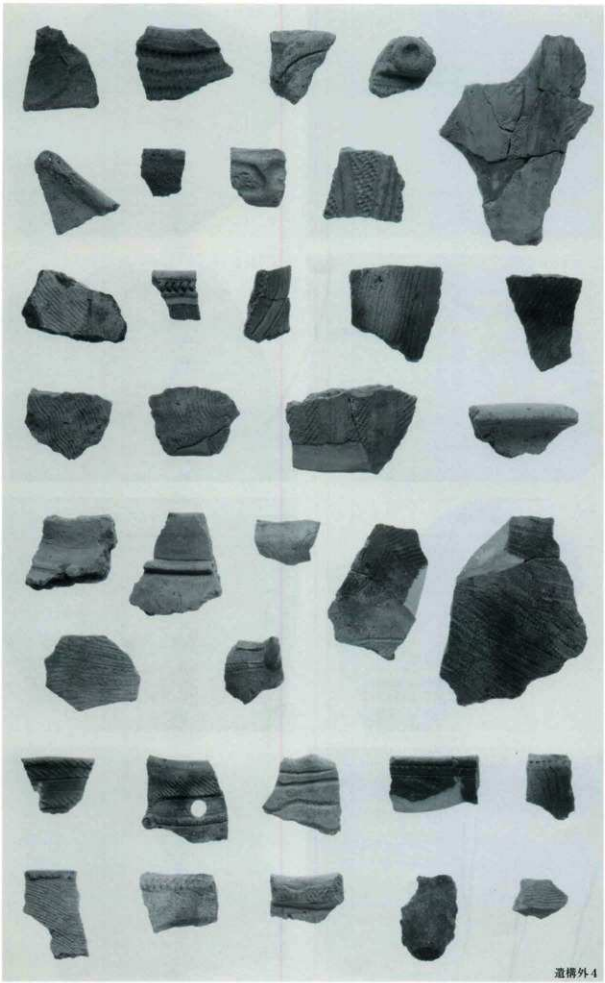


縄文土器26



遺構外3

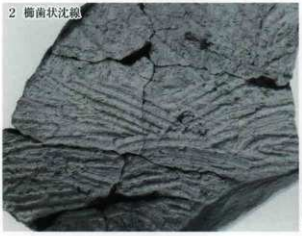
縄文土器27



縄文土器28

1 鋸歯+山形沈線

5 C字爪形文


2 櫛歯状沈線

6 羽状縄文（0段多条・環付未端）

3 集合波状沈線文

7 附加条 第1種

4 大形爪形文（結節沈線文）

8 附加条 第2種

文様拡大写真（1）

1 附加条 第2種

5 撚糸文

2 附加条 第3種

6 網目状撚糸文

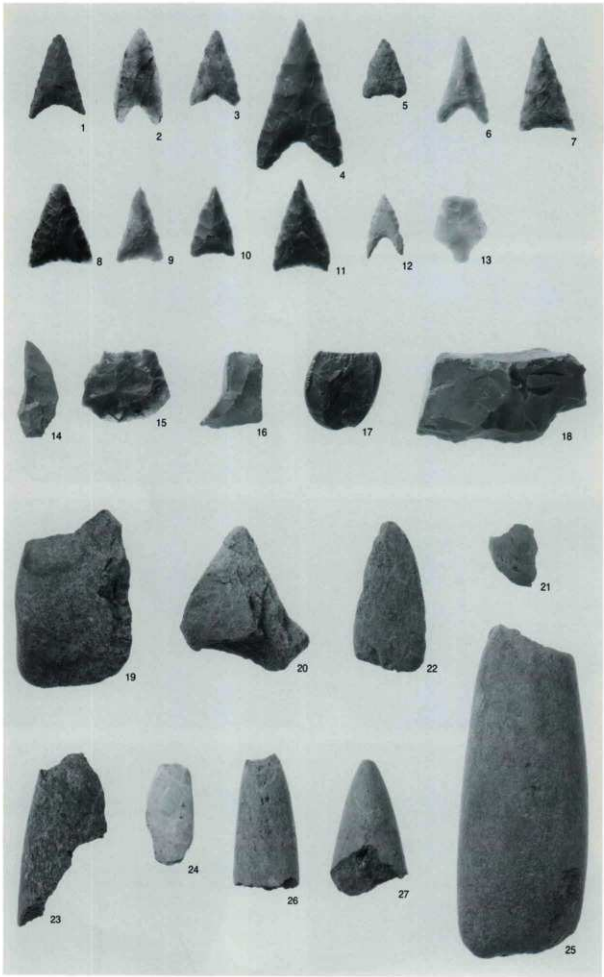
3 附加条 軸縄不明

7 前々段合撚

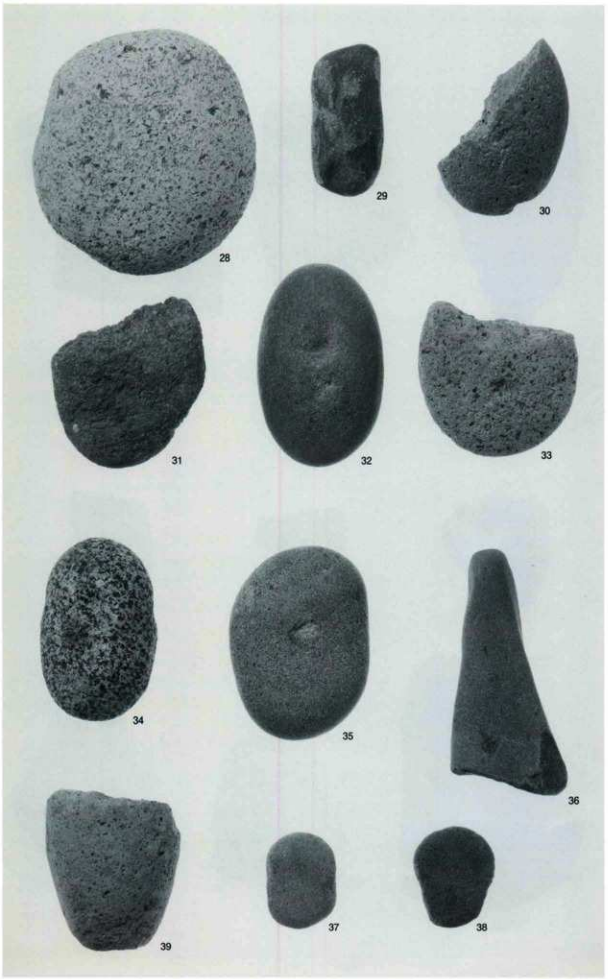
4 附加条 軸縄不明

8 貝殻背圧痕文

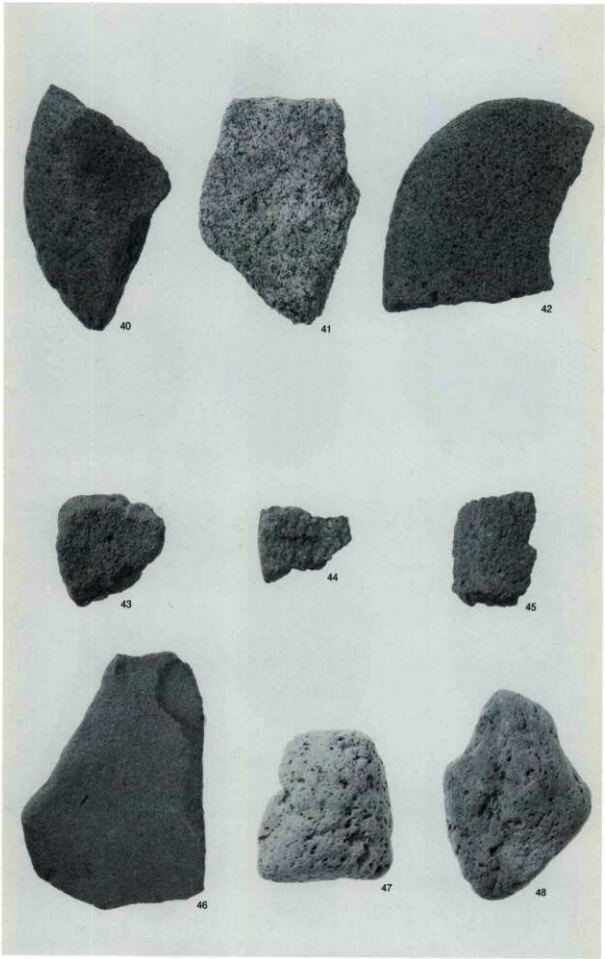
文様拡大写真（2）



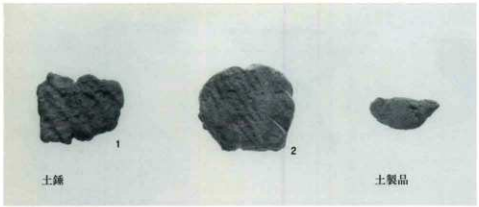
石器1



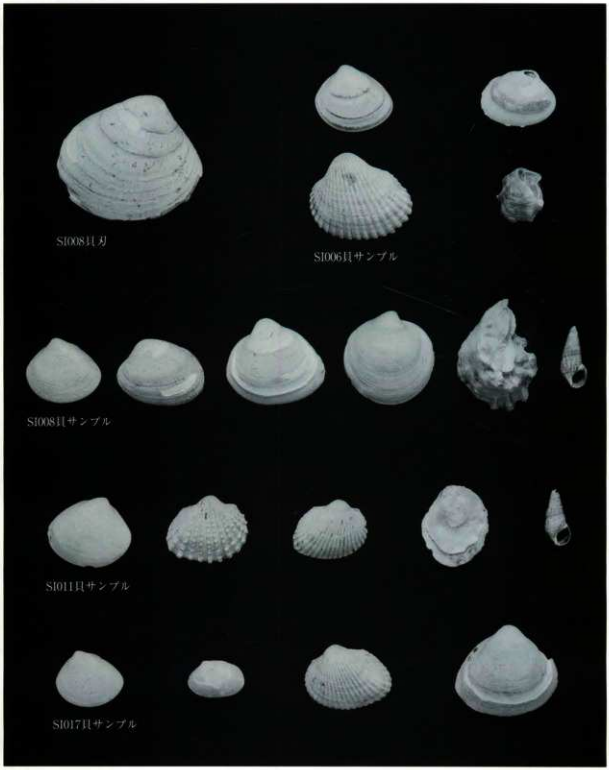
石器2



石器3


1
2
土錘
土製品

耳飾り


SI008貝刃
SI006貝サンプル
SI008貝サンプル
SI011貝サンプル
SI017貝サンプル

土製品・貝刃・貝類

SI020－1

SI020－2

SI021－1

SI021－2

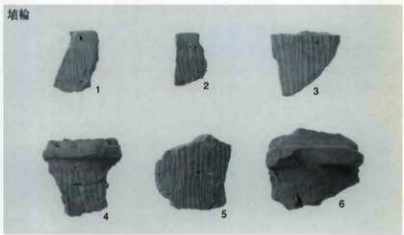
SI021－3

SI021－4

SI021－5

SI021－7

SI021－8



SI021－10

SI021－11

SI021－12

古墳時代出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かしわほくぶひがしちくまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	柏市原畑遺跡（縄文時代以降編１）
巻次	3
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告
シリーズ番号	第660集
編著者名	上守秀明・落合章雄・大岩桂子
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団　文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地の２　　TEL　043（424）4848
発行年月日	西暦2011年３月23日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
原畑遺跡（１）～（23）	柏市小青田字小船新田40ほか	12217	021	35度54分59秒	139度57分17秒	19990913～20091130	12,239㎡（上層）	土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原畑遺跡（１）～（23）	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡19軒、土坑５基、陥穴３基、貝層６か所	縄文土器、石器、貝刃、土器片錘	本遺跡は、いわゆる縄文海進から海退に転換する縄文時代前期中葉黒浜式期の集落跡である。黒浜式の古手に比定できる良好な土器群が出土しており、該期土器研究の進展に係る貴重な資料の提供ができた。また、遺構内貝層も形成されており、調査事例の少ない古鬼怒湾区に位置する柏北部東地区遺跡群において、生産居住様式の解明に係る資料の蓄積もなされた。
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡２軒	土師器	

要約	前期中葉の黒浜式期の集落跡で、今回報告する範囲は遺跡全体の約57%ほどである。古鬼怒湾から湾入する支谷に面する該期集落跡は、富士見遺跡を主として駒形遺跡、大松遺跡、小山台遺跡などが挙げられるが、これらの遺跡群の中では原畑遺跡が最も谷奥に位置している。

千葉県教育振興財団調査報告第660集

柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書3

―柏市原畑遺跡―

縄文時代以降編1

平成23年3月23日発行

編　集　財団法人 千葉県教育振興財団 文化財センター

発　行　独立行政法人 都市再生機構千葉地域支社
千葉市美浜区中瀬1－3

財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印　刷　株式会社 正文社
千葉市中央区都町1－10－6